

四季島皇国戦記

阿鬼羅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主神により転生した主人公中津彼は転生特典を使って皇国をどう導くのだろうか

pixivにも投稿をはじめました2021/06/06

目次

Hearts of Iron IVに中津が居たら

近江型戦艦について

Prologue

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

1

8

16

24

33

40

48

53

58

64

69

74

83

89

96

103

109

117

122

131

137

142

147

152

| | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|
| 第36話 | 第35話 | 第34話 | 第33話 | 第32話 | 第31話 | 第30話 | 第29話 | 28話 | 第27話 | 第26話 | 第25話 | 第24話 | 第23話 | 第22話 |
| 263 | 254 | 246 | 240 | 233 | 225 | 218 | 212 | 204 | 197 | 190 | 181 | 175 | 168 | 158 |

Hearts of Iron IVに中津が居たら

政治顧問中津阿鬼羅（皇国軍最大の商会の長にして後援者であり皇国の真支配者）

消費財の需要：－30%

全ユニットの生産時間とコスト：－80%

全ユニットの指揮統制率：＋50%

全ユニットの士気：＋30%

国民不満度の上昇率：－50%

全研究時間短縮：＋10%

全研究の先行ペナルティーの解除

建設速度上昇：500%

同盟国の民需工場＋3

中核州の人的資源増加率：＋20%

非中核州の人的資源増加率：＋5%

民需工場の出力：＋300%

軍需工場の出力：＋200%

パルチザンの発生率：－200%

特殊イベント開放

企業

中津商会

全研究速度＋500%

特殊イベント謎の鳥謎の空間

発生条件政治顧問に中津がいる事

選択肢

放置しておけ

何も起こらない

調査しよう

時間断層工廠の発見

特殊イベント時間断層工廠

発生条件謎の島謎の空間で選択肢調査しようを選ぶ

攻撃を受けない軍需工場+1000

攻撃を受けない民需工場+500

攻撃を受けない造船所+200

全資源毎日+100

研究クローンの作成開放

研究クローン作成時間の短縮開放

研究クローン作成コストの減少開放

生産タブに翔鶴型空母8隻近江型戦艦8隻大和型戦艦4重巡洋艦

24隻その他多数が完成度80%で出現

特殊イベントクローン製造

発生条件研究クローンの作成を研究かつ後研究クローン作成時間の短縮及び研究クローン作成コストの減少を研究していない場合毎年4/1に起きる（初回は研究完了の5日後に）

選択肢

やらない

全資源+30

すぐに始めよ

次の選択肢に

選択肢

どの程度

大量にだ

全資源—1000

ある程度でいい

全資源—100

特殊イベント小規模クローン軍誕生

発生条件クローンの製造である程度、を選び2年経過する

人的資源1M増加

特殊イベントクローン軍団誕生

発生条件クローンの製造で大量にだ、を選び2年経過する

人的資源10M増加

特殊イベント短縮型クローン製造

発生条件研究クローン作成時間短縮を研究済みでクローン作成コストの減少を研究していない場合

選択肢

やらない

全資源+30

すぐに始めよ

次の選択肢に

選択肢

どの程度

大量にだ

全資源—1000

ある程度でいい

全資源—100

特殊イベント小規模クローン軍誕生

発生条件短縮型クローン製造である程度、を選び1年経過する

人的資源1M増加

特殊イベントクローン軍団誕生

発生条件短縮型クローン製造で大量にだ、を選び1年経過する

人的資源10M増加

特殊イベント低コスト型クローン製造

研究クローン作成コストの減少を研究済みでクローン作成時間短縮を研究していない場合

選択肢

やらない

全資源+30

すぐに始めよ

次の選択肢に

選択肢

どの程度

大量にだ

全資源—800

ある程度でいい

全資源—80

特殊イベント小規模クローン軍誕生

発生条件短縮型クローン製造である程度、を選び2年経過する

人的資源1M増加

特殊イベントクローン軍団誕生

発生条件短縮型クローン製造で大量にだ、を選び2年経過する

人的資源10M増加

特殊イベント低コスト制作時間短縮型クローン製造

研究クローン作成コストの減少及びクローン作成時間短縮研究し

た場合

選択肢

やらない

全資源+30

すぐに始めよ

次の選択肢に

選択肢

どの程度

大量にだ

全資源—800

ある程度でいい

全資源—80

特殊イベント小規模クローン軍誕生

発生条件低コスト制作時間短縮型クローン製造である程度、を選び

1年経過する

人的資源1M増加

特殊イベントクローン軍団誕生

発生条件低コスト制作時間短縮型クローン製造で大量にだ、を選び

1年経過する

人的資源10M増加

特殊イベントフィンランドとの協定

発生条件日本がソビエトと同盟を結んでいない

選択肢

フィンランドに協定参加を呼びかけよう

フィンランドでイベント日本との協定が発生ソビエトとの仲が―

3される

何もしなくて良い

何も起きない

特殊イベントフィンランドが協定を受諾

フィンランドから軍事通行権を入手ヘルシンキから補給を受けられるようになる及びヘルシンキに幅20の日本軍歩兵師団(歩兵4中戦車3砲兵2支援中隊砲兵1対空1整備兵1対戦車1野戦病院1)2個が出現

ヘルシンキにフィンランド軍歩兵師団(歩兵7砲兵2支援中隊砲兵1対戦車1対空1)4個が出現

フィンランドに対してレンドリースが可能に

イベントフィンランドに追加支援

発生条件フィンランドが日本と同盟状態かつ日本がレンドリースを行っている

選択肢

支援は現状で十分だ

何も起きない

さらなる支援を

次の選択肢が出現

大規模義勇軍を送ろう

人的資源が40K歩兵装備が3.5K野戦砲420対空砲100
対戦車砲120が消費フィンランド軍に5個歩兵師団(歩兵7砲兵2
支援中隊砲兵1対空1対戦車1)が出現

小規模義勇軍を送ろう

人的資源が1・6K歩兵装備が1・4K野戦砲168対空砲40
対戦車砲48が消費フィンランド軍に2個歩兵師団(歩兵7砲兵2支
援中隊砲兵1対空1対戦車1)が出現

イベント枢軸国を支援

選択肢支援すべき

造船所20箇所が使用不能に

ドイツ、イタリアでイベント日本の支援が発生

支援しない

何も起きない

イベント枢軸国に艦隊到着

使用されていた造船所20箇所が使用可能にドイツ、イタリアに空
母を含む艦隊が出現両国から民需4を5年間入手

イベントプランA発動

条件アメリカと戦争状態に無い

中津が政治顧問

選択肢

発動しなくていい

何も起きない

プランA発動

アメリカで内乱発生のイベントが発生

インドで内乱のイベントが発生

オーストラリアで内乱のイベントが発生

イベントアメリカ各地で内乱

ミズーリでアメリカ連邦が独立

テキサスで南部解放戦線が独立

イベントインド内乱

ムンバイ、デリー、ナグプールでインド解放軍が独立

イベントオーストラリア内乱

シドニー、ダーウィンなどでオーストラリア独立戦線が独立

イベントカナダ内乱

- ケベックでフランスケベック独立派が独立
- イベント対日最後通牒
- 発生条件
 - アメリカか日本と戦争状態に無い
 - 国内で内乱が起きていない
- 選択肢
- 最後通牒を叩きつけろ
- 日本でアメリカの最後通牒のイベントが発生
- 最後通牒はしまっておけ
- 日本との関係が+2
- イベントアメリカからの最後通牒
- 発生条件
 - アメリカがイベント対日最後通牒で叩きつけろを選択
- 選択肢
- 受け入れろ
- 建造中の艦艇がすべて破棄される
- 満州国が中華民国に
- 受け入れられない
- 12月8日に対連合戦開戦
- 全ユニットの攻撃に25%のバフ
- 将軍
- 島原進
- スキル8
- 攻撃7
- 防御5
- 計画5
- 兵站6
- 背景機甲士官

近江型戦艦について

「近江型が揃えば機動艦隊の守りは盤石となるだろう」

中津この戦艦の建造数と建造期間を見て

「戦艦が簡単に沈むか！」

河内の中田艦長

ブリテン島沖海戦時河内艦橋で焦る砲術長に

「何が戦艦はまだ4隻しか完成していないだ、16隻も戦列に入っていないではないか怠慢な情報部め」

ウイリアム・パイ提督

開戦劈頭大和型4隻と近江型12隻が戦列に入っていることを報告してきた情報に対して

「もはや彼らがロイヤルネイビーだ、いやエンペラーネイビーとでも言えればいいのだろう」

ウィンストン・チャーチル

1944年戦勝観艦式揃う4隻の大和型と16隻の近江型と多数の大型装甲空母、非装甲空母を中核とした四季島皇国艦隊を見て

「四季島皇国海軍の助力あれば世界に我らの鉤十字の旗を立てることができる」

第一次遣欧艦隊を観閲した翌日の閣議で一言

アドルフ・ヒトラー

「ビスマルクの後継艦は近江型がいいのではないのか？」

汎用性の高さや安価で建造できることの書かれている近江型の販売カタログを見ながら

ドイツ海軍高官

「取り敢えず秩父型を購入してもらいたい、アレがあれば高価なビスマルク級を量産しろとかいう馬鹿を黙らせれます」

42年初頭通商破壊作戦に使うための艦隊増強と近江型購入を願っている海軍高官に頭を悩ませる財務省役人が上司に書いた書簡より

近江型戦艦四季島皇国海軍の量産型戦艦

海軍にて16隻準同型艦としてヴィシー・ガレア海軍4隻イタロス海軍4隻廉価版の秩父型大型重巡洋艦としてフィラルド等の相互防衛協定国が20隻以上保有するなど多数が建造された

また国内においては通商破壊対策や海上保安庁に初島型大型巡視船として秩父型大型重巡洋艦が設備の入れ替えを行い配備されたりラジコンを取り付けられた機動標的艦として建造された艦もあった

諸元

全長240 m

全幅33 m

喫水4 m

排水量40500トン

主機

艦本式タービン×4基

推進器

スクリュープロペラ×4軸

18万馬力

速度31ノット

装甲（数値はいずれも最大）

舷側 390 mm

甲板 230 mm

主砲防盾 550 mm

水上機5機後に回転翼機（ヘリ）も搭載

開戦時武装

52・5口径41cm3連装砲2基

52・5口径41cm連装砲2基

40口径12・7cm連装高角砲14基28門艦中央両舷に10基

2番3番砲塔基部に2基ずつ

ボ式40mm4連装機関砲20基80門

25mm3連装機銃20基60挺

25mm連装機銃10基20挺

第1次遣欧艦隊仕様（通称改1）

5 2・5 口径 4 1 cm 3 連装砲 2 基

5 2・5 口径 4 1 cm 連装砲 2 基

4 0 口径 1 2・7 cm 連装高角砲 1 2 基 2 4 門艦中央両舷に 8 基 2

番 3 番砲塔基部に 2 基ずつ

ボ式 4 0 mm 4 連装機関砲 2 0 基 8 0 門

2 5 mm 3 連装機銃 2 0 基 6 0 挺

2 5 mm 連装機銃 1 0 基 2 0 挺

8 連装多目的噴進弾投射基 2 基撤去した高角砲跡地に配備

第 2 次遣欧艦隊仕様（通称改 2）

5 2・5 口径 4 1 cm 3 連装砲 2 基

5 2・5 口径 4 1 cm 連装砲 2 基

4 0 口径 1 2・7 cm 連装高角砲 1 2 基 2 4 門艦中央両舷に 8 基 2

番 3 番砲塔基部に 2 基ずつ

ボ式 4 0 mm 4 連装機関砲 2 0 基 8 0 門

2 5 mm 3 連装機銃 2 0 基 6 0 挺

2 5 mm 連装機銃 1 0 基 2 0 挺

8 連装多目的噴進弾投射基 2 基撤去した高角砲跡地に配備

3 式垂直対空誘導噴進弾発射管（VLS） 1 2 セル 3 番砲頭後部と

艦橋後部構造物の間の空きスペースに設置

赤外線誘導基上記誘導噴進弾の誘導機材

解説

1 9 3 0 年代旧式化した金剛型戦艦の代艦として計画された戦艦

建造元は四季島皇国仕様 1 6 隻中 1 4 隻が中津商会、1 隻が三菱重工、1 隻を川崎重工が建造、その速度は総動員を掛けてから建造された 4 隻を半年で完成させられるほど速く戦艦の建造速度としては最速であった

特徴としてはブロック工法を取り入れたことにより 1 0 m 単位での船体の延長縮小、1 m 単位での船幅の変更がある程度可能であり戦後各国に販売された秩父型は船体船幅の縮小型であった。そしてブロック工法使用のため建造に時間を掛けず損傷時もブロックを新し

いものに区画ごと取り替え溶接するため早期復帰が可能であった、実際開戦劈頭の海戦で損傷した若狭を3日で戦列に戻すなどブロック工法を全力でいかしていた

運用と実績

開戦時3個艦隊に12隻が配備され第2機動艦隊配備の4隻はハワイ作戦に投入第7第8艦隊の8隻は南方作戦に投入されシンガポール沖海戦にてプリンス・オブ・ウォールズ、レパルスを大破させアジア艦隊追撃作戦において多数の敵艦を撃沈していた、その後も主要な海戦に参加、太平洋、インド洋、大西洋と世界の海で暴れ回った
また機動艦隊の護衛としても優秀で遣欧艦隊の基幹艦艇として12隻が参加

第1期派遣艦隊所属8隻には艦両舷の高角砲2基を取り外し8連装多目的誘導噴進弾投射機2基設置。

追加派遣の4隻には先の装備に追加して3番砲頭と艦橋後部構造物の間の空きスペースにVLS12セルを設置43年後半から終戦まで運用されたが使用された誘導噴進弾の命中精度の低さと赤外線誘導機材の使いにくさからもつぱら偵察機や重爆撃機対策として使用された。

終戦後には多数の戦艦が退役解体される中各正規艦隊の基幹艦艇として配備を続けレーダーの改装や1部艦では3番砲を取り払い多数のVLSを装備した重防空艦に改装された

秩父型大型重巡洋艦（基本型）

全長200m

全幅29m

喫水3.7m

排水量28500トン

主機艦本式タービン×4基

推進器スクリュープロペラ×4軸

16万馬力

最大速度32ノット

装甲（数値はいずれも最大）

舷側 350 m m
甲鈹 200 m m
主砲防盾 350 m m
水上機5機

武装

50口径31cm3連装砲3基

40口径12.7cm連装高角砲10基20門艦中央両舷に10基

集中配置

ボ式40mm4連装機関砲10基40門

25mm3連装機銃20基60挺

8連装噴進弾投射基2基

秩父型大型重巡洋艦（航路防衛総隊）

全長200m

全幅29m

喫水3.7m

排水量27500トン

主機艦本式タービン×4基

推進器スクリュープロペラ×4軸

16万馬力

最大速力32ノット

装甲（数値はいずれも最大）

舷側 350 m m

甲鈹 200 m m

主砲防盾 350 m m

回転翼機24機

武装

50口径31cm3連装砲2基

40口径12.7cm連装高角砲10基20門艦中央両舷に10基

集中配置

ボ式40mm4連装機関砲10基40門

25mm3連装機銃20基60挺

8連装噴進弾投射基2基

対潜爆雷投射機4基

秩父型大型重巡洋艦（ファイラルド仕様）

全長210 m

全幅29 m

喫水3.7 m

排水量29500トン

主機艦本式タービン×4基

推進器スクリュープロペラ×4軸

16万馬力

最大速度32ノット

装甲（数値はいずれも最大）

舷側 350 mm

甲板 200 mm

主砲防盾 350 mm

水上機5機

武装

50口径31cm3連装砲3基

40口径12.7cm連装高角砲10基20門艦中央両舷に10基

集中配置

ボ式40mm4連装機関砲10基40門

25mm3連装機銃20基60挺

砕氷設備搭載

秩父型大型重巡洋艦（ドイツ型）

全長200 m

全幅29 m

喫水3.7 m

排水量28500トン

主機艦本式タービン×4基

推進器スクリュープロペラ×4軸

16万馬力

最大速力32ノット

装甲（数値はいずれも最大）

舷側 350 m m

甲板 200 m m

主砲防盾 350 m m

水上機5機

武装

52口径28.3 cm 3連装砲3基

55口径15 cm 単装速射砲12門

65口径10.5 cm 連装高角砲10基 20門 艦中央両舷に10基

集中配置

ラインメタル37 mm 連装機関砲10基 20門

20 mm 4連装機銃20基 80挺

近江型の廉価版武装から時折巡洋戦艦と呼称されるが四季島皇国海軍での扱いは大型重巡洋艦とされている

四季島海軍においてはその絶妙な使いにくさから航路防衛総隊に即日無期限貸し出され敵艦との接敵が予想されるハワイ方面補給隊への同行やアラスカ方面への間接護衛に運用されるが43年頃にはリバテイリア太平洋艦隊の状態から海軍籍に戻り北欧派遣艦隊旗艦として運用されたり戦後には改装され航路防衛の任につくことが多かった、また回転翼機配備後に後部砲を取り外し対潜哨戒用に回転翼機を大量に装備した航空大型重巡洋艦も配備された

他国海軍における運用

戦中においては貧弱な同盟国海軍を増強すべくイタロス、ヴィシー・ガレア両国に砲設備の換装した近江型4隻ずつ売却され地中海の制海権獲得のためにブリテン艦隊と対決した、さらに秩父型を含む艦艇販売カタログにも目玉兵器として掲載された。

遣欧艦隊所属時にはアドルフ・ヒトラー等枢軸国首脳や軍関係者が訪問することも多々あった。そのため枢軸国で有名な艦艇にもあたる

また戦後には各国に廉価版の秩父型を販売が増えた、特に独立した

ばかりの東南アジア各国においては艦隊旗艦に秩父型を導入することが大半であり旗艦に秩父型、空母として鳶型（37機搭載噴式機使用可能）主力巡洋艦に平瀬型（阿賀野型の廉価版）駆逐艦として朝風型（夕雲型廉価版）松型が周りを固めることが大半であった

各国型の違い

発注国により仕様の変更がされる場合も多くドイツやイタロス宛の場合は似た口径の砲に主砲の換装機銃の変更がなされたりフィラルド仕様では砕氷設備が取り付けられたりした

Prologue

? 1 「どこだここ」

? 2 「此処かい、此処は転生の間さ」

? 1 「転生の間、だと、つまり俺は死んだのか」

? 2 「そうだよ君は死んだ。そして僕は君達が神とでも言うものさ、一応これでも主神だからね」? 2 改め主神

? 1 「神か、御生憎様私は無神論者なんでね」

主神 「知ってるよ、君の記録は全部見たからね」

? 1 「見ていただと、つまり、私が無神論者であることを承知で此処に呼んだのかね？」

主神 「そうだよ、中津君」? 1 改め中津

中津 「そうか、一応聞こうじゃないか、この私に何をさせるきかね？」

主神 「何をか、そうだね、転生してみないか？」

中津 「なんだ、此処に呼んだのは転生させるためだと思ったんだが、決まってなかったのか」

主神 「そうだよ、取り敢えず呼んでみようと思ってね。部下に頼んで魂を連れてきてもらったのさ」

中津 「案外神ってのは暇なんだな」

主神 「まあ暇だね、仕事なんて部下が間違っって人殺したとき位だからね、年に10回有るかどうかだからね」

中津 「なるほどな、つまり神は暇人のニートなんだな」

主神 「案外否定できないな、何せ此処のところは人間界の漫画やら小説読んでごろごろしてたくらいだし」

中津 「神の世界には娯楽は無いのかね？」

主神 「無いね」

中津 「案外神の世界とやらは楽しくないようだね、極楽浄土を謳う宗教連中は嘘つきだと証明できたわけか」

主神 「それはそうだね、極楽浄土なんてのは存在しないよ、あるのは何もない暇な世界さ」

中津「暇な世界か、ある意味現代人からしたら極楽浄土かもしれないか」

主神「そうかもしれないね。さてここで提案だ転生して僕達を楽しませてくれないかい？」

中津「楽しませてか、なんだ、私を転生させてそれを見て楽しむのかね？」

主神「そうだよ、悪くない提案だと思うが、僕にしても君にしてもそれにやり残したこともあるんじゃないかな」

中津「確かに、まだ生き足りないな、それで、転生して何をすればいいのかな？」

主神「ただ生きればいい、これから送る世界でただ生きて、国を導けばいい」

中津「国を導くだと、私にそんな経験はないが」

主神「知っているさ、だが、君にはその才がある、ある意味天職とも言えるレベルで」

中津「ちなみに断ったらどうなるのかね？」

主神「何も無いよ、ただここで僕の話し相手になるだけさ、この何もない世界で」

中津「それはそれは、なんともつまらんな、それなら転生した方が良さそうだ」

主神「だろうね、では転生することでもいいかな？」

中津「無論だ、で転生先の国は何処なのかな、いや、転生先の世界はどんな世界かな？」

神「転生先はある意味過去の地球さ日中戦前辺りのね」

中津「日中戦前の世界だと！その世界で国を率いると、どこの国をかね、まさか中華民国やドイツではあるまいな」

主神「違うよ、率いてもらうのはその世界の日本、名称は四季島皇国さ」

中津「四季島皇国だと、日本ではなく、それに国を率いる、まさかと思うが華族、皇族になれというのか、」

主神「取り敢えず落ち着こうか、疑問にはしっかり答えよう」

中津「失礼、この私としたことが取り乱した。では聞くが、その世界は国名が違うと言うことかね？」

主神「そうだよ、いくつか違うね、例えばリバティア合衆国、大ブリテン帝国、エスパーニヤ王国、イタロス王国とかね、君の世界と同じ国名を持つてる国もあるよ、例えばドイツ第三帝国、タンヌ・なんとか、ソビエトとかね」

中津「なるほど、で私は四季島皇国のどんな立場に転生するのかな？ 皇族それとも華族かな？」

主神「どちらとも違うよ、僕達神の使徒、その名も神族さ」

中津「神族だと、神にでもなれというのかね？」

主神「神の血を持つものという意味で神族だよ」

中津「神の血をもつだど？」

主神「そうだよ、わかつてると思うが今の君は魂のみの存在、身体はないわけだ、だから僕達の血の入った入れ物に君の魂を入れることで蘇るわけさ」

中津「なるほど、私の魂を神の血をもつ入れ物に入れて国を導けと」

主神「そんな感じだね」

中津「で、正確には何年かな」

主神「1934年」

中津「それで国の状況はどうなのかな」

主神「史実との違いは艦艇の数と兵器の質だね、まず戦艦空母巡洋艦駆逐艦潜水艦まで変化は無いよ違いは小型艦海防艦として占守型から鵜来型まであわせて59隻それらすべて速力は全艦20ノット出るように変わってそれらが完成しているよそれと生産性の低さから丁型型24隻の建造が決まっているよだけど丙型は作られないよ後小銃は既に九九式小銃が八九式小銃として九七式中戦車が九二式中戦車として正式採用されてるよそれと史実になかった島が二つあるよ」

中津「なるほどな」

主神「後転生特典をあげないとね、何がいいかな、そうであれにしよう」

中津「あれ？」

主神「時に宇宙戦艦ヤマトは知ってるかな」

中津「まあ、知っているがそれがなにか？」

主神「じゃあ時間断層は？」

中津「ヤマトに出てくる空間だったかな」

主神「そうそう、通常空間の数十倍の速度で時間がたつやつね、それが転生特典になるからね、後資源を無限に吐き出す空間も一緒にあげるね、じゃないと資源足りなくなるだろうから、後さっきの島が時間断層と資源空間の出口になってるからね」

中津「ずいぶんと待遇がいいんだな」

主神「まあそりゃ、君態度いいんだもん、今まで見てきた連中みたいに、やれチートくれとかやれハーレム作れるようにしろとか強欲すぎる」

中津「まあまあ落ち着いて」

主神「すまんすまん、ふうさてさつきと転生の儀式を行おうか」

中津「儀式か堅苦しそうだな」

主神「堅苦しくないぞただ血の入った飲み物飲むだけだから、そういえば飲み物何にする？酒でもなんでもいけるぞ」

中津「じゃあグルジアワインの赤を」

主神「なかなか通だね、皆ボジョレーヌーボーとかなのグルジアの赤とは、気に入った、ちよつと特典追加するね、世界辞書でいいかな、これは人類の叡知とか行動とかがすべてが見れる辞書さ」

中津「世界辞書、なかなかやばそうな特典を、諜報に利用できそうなんですが」

主神「そういった利用はさすがにできないよ、ただ技術はまあ20世紀の物はすべてわかるかな、これ使えば技術チート間違いなしさ」

中津「諜報に使えなくてもそれはそれでチートなんですが」

主神「いいのいいのこの主神たる我が認めただから」

中津「それならいいですが、まあ日本梓なら人的資源が乏しいから巧くやりますかね」

主神「人的資源か、人的タンクも用意しようかな、クローンだけど」

中津「クローンですか、それだとスターウォーズになりそうですね」
主神「そうはならないよ全員見た目違うからねあのイケてる前期型
スーツは着なくていいよ後期型はあれだけど」

中津「確かに後期型はアレですな」

主神「案外気が合うね、さてそろそろ酒の用意ができたねじゃあ乾
杯といこう」

中津「そうですね」

主神「じゃあ君の新たな人生に乾杯」

中津「乾杯」

主神「さてさてこれで準備ができたね」

中津「これでお別れかな」

主神「それでもないよ、夢の中で会えるようにしておくさ、後これ
は餞別だよ持っていくといい。さあいってらっしやい」

中津「いってくるよ」

ピカーン

1934年昭和9年1月1日皇居とある1室

ピカーン

中津「ここはどこかな?」

?3「君が神の使者か」

中津「まあそうなるが貴方は?」

?3「そうだった名乗ろう昭和天皇その人だよ?3改めて天皇

中津「これはこれは天皇陛下であられたか知らぬとはいえ失礼し
た」

天皇「いや構わんよ、貴殿こそ立場的には朕と同格なのだから敬語
はいらんのだか」

中津「そう言われても困るな、私は神の使者と言われても先ほど
なったばかりでねそれまではただの一般人でしたから」

天皇「残念だな、」

中津「そう言えばここは何処なのでしょう」

天皇「皇居の1室通称神者の間、今日から君の部屋になる場所だよ」
中津「ここが私の部屋か、広くないですかね」

そこに広がるのは推定20畳の板間とその横にある10畳程度の床の間であつた

天皇「そうかな狭いと思うが」

中津「私からすると広いのですが」

天皇「まあいいな、さて主な閣僚は呼んでいてね明日の昼過ぎに会議をするよ君の意見が今後の国家運営に関わることとなる」

中津「最善を尽くして国を善き未来に導くことを誓いましょう」

天皇「ここに現在の国の資料をおいておくではまた明日」

中津「そうですねまた明日」

ストン

中津「さてと何を話すか考えるかな、とりあえず海軍は36年1月に金剛型の代用戦艦4隻を起工させねばならんな空母もだ雲龍型を開戦までに4隻それに新型の重巡だ古鷹型と青葉型の代用を用意しなければ、そう言えば阿賀野型の砲を15.5cmに変えて建造させるか後は秋月型の早期建造かなそれと陸軍は主力戦車がチハか現在なら最良だろうだが出来るだけ速く出来れば38年中に75mm砲搭載型を作らんな航空機は史実通りかある程度手を加えんな、生産はどうするかな時間断層工場で艦艇も建造できるようだな、だとするとクローンも大量に必要な現状の数は、うん？服に手紙が入っているな、主神からか何々」

主神『これを読んでもということとはクローン等の数で悩んでるんだね。餞別として渡した箱を開けるといいよ』

中津「これか」

パカ

中津「端末か、これはクローン等の数が書かれたデータか、男女別でそれぞれ500000人か、中々居るな、とはいえ対ソ対中対り戦では足りないだろうな、一桁増やすか。年数はどこかに書いてないかな、これか標準型クローンで5年か戦闘可能期間は50年で寿命は70年から80年か、案外長寿だな、女性型も作れるのか、作らないと男女比が大変になるな。それぞれ5000000人を作らせるか、やることを箇条書きにするか」

【やること】

1. 金剛代艦の建造
2. 雲龍型の早期建造
3. 古鷹型と青葉型の代用重巡の建造
4. 阿賀野型の主砲を15.5 cm砲に変更してからの建造
5. 秋月型の早期建造
6. 38年中に75 mm砲搭載型戦車の生産開始
7. 96式の改修と量産
8. 男女それぞれ500000人のクローン製造
9. 既存兵器の生産
10. 将来的にソ連と戦う国フィラルド共和国に対しての軍事支

援

中津「このくらいだろうなといっても1〜5は36年、出来れば条約脱退するまではできんな6に至っては砲の研究からだろうなとすると今できるのは既存兵器の生産とフィラルドに対しての支援か、支援は38式小銃と野砲榴弾砲それに航空機の無償援助か有償援助だろうが、だが早すぎれば気取られる、なにかフィラルド共和国と友好関係を築く方法はないかな、フィラルド共和国の現状を端末で確認すればいいか、音声検索システム起動」

端末く起動シマシタ指示ヲドウゾ>

中津「フィラルド共和国とソ連の国境紛争の現状」

端末く現状アル程度ノ緊張状態ニアリマス>

中津「やはりか、だとすればノモンハンの現状に近いのか、そこで対ソ相互防衛協定か支援協定が締結できないかな、代価はフィラルド共和国相手の輸出入税関連でどうにかなるかもしれない、スノーモービル、アレは作れば売れそうだな軍事転用も可能だろう」

コンコン

中津「誰かな」

?4「女中です夕食をお持ちしました」

中津「おやそうかね、入っていいぞ」

ストン

女中「失礼します、食器は外に置いてはおいていただけると幸いです」

中津「そうしておこう」

女中「失礼します」

ストン

中津「ふう。さて食事とするか」

1時間後

中津「ふうさて、そう言えば風呂はどうすればいいのかね」

コンコン

女中「女中です、お風呂のご用意ができておりますが」

中津「今いく、残りはまた明日ただな」

西暦1934年1月1日この日から歴史が変わる主神により転生した中津彼はこの国をどう導くのであろうか

第1話

1934年1月2日6時丁度

中津「ふう朝か、今日の昼過ぎからだったな会議は、とはいえこの時期の内閣は交代が近いはずだな、どの程度影響を及ぼせるものかね、それともフィラルド共和国との外交関係と兵器製造、研究を重点にやることにするもんかね」

コンコン

女中「女中です、起きておられますか」

中津「起きておるよ、何事かね」

女中「御客人です」

中津「このような早くからかね」

女中「はい」

中津「こちらに招いてくれ」

女中「かしこまりました」

中津「誰かな、政府閣僚かそれとも軍の重鎮か」

コンコン

女中「お連れいたしました」

? 1 「失礼するよ」

中津「貴方は！斎藤総理大臣」

斎藤「知っているか、神の使い殿」

中津「それはまあ一応」

斎藤「今日の会議の前にある程度やることを聞いておきたくてね、朝早くから失礼させてもらった」

中津「いえ構いません」

斎藤「聞いていいかね、私の内閣は何時まで持つ、いや今年中私は総理大臣を続けられるかね」

中津「無理です、予定では今年の4月に総辞職大臣はその数年後亡くなる事となっております」

斎藤「そうか、ではこの話し合いはあまり意味を持たないかもしれないな」

中津「顔見せとして考えればよいかと、それに軍関連は今すぐ始めねば間に合わぬかと」

齋藤「間に合わぬか」

中津「大臣やることを昨夜考えておりましたがそのいくつかは成果を出すのに1年や2年では厳しいものもあります、例えば艦隊の増強、外交関係の行動は時間と労力を使いますそれにインフラ整備は場所も多くやることも膨大です、だからね今始めねばなりません」

齋藤「そうか、誰を呼べばいいのかね、今日の会議は儂の総理として最後の国にたいする奉公となるだろう」

中津「陸相と海相このお二方は絶対です、後外務大臣と内務大臣この御4方をお願いしたい」

齋藤「わかった、午後2時頃に全員を集めようと思う、部屋はどうする」

中津「陛下に御頼み申します、この後お会いする予定となっておりますので、もしかすれば御来席も有り得るやも知れませんが、ですので昼12時には場所を御伝えできるようにしておきます」

齋藤「そうか、わかった、では本格的な話をしよう」

中津「はい、まず海軍からまず36年初頭に軍縮を脱退していただきたいのです、その後金剛の代艦として45000トン級の32ノットを出し41cm砲10門程度を積んだ戦艦を4隻に古鷹型と青葉型の代艦として建造が容易で修理が短期間で済む新型の重巡を4隻それと空母を4隻これは38年中に起工して40年内に竣工させたいと思います」

齋藤「大分多いね」

スツ

齋藤「これは？」

中津「私の知る海軍のこれからの増強計画となります、神より頂いておりますので間違いはないかと」

齋藤「この計画艦だけでは足りないかね」

中津「足りません特に足の早い戦艦や重巡の建造は早期に行うべきです」

齋藤「資金と資材はどうするのかねいかに計画が優れていても絵に書いた餅は食えんぞ」

中津「それについては神より資源を無尽蔵に吐き出す島を頂いておりますので」

齋藤「そうか、陸軍はどうするのかね」

中津「陸軍については現在は世界的に見て兵器の質では高水準でしょう、ですが砲兵の強化と戦車の研究を急がせるべきです、現行の戦車ではこれからは厳しいと思われます」

齋藤「現行のチハ車では今後は厳しいかね」

中津「持って3年かと」

齋藤「3年か案外短命だね」

中津「ええ40年中には戦車の怪物的進化が始まるでしょう、てぎる限り早めに75mm砲搭載型戦車の研究開発と製造が必要です」

齋藤「そうかそれ辺りは陸相との話し合いしだいだろうね」

中津「そうなるかと」

齋藤「そう言えば内務と外務大臣を呼んでほしいと言っていたが彼らには何を話すのかね」

中津「まず国内ですが工場品質の向上と基準化、インフラの強化と建築が必須です」

齋藤「足りないかね現状の数では」

中津「全く足りないかと」

齋藤「そうか、外務大臣には何を」

中津「外務大臣には対ソ関連で北欧諸国との関係強化をお願いしようかと」

齋藤「北欧諸国との関係か、その辺はできる限りでいいのかね」

中津「構いません、ソ連が北欧諸国特にフィラルド共和国に宣戦布告するまでにまだ多少は余裕がありと思われるので」

齋藤「国内のインフラ整備は何をするのかね」

中津「まず東京から大阪までを繋ぐ高速道路の建設と各地の鉄道の敷設及びドックの建設と大型化でしょう」

齋藤「戦時になれば物資の輸送は急務か」

中津「そうなります、補給の軽視は敗北に直結します」

会談は2時間にわたり行われ齋藤総理大臣が退室したのは8時を回り9時近くになってからであった

中津「ふう、大分話し込んでしまったな」

コンコン

天皇「入るよ」

中津「これは陛下、おはようございます」

天皇「おはよう中津君、齋藤君と随分と話し込んでたみたいだね」

中津「午後からの会議の前にある程度話を聞いておきたかったのでしよう」

天皇「そうか、午後の会議には朕も参加することにした、部屋は既に準備してある」

中津「そうですか、では齋藤総理にすぐに知らせませんと」

天皇「それは朕がやっておこう」

中津「ありがとうございます」

天皇「構わんよ、これも国のためなのだろう、会議は2時頃でいいかね」

中津「大丈夫です」

午後2時過ぎ皇居の1室ここには今上天皇を始め神の使い中津総理大臣齋藤実多角海軍大臣荒木陸軍大臣広田内務大臣山本外務大臣高橋大蔵大臣

それに伏見宮博恭王と閑院宮載仁親王

といったメタなことを言うと1部2次大戦前スタートの小説でもほぼ出てこない方が居るがこれが現状の内閣であった

中津「では始めましょう、その前に自己紹介をせねばなりませんな、私はこの度主神より遣わされた神の使い中津と申します、神から幾分かの力を頂いております」

大角「海軍大臣の大角だよろしく頼む神の使い殿」

荒木「陸軍大臣の荒木だ初めまして」

広中「内務大臣の広中です今日は面白い話があるそうで」

山本「外務大臣の山本だ貴公の力になれるようまあ努力しよう」

高橋「大蔵大臣の高橋だこの度は無理をいって参加させてもらった」

伏見「軍令部総長の伏見だまさか生きとる間に神の使いに会うとは思わなかったな」

閑院「参謀総長の閑院だ初めましてだ神の使い殿」

天皇「さて会議といこう」

中津「はい、陛下、ではお配りした資料をご覧下さい、これは我が国が40年中までに行わねばならぬことです」

【やること】

1. 金剛代艦の建造
2. 雲龍型の早期建造
3. 古鷹型と青葉型の代用重巡の建造
4. 新型軽巡の建造
5. 防空型駆逐艦の早期建造
6. 38年中に75mm砲搭載型戦車の生産開始
7. 単発単葉戦闘機の量産
8. 男女それぞれ500000人のクローン製造
9. 既存兵器の生産
10. 将来的にソ連と戦う国に対しての軍事支援
11. 国内のインフラ整備

中津「以上となりますが第8は神から頂いた力の1部となります、これは5年で一人前の兵士を作ることができます」

荒木「5年で一人前だと、それならば皇国は無尽蔵に兵士を前線に送れるではないか」

大角「確かに海軍の増強も楽になりますな」

高橋「財源を考えると無尽蔵はやめてくれ」

中津「財源については神から頂いた力の1つ無尽蔵に資源を吐き出す空間から金などの物資を出してそれに当てようと思います」

高橋「それならば反対はしません、が軍事以外にもその資金は使われるのでしょうか」

中津「無論です、だから広中内務大臣を御呼びしたのです」

広中「インフラ整備か、何から始めるかね」

中津「東京から大阪を繋ぐ高速道路の建設と車の普及を」

広中「なるほど」

山本「外務大臣として聞くが外交関係はどこことだ」

中津「予定では北欧諸国特にフィラルド共和国との外交関係です」

山本「なるほど、では急ぎ始めさせよう、だがどういったことから始めるかね」

中津「それについてですがこの後私自身の商会を作りフィラルド共和国との取引を行おうかと」

山本「商会をかね」

中津「はい、私の知識を使い、スノーモービルなどを主に取り扱おうと」

荒木「それは軍事転用可能かね」

中津「可能です」

荒木「陸軍にも幾分か廻してもらいたい」

中津「量産の暁には必ずや」

高橋「日銀に融資の話を通しておきましょう、まず開業資金がなければなにもできませんからな」

中津「ありがとうございます」

高橋「構いません、外貨獲得量が増えればこちらとしても得がありますので」

荒木「軍事物資も扱うのかね、そうなら弾薬の生産を依頼したい」

中津「わかりました、準備してある島に工場を作りその後内地にも工場を作ります」

大角「島だと、そんなものがあるのか」

中津「霧の島と言われている例の島です」

霧の島年がら年中霧が周囲の海域を包み込み込み15メートル先すら見通せぬ双子島であったここには神より与えられた時間断層工廠と資源空間それにクローンの製造拠点があった

広中「あの島かあの島にそのようなものがあるとは、ですが船が通れるのですか」

中津「可能です、あの地に造船ドックや飛行場を設置して本土防衛の要といたします」

大角「確かにあの位置ならば防衛の要となるだろう、兵はどうするのかね、それに艦艇もだ」

中津「兵は先のクローンが既にある程度おりますのでそれを使います、艦艇は幾分か海防艦を回していただければと」

大角「わかりもうした、海防艦と水雷艇をいくらか回しましょう」

中津「ではこの後個別で詳細を詰めたと思います」

天皇「それがいいだろうね、隣の部屋を使うといい」

中津「では海軍から始めたいと思います」

伏見「よかろう」

大角「ではいきますかな」

隣の部屋

中津「では海軍ですがまず海防艦の増強をしたいと思います、具体的な隻数ですが300隻を予定したいと思います」

伏見「300隻かそれだけいるかね」

中津「四季島皇国は四面を海に囲まれております、この海路を守るためには最低でも300隻出来ればその倍は必要かと」

大角「倍だと、それだけの人員と予算はどうするのだ」

伏見「貴殿の力により物人金は支度できるのであったな」

中津「はい可能です、それに軍縮の方ですが脱退をしていただきましたのです、具体的にはこの36年にです」

大角「なぜ、36年なのかね」

中津「脱退後すぐに拡張するためにはもろもろの支度が必要でして、それが完了するのがこの時期となります」

伏見「支度までは批准する振りをすればいいのだね」

中津「その通りです、で戦艦と空母の建造ですが、その前にこちらをご覧ください」

伏見「これは建造計画書か」

中津「はい、今後行われる予定はこうなっておりますが、これに追加してこちらも行いたいと思います」

大角「金剛代艦の建造か」

中津「はい、金剛型はそろそろ年ですので代艦の建造が必須かと」
伏見「確かにそうだろうな」

会談は1時間に及び最終的には金剛代艦級4隻の建造と史実雲龍型8隻の建造と古鷹型と青葉型の代艦と追加分を含め重巡8隻の建造と新型の軽巡12隻の建造それと防空型駆逐艦の建造が決定されドックの建設と大型化を36年2月までに行うこととした

中津「陸軍の方どうぞ」

荒木「失礼するぞ」

閑院「失礼する」

中津「では始めましょう、陸軍についてですが戦車と砲兵の増強を主として強化していきたいと思います、まず野砲ですがすべて90式に統一してそれ以外の野砲はすべて退役か他国に売却する方針にします」

荒木「確かに38式はもうだめであろうな、だがアレは重量が重く運ぶのが大変であろう」

中津「それに関しては質のいい馬を用意します、クローンは馬でも可能ですので」

閑院「馬もできるのかね」

中津「はい可能です、他にも牽引車の増産も行います」

荒木「それならば砲兵の増強は可能であるな、戦車はどうするのだ」
中津「戦車については現行のチハ車で3年は問題ないでしょう」

荒木「3年かそれ以上は無理か」

中津「無理です、まず40年中には75mm砲を搭載した戦車が基本となるでしょう、出来ればそれ以前遅くとも38年初頭に生産を始めたと思います」

荒木「砲はどうするのだ、研究するにしても1からでは間に合いません」

中津「88式野戦高射砲を流用しようかと」

荒木「なるほど、高射砲を流用か、すぐにしたくさせよう」

会談は海軍同様1時間に及び最終的には38年初頭に75mm砲搭

載戦車を43年中には90mm砲搭載戦車を配備開始、砲兵の増強と牽引車の増産と短機関銃の開発と配備が決定された

また内政については東京から大阪までを繋ぐ高速道路また7万トン級の戦艦の建造が可能なたつくを横須賀呉佐世保舞鶴大湊大神の6ヶ所と中津の保有する島に合計10基建築する事が決まった、またこれと別に国内の各種インフラ整備は40年までできる限り行い他に外地に貨物輸送用の軽便鉄道の敷設を決定した。

外交関係については北歐諸国との関係強化、アルゼチア（史実アルゼンチン）等の南米諸国との関係強化を決定していた。時に1934年1月歴史の歯車は回り始め新たなる歴史を紡ぐ

第2話

1934年2月1日9時霧の島

中津「ここが霧の島か」

?1「総帥、お越しでしたか、小官がこの指揮を取っているクローンの中原中将であります」

中津「よろしく頼む中原君」

クローン將軍中原、主神の力により陸海軍に幾人が将官級にクローン將軍を送り込んであった他にも各省庁にも送り込まれていた

中津「現状の報告を、特に兵器の製造状況をだ」

中原「現状、チハ車20両90式野砲150門小銃1500丁弾薬は戦車砲弾1000発野砲弾6000発小銃弾1500000発89式重擲弾筒300門砲弾18000発を外時間の1日で生産しております」

中津「ドックの建設はどうなっておる」

中原「現状大1号ドックが37%完成しております大2号以降も鋭意建築しております」

中津「そうかクローンの培養はどうかね」

中原「順調です、予定通り39年に男女別で3000000人ずつ40年に男女別で2000000人ずつ戦力化できます全合計で1000000人を戦力化できます」

中津「よろしい、そう言えば高射砲と機関銃の生産を聞いていなかったな、どのくらいになる」

中原「高射砲が外時間の1日で88式野戦高射砲10門砲弾各種合計1500発機関銃が13・2mm機銃を50挺弾薬が1000000発7・7mm弾仕様型100丁弾薬は小銃弾と共用ですので先の通りとなっております」

中津「なるほど造船はどれくらいで可能かね」

中原「現在小型ドックが2基完成しておりますので御指示さえあればすぐにでも可能です、建造を開始させますか?」

中津「そうだな、予定通り千鳥型水雷艇の建造を始めてくれ」

中原「了解しました」

中津「飛行場の設営はどうなっておるかね」

中原「第1飛行場は完成しております、第2飛行場は整地が終わりましたので来月の頭には完成します機体の方は陸軍の91式戦闘機48機が展開しております」

中津「そうか、航空機製造はどうなっている」

中原「総帥の御指示通り中津34式輸送機の生産を開始しております」

中津「34式輸送機中津がこちらに来てから設計開発を行った輸送機で見た目は96式陸攻に近いが大きさは若干大きくなっており速度は10キロほど遅くなっていた乗員は12名」

中津「戦闘機製造の支度は出来ているかね」

中原「無論です」

中津「今年中に96式戦の開発が始まるだろう、その際三菱に協力を申し入れる予定だ最初から13.2mm機銃を積んでいた方がなにかと便利だろうからね、発動機の方も我々の作ったやつを載せたいものだ中島の寿より性能の高いやつをな」

中原「研究を急がせます、この後研究施設を確認されますか？」

中津「いや、研究のじやまになるだろう、今回は遠慮しておこう、それより完成した輸送機を見たいまだ実物は見たことがなくてね」

中原「了解しました、直ちにご案内いたします、そのまま飛行もできますか？」

中津「可能なら」

中原「支度させます」

中津「頼む」

中原「はい、太田、飛行場に伝令を飛ばせそれと車を廻すのだ」

太田「はい、急いで」

中津「彼は？」

中原「彼は太田中尉です、私と同じく士官のクローン兵士です、私の副官をしています」

中津「そうか」

キキイ、パタ

太田「車を廻しました、どうぞ」

中津「すまんな」

太田「いえいえお構い無く」

中原「よし出してくれ」

太田「はい」

ブルブルブル

10時7分霧の島第1飛行場駐機場

中津「これが34式か」

中原「はい総帥これが34式です」

中津「軍では既に噂になっているようだな」

中原「そのようです、私の同期が幾人か国産の性能がいい輸送機だと誉めていました」

中津「ここにはこれが何機いるのかね」

中原「12機が飛行可能状態で36機が製造中です」

中津「そうか、林陸相から発注があった幾機か廻してほしいらしい」

中原「それは」

中津「うまくいけば私の商会の初の仕事となるな」

中原「では今回の訪問はそれに関連して」

中津「そうなる、売り込むにしても実物を見てないので話にならん」

太田「支度ができました、すぐにでも飛べます」

中原「うむ今いく、総帥」

中津「うむいこうか」

ブルブルブル

機長「離陸します」

ブーン

中津「ふむ、中々軽やかに上昇するな」

中原「はい」

中津「これは軍用仕様かね」

中原「はい防弾板も後部に機銃も付いた軍用仕様です」

中津「詳元はあるかね」

中原「こちらに」

34式輸送機

全長16メートル

全幅27メートル

全高4.5メートル

重量5400kg

全備重量8000kg

発動機海風11型離昇1000馬力

最大速度時速330km

武装13.2mm機銃機首1挺機尾1挺

人員要員4名+人員8名→12名

中津「この機体は爆装できるのかね」

中原「貨物室を改修できます、そこなら1トンまで載せれます」

中津「爆撃機としても軍に売り込むかね」

中原「それも手かもしません」

中津「中原君増産を進めてくれこいつを爆撃機としても軍に売り込む、まずは64機を現在の製造中の機とは別に爆撃機仕様として製造してくれ」

中原「了解しました」

中津「では頼んだぞ、後海風11型の改修もだ馬力を幾分かあげるようにしてほしい」

中原「はい、研究者たちに伝えておきます」

中津「さて、では私はこれで本土に戻るとしよう」

中原「港までお送りします」

中津「うむ、感謝する」

2月4日霧の島より皇都東京に戻った中津はその足で商会の本社ビルに向かった

中津「ふう、これで歴史が変わるな、明後日に34式の試験か、さてどういった結果になるかね、正式採用されれば我社初の仕事となるな」

コンコン

中津「入れ」

? 2 「失礼します」

中津「なんだ小松君か」

小松「社長、朗報です先ほど東北試験場から報告でスノーモービルが完成したとのことです」

中津「そうか、で試験も行っているのかね」

小松「現在長期距離移動試験の最中だとのことです」

中津「そうかにこれでヴァルハラプロジェクトが進めれるな」

小松「はい」

ヴァルハラプロジェクトそれは中津の想定した北歐諸国向けの販路開拓計画であった、内容としてはスノーモービルの販売やカイロの販売を想定していた

中津「開発局には無茶な試験をせず、しっかりと安全性を確保して試験を行うように伝えてくれ」

小松「はい、直ちに伝えます」

中津「それと、拳銃の設計は終わっているな」

小松「総帥の指示された例の拳銃は中津34式として現在試射を行っております、陸軍の士官が何度か視察に来ているようです」

中津「そうか、南部拳銃に変わる拳銃になるだろうな」

小松「そうですね」

中津「さてと、この後の予定はなにか入ってるかね」

小松「この後は自動車研究局から大山局長が面会したいとの事です」

中津「そうか、ではそれは昼過ぎに、先に昼食といこう」

この後自動車研究局局長大山との面会は試製中津34式軽自動車と標準型自動車の現状報告と軽自動車の試作車の完成したので是非視察にとの事であった

中津「ふむ、海軍が次期戦闘機の開発命令を出したか、武装が7・7mmから13・2mmに変更されているな、さて少ししたら三菱に面会を申し込むかね」

コンコン

小松「小松です、総帥大蔵大臣の高橋様から御手紙が届いております」

中津「見せてくれ」

内容は中津34式輸送機の完成を祝う祝辞と資源空間から出た金の等の資源の売上の半分を国債扱いとして贈ること、また第2次融資が必要かどうかといったことが書かれていた

中津「さて来週末は林陸相と2回目の面会か、1回目は輸送機の話と陸軍の航空士官と自走砲の話で終わってしまったからな、その後は大角海相との会談か、忙しくなるな」

翌日の会談は順調に終わっていた林陸相との会談ではクローン士官の増員の話が出ていた、これにより歩兵師団を20個までに増やすことが決定された、またこの内第19第20歩兵師団にはクローン士官の配置や師団長にクローン中将を当てることで合意した、また機甲部隊についても新設される第4連隊と第5連隊を中核にした第1機甲旅団の設立が決まった編成は

戦車第4連隊

戦車第5連隊

装甲車や装甲兵員車で編成される高速歩兵連隊1個

編成中の自走砲1個連隊

旅団本部

戦車144両

自走砲48両

装甲車50両

装甲兵員車180両

旅団本部100名

戦車兵720名

砲兵240名

歩兵2000名

旅団総員3240名

以上となっていた

また大角海相との会談では新型戦闘機は以前からの予定通り中津34式輸送機に搭載されている13・2mm機銃2挺を搭載することとなっていたそれと航路防衛総体の設置と34式輸送機の仮採用が決まった。

第3話

1934年8月1日皇都東京中津商会本社ビル第1会議室

中津「では定例会の第2部を始めよう、誰か報告は？」

大山「はい、では私から」

小松「大山自動車研究局長どうぞ」

大山「標準型自動車ですが来年にはラインに載せれるかと」

幹部「おおついいにか」

中津「ついにですね、他の報告は？」

?1「それじゃ俺から」

小松「木下艦船本部長どうぞ」

木下「第1第2造船所からの報告で1万トン級輸送船計4隻が10月中旬に完成するとの事です」

中津「そうですね、想定より速いですね、予定では来年初頭だと聞いていましたが」

木下「造船所員の働きがよかったようです、4隻中2隻は海軍に回すのでよろしかったのですね」

中津「はい問題ありません、他の報告は？」

?2「では私からも」

小松「島山銃器研究局長どうぞ」

島山「試作中の拳銃ですが試射試験が終了しました」

幹部「ついにですか、長かったですな」

中津「これで銃器商売ができますね」

試作拳銃見た目の中身すべてがグロック17、南部拳銃より安く高性能で1000年は現役で使える拳銃を作ろうとした結果開発された拳銃

口径

9mm

銃身長

114mm

ライフレング

右回り6条ポリゴナル

使用弾薬

9 x 19 mmパラベラム弾

装弾数

10・17・19・33発

作動方式

セーフアクション（ダブルアクション）

テイルトバレル式ショートリコイル

全長

186 mm

重量

703 g

銃口初速

379 m/s

有効射程

50 m

メタイ話、完全にグロック17

21世紀で通用する拳銃をこの時代に作成生産した結果34年9月に陸軍に正式採用されたそのため製造数も多く34年度だけで10000丁が陸軍に海軍には34年11月に仮採用翌年1月に正式採用され34年度に15000丁が配備調達された、配備後に南部よりいかなる点においても優れていたことから戦前戦中戦後を通じて日本の拳銃と言えばこれと言われる1品

またこの結果同様の弾薬を使う短機関銃の開発要請が中津商會にされたのはまた別の話

中津「他は無いようですね、では定例会を終わります、今月も粉骨碎身の働きを期待します」

全員「はい」

同日夜中津邸

中津「ある程度歴史に変更を加えたな三菱からは新型機にうちのエンジンを使いたいと言ってきている、まあ機銃がうちの商品足る34

式13・2mm機銃だからだろうな、とはいえ新型の雨風11型970馬力か、これは零式21型より速度では優かも知れんな、だとすると予定している零式には1500馬力程度のエンジンが必要だろうそれを積めればヘルキヤト相手でもある程度どうにかなるだろうな、だがベアキヤト相手ではやはり2000馬力越えか、ままならんものだな、いつそターボプロップにでもしてみるか、いや早期講話が目的なのにそこまで考えてもいかんかな、うん、これは」

ピカーン

同時刻神界主神の間

ピカーン

中津「ここは、この雰囲気もしゃ」

主神「そのもしやだよ中津君」

中津「これは主神殿お久し振りです」

主神「久しぶりだね、活躍見てるよ、他の神にも好評でね、新しい特典を上げようと呼んだんだ、武神こつちだ」

武神「君が中津君か、いつも楽しく見てるよ、儂は武を司る神、人呼んで武神じゃ」

中津「初めまして武神殿」

武神「さて儂から与える特典じゃが、ズバリ武の才じゃ」

中津「才ですか」

武神「そうじゃ武の才じゃ、さあ飲めこれを飲めば御主も達人クラスの武人となれたぞ、ではまた会おう、さらばじゃ」

中津「なんとというか、激しい神ですね」

主神「彼は神の中でもぶっ飛んでる方だからね、さて武の才と言ったが、射撃に投擲も入っているからね、さて時間だまた会おう」

中津「はいではまた」

ピカーン

中津邸

中津「戻ったか、さて明日は戦車学校の視察ださっさと寝るか」

翌日昼過ぎ陸軍戦車学校

キクルキクルキクル、ドン、ドカーン

士官「あれが現在訓練中の隊であります、中津社長」

中津「あれがですか、以前見たときよりはるかに動きが良くなって連携もいいですね、それによく弾が当たっているみたいですね」

士官「はい、中津社長のお陰です高価なチハ車とその修理部品を大量に寄付していただいたお陰で今までエンジン動かさず行っていた訓練や砲を撃たずにまた撃つても一発だけとして行っていた訓練もすべて動かして、大量に撃つことがそれに今までより多く長く訓練ができておりますので」

中津「そうですか、そう言ってもらえると私も寄付した甲斐があったというものです」

中津の寄付、34年5月辺りから行われている中津の愛国運動の1つと言われているが、その真実は林陸相との会談後に飲みの席で実弾訓練が出来るとぼやいていた林の言葉を聞き霧の島の工廠で作られてる軍需物資特に弾薬や燃料、大きいものでは航空機や戦車といったものを無償で送っている物であった、当然陸海軍内では知られており中津に対しての便宜を図ることとなっていた。

また中津は現場で使いやすく壊れにくい機材や道具の開発こそが必須であるとし実際に陸海軍の将兵に使い心地を聞きに回り問題点をすぐさま修正することから前線の将兵に人気であった

中津「うん？アレは何ですか」

士官「あれですか、アレは野戦整備の練習機材です、お恥ずかしながらチハ車やハ号でなくそれ以前のルノーや装甲車を使っているのです」

それは幾人かの学生たちが既に前線を退いた兵器を相手にエンジンや履帯、砲塔をいじっている姿であった

中津「ここであれを学んでもいざ実践といったときに役に立ちそうにありませんね」

士官「そうですね履帯周りならどうにかなるかもしれませんが砲塔は全く違いますからね、訓練生や1部教官から苦情が出ています、我々としても何とかしてやりたいのですが、いかんせんその資金がないので」

中津「わかりましたこの中津、更なる支援を御約束しましょう、今後必須足る野戦整備訓練にチハ車やハ号が使えるように、それともう少し機材を増やせるよう話と物を通しておきましょう」

士官「ありがとうございます、学生達に良い話をしてやれます」

中津「では本日はこれで失礼します」

士官「いえいえこちらこそ、ありがとうございます」

帰宅後中津は愛国号としてチハ車8台ハ号8台を戦車学校に寄付、また、林陸相に面会して1個連隊分の戦車48台の寄付をすることを話すと同時に野戦整備の重要性を語り最後に自社の新型拳銃の売り込みを行っていた、この面会の後林陸相は戦車第6連隊の創設と戦車学校等の教育現場に1級戦の兵器を送り野戦整備の練習が出来るように手配した、それと同時に中津の新型拳銃の試験を行わせるのであった

また中津は海軍も同じであると考え訓練用の魚雷160本と砲弾2400発を寄付、凶上演習だけでなく艦艇や人員を動かした演習が出来るように手配していた、これにより兵の練度上昇と中級下級将校内に中津のシンパが徐々に増えていくこととなった。

そして8月27日中津の姿は三菱の設計所にあった

中津「ここが試作中の機がある場所ですか」

社員「そうです、堀越を呼びますのでお待ちいただけますか」

中津「構いません」

社員「堀越さん貴方が会いたがってた人が来てますの」

堀越「まさか、中津商会の中津社長ですか」

社員「そうです、ほら急いで」

堀越「わかった今いく」

タツタツタツタ

堀越「御待たせしました、初めまして堀越と申します」

中津「初めまして中津です、なにやら次期戦闘機の事で話かしたいと聞きました」

堀越「はい、御社では単葉機を製造してるのを聞き、その技師をお借りしたいと思ひまして」

中津「なるほど、その技師は設計の方ですかそれとも製造の方ですか、それとも両方ですか？」

堀越「両方です！」 ドン

上司「おい、それは要求しすぎだろ、せめて片方にしないか」

中津「構いませんよ、それだけ次期戦闘機の事を考えてるのですから」

上司「はあ」

中津「いいでしょう、設計、製造双方2人ずつお貸ししましょう、その代わり」

上司「その代わり？」

中津「海軍に採用されたらそれを陸軍にも売り込みたいのですよ、それと」

上司「それと？」

中津「発動機はうちの商品を使ってほしいのです」

堀越「発動機、もしや海風ですか！」

中津「いえアレは戦闘機には大きすぎますよ新型の雨風970馬力です」

堀越「ほんとですか、是非に」

上司「おいおい、次期戦闘機にはうちのを使おうといってたじゃないか」

堀越「上司970馬力ですよ今うちで作ってる発動機よりも性能がいいんですよ、それに中津さんのところの発動機は故障も少なく整備しやすいですよ」

上司「それはそうだがあ」

中津「雨風発動機1機こちらにお持ちしましょうか」

堀越「是非、是非お願いします」

中津「その代わり、次期戦闘機には防弾板をしっかりと着けてくださいね、それが条件です」

堀越「はい」

上司「全くこいつは、ですがよろしいのですか、その発動機は御社の新型では」

中津「構いませんよ、次期戦闘機では通用してもそのつぎでは通用しないと思ってますから」

この言葉が決めてであったその後の話し合いにより次期戦闘機に三菱機が正式採用されたら生産は中津商会でも行うことで合意した。この後試作機が完成するとすぐさま海軍の審査を受け1936年6月96式として正式採用史実より5ヶ月速い採用となった

詳元

96式艦上戦闘機

全長

7・61m

全高

3・97m

全幅

11・6m

自重

1090kg

最大重量

1730kg

最高速度

477km/h（高度4020m）

上昇限度

9,900m

航続距離

1200km

プロペラ

金属製固定ピッチ3翅

発動機

中津「雨風」970馬力×1基

乗員数

1名

武装

13・2mm機銃×2

この機体にはガンポット装備が可能なように設計されており対地攻撃機として13・2mm機銃2挺吊り下げられた機も存在していた

また翌年37年に陸軍でも採用された

海軍仕様生産数1754機

陸軍仕様生産数2741機であった

また機銃の13・2mmは陸海軍の航空隊から非常に素晴らしい評価を受け今後の戦闘機の主力装備となっていた

第4話

1935年1月10日霧の島時間断層工廠管理室

中津「生産の方はどうなってるかね中原君」

中原「はい総帥、既に昨年に採用された94式拳銃(グロック17)は既に40000丁が製造され配備され始めています、また94式として採用された34式輸送機は輸送型96機爆撃型360機が先の生産命令書以降の追加分として既に完成しております」

中津「チハ車やハ号、それに13・2mm機銃と機関銃の方はどうなってるかね」

中原「はいチハ車420台ハ号600台13・2mm航空機銃1500挺が機関銃仕様は10000挺が製造され既に陸軍に渡されておりますが1部は海軍陸戦隊に回しております」

中津「ふむ、13・2mm機銃は陸海軍の地上部隊にも機関銃として正式採用されたからな生産量を増やしてくれ出来れば1週辺り5000挺を目標に今月中に20000挺を生産してくれ」

中津「34式13・2mm機銃もしくは機関銃34年中盤に94式航空機銃として航空隊に採用されその後陸海軍の地上部隊にも少量が配備35年1月5日に陸軍が6日に海軍陸戦隊が95式重機関銃として陸戦用に改修されたものの正式採用を行っていた」

中津「それと第2第3戦車旅団が編成されるらしい、それに各歩兵師団に戦車2個中隊で編成された戦車大隊が追加されるようだ、他にも海軍陸戦隊でも各鎮守府にハ号を配備したいらしい」

中原「なるほどでは、軍用車の生産も増やした方がいいのかもしれないね」

中津「頼むぞ今年度末までに3000台は作ってくれ」

中原「はい」

中津「そう言えば雨風の製造はどうなっている、次期戦闘機にはこれを積むからな」

中原「現在外の1日辺り30機を製造しています」

中津「艦艇の方はどうなってるかね」

中原「予定通り水雷艇8隻が完成しております輸送船の方も空母改装が可能な25000トン級4隻15000トン級4隻が建造されております」

ここで建造された輸送船はすべて空母に改装された25000トン級は大鷲型として15000トン級は大鷹型に分類されてが速度が標準の大鷹型より6ノットほど早かったため改大鷹型として扱われた

中津「そうか、では頼んだぞ」

中原「はっ」

3月2日陸軍浜松飛行学校

ブーン

中津「見事な編隊飛行ですね」

教官「いやはやまだですよ中津社長、飛んでるあれらはまだ編隊爆撃の成績は低いのです、なにぶん新型の94式はまだ数が少なくどうにも大陸の方が優先されますので」

中津「そうなのですか」

教官「はい爆撃は地上軍を吹き飛ばすのに一番良いので」

中津「なるほど、だから最近爆弾の発注が増えたのですね」

教官「そのようです」

中津「あそこでやってるのは整備の練習ですか」

教官「はい、海風4機を整備練習専用機材として使っています」

中津「そうですか、それはよかったです」

陸海軍航空隊の増加と訓練生の増員は1部クローンパイロットの大量動員によって行われていた94式重爆撃機の正式採用により34年中だけでも前線部隊に30機ほどが投入航空学校にもある程度が配備され、海軍航空隊にも雷装が可能に改修されたものが12機配備されていた、その他にも輸送型を空挺利用も考えられていた

中津「では失礼します」

教官「お気を付けて」

ブーン

中津「これで中国戦線は楽になるだろう、爆撃機は砲兵の代わりに

なるだろう、これで太平洋戦域に兵が増やせる、中国の山奥は補給に問題があるからな、それに戦略爆撃を出来るようにすれば仮にソ連との戦いになったときには役に立つだろう」

8月13日中津商会本社ビル執務室

中津「で、永田中将は無事なのだね、坂本少将」

坂本「はい、当日小官も現場に居合わせておりまして斬りかかってきた相沢中佐を外に待機させていた副官の島崎少尉と共に取り抑えました」

中津「ふう、どうにかなったな、ここで永田中将が死んだら皇道派と統制派の亀裂が修復できないものになってしまっただろう」

坂本「そう思われます」

中津「これで皇道派は勢いを失うかな」

坂本「可能性は高いでしょうが、壊滅まではいかないでしょう、いくとすれば史実の226事件が起きればかと」

中津「やはりその事件か史実だと半年後となるな」

坂本「はい、当日は小官は陸軍省に兵を出す支度をしておきます」

中津「頼みます、北島大将と眞田中将には当日は首相官邸に居てもらうこととなっています、それでどうにかなれば良いのですが」

坂本「総帥もお気を付けて、最近総帥は統制派ではないかと皇道派から思われているようです、もしやとは思いますが」

中津「私は単なる商会の社長ですよ、私を殺したとてなにも変わりませんよ」

坂本「ならいいのですが、護衛だけはしっかりとつけてください」

中津「君がそこまで言うなら、当日は陸海軍の将兵連中と酒を飲みぬ会食でもするかね」

坂本「それなら良いのですが、こんな時間ですか、小官はこれにて失礼します」

中津「体に気を付けろよ」

坂本「はい」

パターン

コンコン

中津「誰か」

? 1 「私です、服部です」

中津「服部か入れ」

カチヤン、パタン

服部「失礼します、例の件で」

中津「もしや、成功したか」

服部「はい、無事にリバティリア国内の反戦運動家達は軍縮して、不況対策にその資金を使えとデモを起こしています、また共産主義者、特にトロツキストは武力革命の支度を開始したようです」

中津「私は引き金を引いたのかな、リバティリア合衆国を撃ち倒す引き金を」

服部「総帥、私は総帥が間違ったことをしたとは思っておりません」

中津「服部くん」

服部「総帥は皇国の事を臣民考えてこの策を陛下に上奏なさいました、それは責められることではありません」

中津「そうかな」

服部「そうですよ、総帥」

中津「今はそれで納得するか」

服部「そうですよ、さあ他にも報告がありますよ」

中津「何かね」

服部「海軍内でイタロスと手を組む話が出てきています、その中に空母技術に関するものもあるようです」

中津「空母かイタロスに空母があれば次期大戦で大西洋方面にリバティリア海軍の空母をある程度貼り付けられるだろうな」

服部「はい、海軍内でもそれについて話が出ているようですが、イタロス軍は貧弱ですが」

中津「チハ車をある程度売り払おう、cv33が主力よりチハ車が主力の方が良いだろうからな、それとチハ車の改修が決まった装甲を全周10mm増やすこととなる、砲も52口径57mm砲に換装する、知つての通りこの世界のチハ車は史実の奴より装甲が5mm厚い、つまり今回の改修で前面40mmとなるまだ薄いだろがイタロス軍に廻

すには充分であろう」

服部「確かにこれならばある程度戦えるでしょう」

中津「さて後はいつ結ばれるかだな同盟が」

服部「探つてきますか？」

中津「いや、少しすれば情報が回ってくるさ、それまで待とうか」

服部「はい」

1935年中には新型のチハ車3500台が製造され部隊に配備されていった、また海上における戦力増強を考えた中津は軍ではない組織の設立運動を行い密輸密航等の海上犯罪を取り締まり海上における遭難者捜索救助に当たる組織海上保安庁の設立を行わせた、扱いとして内務省の外局であるが有事の際は海軍の指揮系統に入ることとなった、運用される船舶は純白に塗られ武装も大型船では95式重機関銃2挺と史実の99式軽機関銃4挺が最小の船だと小銃2丁と量産の始まった短機関銃が配備されていった

この組織について各国は軍事組織かどうかの調査を行い武装などの確認によりちよつと重武装の警察であったためにどこも解体を要求しなかった

1935年歴史はついに史実から大きく剥離した

第5話

1936年2月7日皇都東京中津商会執務室

中津「後少しで226か」

服部「はい、総帥は当日どうされますか」

中津「当日は高橋大蔵大臣と共に私の本邸で海保や航路防衛総隊それに陸軍の連中と会食の予定だ」

服部「お気をつけください、総帥は彼らから狙われております」

中津「わかっているさ、本邸の近くには陸戦隊が展開するし当日は長岡少将が配下の戦車隊を近くに展開させているし、地下の空間にも1個中隊が展開している問題は無い」

服部「首席秘書の小松も一緒なのですか当日は」

中津「そうだが、なにか問題が？」

服部「いえ、彼なら総帥の盾となっても総帥を守るでしょう」

中津「心配するでない彼が私の盾になることはあり得んよ、まず決起が起きたとして狙われるのは私より先に岡田総理大臣と渡辺大將だろう」

服部「史実では高橋大蔵大臣も狙われております」

中津「だが、軍の予算は削りはされたものの充分な量を出しているではないかね、師団もいくつか増えている」

服部「ならよいのですが、お気をつけください」

中津「わかっている」

そして運命の2月26日がやって来たこの日は雪の降る日であった、中津はこの前日の夜から高橋大蔵大臣、島海上保安庁長官、土方航路防衛総隊総長、原商会財務官、田辺保安庁第1管区長、藤原陸軍大佐、小松首席秘書官等と会食をしてその後全員客室で寝ていた、また邸内には保安官やクローンの陸兵や警備員それに総隊の隊員合わせて100名程が警護していた

同時刻野中四郎等を首魁とし陸軍兵約2000が決起首相官邸や各新聞社参謀本部や警視庁大臣邸や私邸に討ち入りを果たしていた。そしてここ中津邸にも中橋、中島両中尉が率いる反乱軍200名が討

ち入りを試みていた

反乱兵「中尉中津邸前方に海保の保安官や総隊の隊員、それに陸兵が展開しています」

中橋「なんだと、間違いないのか」

反乱兵「間違いありません」

中島「どうする中橋、このままやりあうか、それとも引くか」

中橋「数ではこちらの方が多いい、ここは突撃だ」

キユルキユルキユル

反乱兵「チハですチハが彼方からきてます」

中橋「そんな馬鹿な、なぜなぜだ」

中島「仕方あるまい、引くぞ、今の装備では勝てぬ」

中津邸作戦室

中津「ふむ、引いたか」

警備員「そのようです総帥」

保安官「にしてもここはすごいですね、ここまでの設備が整っているとは」

総隊隊員「確かにすごいな電話だけでも6台置いてあるぞ、それにこの地図はこの邸の周りだけのじゃなく皇都全域や皇国全土の物まで揃ってる、それにこれは透明な板かガラスじゃないな」

中津「ああ、アクリル板ですかここに書き込めるんですよ、描いたものは、要らなくなれば消せますからねうちの新品です軍に売り込む前に自分で確認しないとイケなくてね」

高橋「ふう、ひと安心ですかな」

中津「でしようね、とはいえ各所で決起が起きているでしょう」

土方「奪還しなければならんな、中津社長ここを司令部として使う許可を頂きたい」

中津「構いませんよ土方長官、出来れば2月中にこの決起を鎮圧したいのです、武器は地下の保管庫のやつを使いましょう、うちの新製品の短機関銃に94式拳銃や新式の小銃に機関銃とその弾薬が大量に保管されています、もちろん陸相や海相、それに口に出せぬあのお方様からも許可をいただいております、ああ、さすがに重砲は無い

ですが、擲弾筒は弾薬含めて腐るほどありますので後小型の砲も幾分
かありましたね」

島「ここは軍の武器庫かなにかなのか、聞く限りだと海保より充実
しているような気がする」

中津「この事件後必要とあれば色々と用立てましょうか？機関銃や
擲弾筒それに船舶等を」

島「おいおい、船舶まで調達できるのかい」

中津「可能ですよ、なんなら水雷艇でも用意しましょうか？」

島「昨今の軍の増強理由がわかったような気がしたよ」

高橋「流石ですな、伊達に海保や防衛総隊の設立に資金面で関わっ
てないですな」

土方「話には聞いていたが本当だったとは」

タツタツタツタ

陸兵「失礼します、警視庁が決起部隊に制圧されたようです」

中津「警視庁がか、まあ警察の装備では太刀打ちできないだろうな」
田辺「第1管区の部隊が東京湾を維持できていれば奪還は可能だろ
うな、警視庁が落ちようが、後は参謀本部が落とされていなければい
いが」

警備員「報告します、参謀本部反乱軍に制圧されました、それと北
島大将と真田中将が何人か連れて来ております」

中津「直ちにこちらにお通ししたまえ」

北島「ふう、どうにか逃げ延びられたな、こっちには決起軍は来な
かったのか？」

中津「しつかりと来ましたよ、でもチハ車を見たら尻尾巻いて逃げ
ましたよ」

真田「それはそうだろうな、戦車相手にやつらの装備では太刀打ち
できないだろうな」

中津「首相官邸にいたはずですが総理は？」

真田「岡田総理は無事だ、だが、警護の警官が死んだ、他の場所に
も決起軍が襲いかかっているだろうな」

中津「先ほど警視庁が落ちました、それと参謀本部も応答しないの

で敵の手に落ちたのだと」

眞田「籠城するしかないな、幸いなことにここには腐るほど武器がある」

中津「愛国奉納品扱いにしておきますから好きなだけ撃ちまくって下さい」

北島「それはよかった、後でいくら請求されるか考えていたところだからな」

中津「私の命の危機でもありませんからね、金は取りませんよ」
タツタツタツタ

警備員「総帥、総員配置に着きました、いつ敵が来ても対処できます」

中津「ご苦労様です、さて坂本君はうまくやってるでしょうか」

2月27日坂本中将率いる鎮圧軍が反乱軍の支配地を包囲その後今上帝たる昭和天皇が直々に指揮する近衛師団が包囲網に参加同時に海軍横須賀陸戦隊や航路防衛総隊や海上保安庁の船舶が東京湾に展開していた

翌2月28日反乱軍に対してのビラの空中配布やバルーンによる伝達が行われた

28日中津邸地下大作戦室

この日ここには昭和天皇をはじめとする政府閣僚や軍人たちが集まっていた

陸士官1「ビラの空中配布は完了しております」

陸士官2「反乱軍から1部の兵が投降しております」

北島「陛下の御心を考えると強行策は取れない」

そのまま時間はたち午後11時翌29日5時をもって武力鎮圧を決定戦車第1旅団を前衛に突入することが決まった

そして29日反乱軍は降伏した、死者72名負傷者100名以上が出た。

処分は史実通りであり、史実通り岡田内閣は退陣廣田弘毅を総理とする廣田内閣が組閣された。

史実では死んだ高橋大蔵大臣が生き残ったこれは今後どのような

影響が出るのであろうか

第6話

1936年3月7日h o i民なら誰もが知っているラインラント進駐が発生、ナチス第3帝国はヴェルサイユ条約を破棄し非武装地帯たるラインラントに進駐

大ブリテンやガレア政府は非難したが軍は動かさなかった、仕事しろよ謀略しか脳がないし海軍も時代遅れの艦載機使ってるし陸軍は、まあ役に立たん紅茶大好き三枚舌のブ○カスとワ―テルロー以降全く勝てずにぼろくそになることが決まってるマジノ線にこもって迂回されてパリに敵が入ると手をあげて降伏するワイン大好きクソカエ○野郎が

1936年3月15日皇都東京皇居の一室

中津「では会議といきましょう」

天皇「そうだね、ずいぶんと久しぶりな気がするね」

伏見「確かにそうですね」

東條「あの私がここについて良いのですか？」

中津「問題有りません、今後この会議には東條閣下は原則出席となりますので」

東條「え、」

天皇「そうだよ原則出席だよ」

伏見「まあ、君は4月から参謀長になることになってるからね」

東條「え、聞いてませんよ」

伏見「そりや今言ったからね」

中津「さて始めましょうかまず海軍の増強予定からですね、以前の計画通り39年までに41cm砲10〜12門32ノット47000トン級戦艦を4隻42年中に46cm砲9門28ノット65000トン級戦艦を4隻それと空母は30000トン級8隻(史実翔鶴型)20000トン級8隻(史実雲龍型)を40年中に完成させるものとなっています」

伏見「ふむ、予定より増えているな、30000トン級は6隻追加かね」

中津「はい霧の島の45000トン級ドックの方が空いておりますので6隻はそちらで建造しようかと」

東條「霧の島？」

伏見「そう言えばなにも話してなかったな、閑院宮からなにも聞いていないのか」

東條「はい殿下からはとりあえずこの時間にここにいるようにと言われました」

中津「私から説明しましょう」

神の使い中津ある程度はしよりながら説明

東條「なるほどあなた様がああ神の使いであられたか、胡散臭い目で見たことを許してほしい」

中津「いえいえ構いません、では陸軍ですがまず37年中に現状の歩兵25個体制から歩兵55個師団体制に移行します、また戦車旅団も8個まで増やすことを目標とします」

東條「そこまで増やすのですか」

中津「はい、これでも足りないかもしれませんが、戦時になれば歩兵80個戦車旅団20個それに24榴12門と15榴24門で編成した重砲旅団10個最低でこれだけは必要です、出来れば歩兵は150個戦車旅団は30個重砲旅団は15個位でしょう」

東條「いくらクローンで兵員が用意できるとはいえここまでの兵力を養うだけの食料はどうするのだ、資源は無尽蔵に出せるとはいえ食料は無理ではないかね」

中津「それは36年の3月までの話です4月からは日に100000トンの食料を出すことが可能です」

東條「100000トンの食料かそれはすごいな」

伏見「ふむ、では問題は無いな」

中津「では、この増強計画でよろしいですね」

天皇「朕は賛成だぞ」

伏見「儂も異論は無い」

東條「私も賛成です」

中津「では赤紙の発行と武器の生産を急ぎますかね」

中津「では次はイタロスとの同盟ですが出来ればナチス共組みたいのですがどうでしょう」

伏見「ふむ、イタロス海軍とナチス海軍が強力になれば次期大戦でリバテイリア海軍の部隊を出来るだけ欧州に張り付ける事ができるだろうな」

中津「出来れば両国に中型空母をと考えております」

伏見「両国に空母をだと、だがそんな余力は無いだろう」

中津「あります、時間断層工場で建造中のあの20000トン級輸送船を改装すればいいのです」

伏見「確かにあれを改装すれば40機〜50機程度積めるな、だが1隻や2隻では」

中津「ナチス第3帝国に2隻イタロスに4隻それに艦載機も付けて譲渡を予定しています」

伏見「何隻の空母を張り付けさせられるかね」

中津「最低でも正規空母6隻〜8隻、その内ブリテン空母が4隻ですが艦載機搭載能力はリバテイリア空母の半分でしょうその場合譲渡する空母とほぼ同等機体によつては譲渡空母有利になりますだとするならばリバテイリア空母5隻は堅いでしょうそれに護衛空母多数を想定しています」

伏見「それだけの数を大西洋に貼り付けれるならば巡洋艦や駆逐艦も廻すか」

中津「それ用に重巡軽巡それぞれ4隻ずつ駆逐艦12隻をそれぞれ両国に有償で譲渡しようかと」

まあ金で払えなくとも、技術や資源でも支払いを可能としたいですが」

伏見「だが何を求める」

中津「第3帝国にはUボートと陸戦機材、特に88mm高射砲は対戦車戦に有効なのでライセンス取得も目処にイタロスは、イタロスはどうしましょうリデアから産出される石油か、それとも港の使用権利かその辺りでしょう」

伏見「確かにその辺だろうな」

東條「確かに対戦車戦に有効な砲が手にはいるならいいかと」

中津「ではイタロス及び第3帝国との関係改善と同盟締結に向けて動くということでしょうか」

伏見「異議無し」

東條「賛成」

天皇「それでいこうかね」

会議の結果海軍は888艦隊計画を決定戦艦2種類8隻大型空母8隻中型空母8隻を建造することとなったまた重巡以下の艦も重巡12隻軽巡12隻陽炎型24隻夕雲型24隻秋月型12隻伊号潜水艦24隻呂号潜水艦48隻海防艦120隻の建造が決定されたまたそれとは別にイタロス、第3帝国向けの艦艇を時間断層工廠にて38年初頭に完成38年中に向こうに着くようにすることが決定された
陸軍については40年までに歩兵150個師団戦車旅団30個重砲旅団15個を整備することとなった

3月27日中津商会地下戦略研究会議室

中津「さて諸君よく集まってくれた、今年度最後の戦略会議を始めよう、報告を島山銃器研究局局長からお願いしよう」

島山「はい、まず機関短銃ですが無事に生産ラインが完成しました、現在月に5000丁の生産をしております」

中津「36式機関短銃94式拳銃（グロック17）と同様の弾薬を使用する機関短銃、主に大型機の乗員や戦車装甲車の乗員士官等に配備されてが南方の密林地帯では小銃より取り回しがよいとされ各歩兵中隊に10丁が配備され小銃や機関銃が使いにくい密林戦闘において皇国兵士の相棒とされた、また空挺部隊には専用の改装を加えたタイプが配備され空挺降下時に投下コンテナにいれずに降下できることが気に入られ空挺部隊の主装備とされ空挺隊員に愛された見た目は100式機関短銃性能も弾丸以外同じ」

中津「ふむ、今年中に生産量を月に10000丁にしてくれ、次木下艦船本部長」

木下「はい、まず建造中の改装用輸送船12隻全て順調に建造が進んでおります、予定では36年中に第1グループ4隻37年中に第2

グループ4隻は空母に改装できるかと」

中津「予定より早く出来そうですね、後はイタロスと第3帝国が同盟を飲んでくればいいのですが、次は迫水航空局長」

迫水「まず雨風1型の生産ですが既に予定数の3000台が製造されています、それと海風の方も新に94式250機分を製造しております、それと新型仮称晴風1200馬力ですが、現在図面引きを開始しております、早ければ38年の暮れには試作機を完成させられるものかと思われまます」

中津「そうか。では完成は急がんでもよい、だが生産性の高さや整備性の良さは雨風並かそれ以上であることは最低限の条件だいいな」
迫水「分かっております」

中津「次柴田農業監督官霧の島の農地の状況は」

柴田「はい、まず冬麦の方ですが順調に育っております今回は天候に恵まれた為に例年より3%程多く収穫できる見込みです、その他の蕎麦、稗、粟も順調に育っております」

中津「それならばよし、他に報告はないか？、無いならこれにて閉会とする」

7月3日皇都東京神楽坂某料亭

堀越「すいませんね。中津社長こんな席を用意していただいて」

中津「構いませんよ新型機にはうちの発動機と機銃が使われてますからね、大儲けですよ、それにそちらさんにはライセンスまでいただきましたからね」

三菱幹部「いやはやうちとしても発動機のライセンス費を安くしていただいておりますから大助かりですよ、中島の連中はこれ以上下げれん言つて御社の倍の値を言つてきますから、それも御社のよりも全て劣るものを」

中津「そう言えば陸軍で96式の事が話題になつてゐるらしいですよ、次期正式採用機はこれがいいと言われてゐるらしいですよ」

三菱幹部「ほんとですか」

中津「らしいですよ、中島は反対してゐるらしいですがどうなるんでしょうね、とはいえ完全に反対ではないようです機体製造を任せてく

れるならそれでいいと言ってるんですよ」

三菱幹部「ライセンスですかね」

中津「でしようね、なにせ陸軍は発動機を雨風武装は13・2mmついでに防弾板付けて更に最近はもう96の改修機でいいだろう、と言ってますからね、中島としてもやりにくいでしょう」

三菱幹部「それは、中島に吹っ掛けれそうですね」

中津「そうですね」

この翌日中津の元に中島からの極秘会談を望む事が告げられた

中津「極秘会談ね、三菱よりうちの方が話を通しやすいと踏んだか、それとも軍内のうちのシンパにうちを薦められたか、まあいいか」

会談は3時間に及び最終的には中島は三菱96式を陸軍で採用させることを納得した、その代わり発動機以外のライセンス生産の許可を三菱にとることとなった。そして陸海軍上層部は航空機統一について考え始めていた。

第7話

1937年5月27日皇都東京海軍省軍令部総長室

伏見「松型駆逐艦の建造が始まったか取り敢えず12隻内8隻が民間の造船所を使ってか、うまくいけばいいが、それとコレか」

伏見宮がいうコレとは

「強襲上陸用の陸戦隊創設についての意見書」

であった

伏見「確かに次期大戦は太平洋が主戦場であろうが、うまくいくのか、陸戦隊の装備はいまだに35式小銃や11年式機関銃や中津の所から寄付された新型の96式機関短銃だぞ、まああれは世界水準であろうが残りはどうするというのが陸の89式小銃（史実99式小銃）や91式軽機関銃（史実99式軽機関銃）を海軍仕様にしたものを中津に依頼するか、戦車はまあハ号か、あれも悪くはないがどうせならチハ車が欲しいな、陸に頭を下げるのもな、中津に新型をねだるか、新型は水陸両用がいいが、さて次の中津との会談はいつだったかな、それにこれもこれで面倒だぞ」

「中津社長の今までの海軍に対する愛国奉国運動にたいして欧米諸国の名誉大佐に準ずるなにかをもつて報いる事に対する意見書」

伏見「海軍単独でやれば陸軍から確実になにか言われるな陸戦隊はまだ海軍内の問題じゃだがこれは中津のアレは海軍だけじゃなく陸軍や海保それに航路防衛総隊も相当量、特に後者2つに関しては大半が中津からの援助だからな、先日新に海保に寄付された800トン級巡視船8隻に航路防衛総隊に寄付された鴻型4隻等中津奴が居らねば下手をすれば組織がなかったやも知れないからな、だとするとこの件は陸軍の東條に海保の島それと総隊の土方と協議だな、そして中津からの提案か」

「海防艦の速力向上に対する意見書」

伏見「28ノットか確かに20ノットでは高速輸送船に追従出来ないな、だが25程度でよいと思うのだがな、それに松型は30ノット出せる、高速輸送船にはこれらを充てる予定だがどうすべきか、そも

そも航路防衛総隊に船団護衛を一任するか、そうすれば海軍に対する予算の過剰使用の声を抑えることはできるだろうな、これは土方と協議だな」

コンコン

伏見「入れ」

? 1 「殿下、失礼します」

伏見「なんだ、島井少将か、何かあったのか」

島井「いえ、陸戦隊の件で中津社長に幾つか聴きに行ってきました、その結果面白そうな兵器を紹介されました」

伏見「面白そうな兵器だと」

島井「なんでも水陸両用戦車だとか」

伏見「水陸両用戦車か確かに欲しいな、で性能は」

島井「八号に水上航行機材を取り付けるだけだそうでは八号です」

伏見「八号か、チハ車で出来ないかな」

島井「どうでしょう、八号でできたのでチハ車でもできると思いますが、聞いてみますか」

伏見「そうだな、出来れば噂の新型でもできないか聞いてくれ」

島井「噂の、ああアレですか75mm砲を積んで前面装甲65mmと噂の」

伏見「そうだ、アレだ、アレならリバテリアやブリテンの戦車とも充分やりあえる、いや圧倒できるだろう」

島井「そうですね、本当ならいいのですが」

伏見「まあその辺は陸に問い合わせるとしよう」

島井「それがいいですね、そう言えば陸がドイツにチハ車と新型の砲戦車確かホイ車でしたかなそれを送ったようですよ」

伏見「陸がか」

島井「ええ、ドイツ陸軍の高官が何度か稼働してるのを見に来てるようです」

伏見「どういった評価を下すのか楽しみだな」

ここで言うホイ車は史実の1式7糶半自走砲ホニ車のことである

6月15日ドイツ某戦車演習場

ドン

ブーン

ドン

ドイツ陸士「悪くない、いや試作中のうちの新型より素晴らしいかもしれない、装甲か40mmと少し薄いですがそれは採用された時期を考えれば納得がいく」

グデーリアン「確かにいい、特にあの砲だ52口径57mm砲は素晴らしいの一言につきる重量19トンか装甲を薄くして軽くしてるのか速度も43キロと悪くない、無線機も標準装備してあって素晴らしいの一言につきる、ただ性能が悪いがそれはドイツ製に載せ変えればいい話だ後は搭乗員が4人なのは問題かもしれないな、アレで幾つか中队を作りたいな、対戦車戦専用の隊を、そう言えばもう1つ四季島皇国から来たのがあったなアレは何処だ」

ドイツ陸士「向こうだと思えます、聞いた話だと砲塔固定式で75mm砲積んでるようです、車体はそこにあるチハ車と同じらしくて整備が楽みたいです」

グデーリアン「75mm砲か試作中の支援戦車に近いのか」

ドイツ陸士「どちらかと言うとダイムラーベンツで試作中の歩兵支援車に近いかもしれませんが、砲は38口径75mmとこっちの方が性能は良いみたいです」

グデーリアン「試作中の車両が揃うまで、いや我が国の車両がこれらを越えるまで主力は四季島皇国製の方がいい気がしてきました」

ドイツ陸士「確かにそうですが参謀本部が認めますかね」

グデーリアン「それはわからん」

グデーリアンや他の将校の直訴の結果ドイツ第3帝国陸軍参謀本部は四季島皇国製戦車チハ車自走砲ホイ車を準主力として採用することとしたこの為四季島皇国に対してライセンス権を求めることとなったが代金として四季島皇国は88mm高射砲のライセンス権や冶金技術や無線技術の提供を要求した

それとドイツ空軍ルフトヴァッフエには96式艦戦の陸戦型97式戦が送られていた

ゲーリング「タイプ97の性能はどうか」

ドイツ空士「はい、速度は109より遅く上昇力も劣っていますが防弾性はいいです、10mmと15mmの防弾板が機体の各所特にコックピット回りは全周に15mmの防弾板がついてますキャノピーも防弾ガラスになってます、109cの機関砲じゃ数百発当てないと落とせないかと、それに小回りが効くので格闘戦に持ち込まれると109では勝ち目はないかと」

ゲーリング「109の対局にいる機体だな武装と航続距離はどうか」

ドイツ空士「どちらも109より上です武装は13.2mmを翼内に片翼1丁の計2丁それにガンポットを付けれるように元から設計されてるようで装着しても機動性が落ちないようになってます航続距離は1200キロと109の約2倍の距離を飛べます」

ゲーリング「長距離飛行が可能で、小回りが効くか、爆撃機の護衛に向いているのか」

ドイツ空士「そうなります、護衛戦闘機として配備しますか？」

ゲーリング「検討の余地はある、だが固定脚というのが気に食わないのだ」

ドイツ空士「それはそうですが、ならタイプ97を元に我々の技術で新型の護衛戦闘機を作ればいいのではないでしようか」

ゲーリング「確かにそうだな、ライセンス取得を総統閣下に進言するか」

結果としてライセンス権をドイツ第3帝国は取得代金は同盟価格として安価であった、一方ドイツ海軍では四季島皇国の艦艇輸出の報を聞きレーダー海軍大将以下司令部要員が真つ昼間からビールを飲んでいた。

レーダー「素晴らしい、これでガレア海軍と戦えるそれに空母だ2隻も回してくれるとはすぐに調査して空母を建造しないとな」

ドイツ海士「ですがパイロットを空軍が回すでしようか」

レーダー「その件だが四季島皇国の大使が総統閣下に空母のパイロットは海軍に籍を置くのがいいのです、と言ってくれたのだ」

ドイツ海士「それは、で総統閣下は何と」

レーダー「その進言を受け入れ海軍航空隊が創設される機体は四季島皇国製になる、全てがな」

ドイツ海士「それは」

レーダー「仕方あるまい、我が海軍は、いや我が国は艦載機の開発や研究が全くされていけないのだ、それにその研究に充てる資金も時間も我々には無いのだ」

ドイツ海士「閣下」

レーダー「四季島皇国は世界で3番目の海軍国だ、リバテイリアは中立ブリテンは敵対状態に近い、我々に海軍関連の技術を教えてくれるのは四季島皇国だけなのだ」

ドイツ第3帝国海軍は四季島皇国から空母2隻を含む22隻を格安で手にいれた、四季島皇国は短期的には大赤字であるが中長期的に見れば艦載機や空母関連の技術は全てが四季島皇国製であった、これの維持には四季島皇国からライセンスを取得する必要があったのだ、ドイツは金以外にもユダヤ人の引き渡しで代金に当てたのであった

1937年史実とは違い欧州枢軸側に有力な艦隊が出現したドイツ第3帝国海軍22隻の機動艦隊がイタロス王国海軍24隻の機動艦隊がこれに対してブリテン、ガレアはそこまで脅威と思わなかった、大鑑巨砲主義の弊害であったと言える

亡者)3000名ほど帰還者1000名ほど完璧なワンサイドゲームの誕生である

余談であるがこの四季島側負傷者のなかにはリバティリア人の記者が居りこの記者はこの襲撃を生き延び怪我の治療も完全に終えぬまま上海の共同租界の某リバティリア新聞社にこの凶行とそれを防いだ四季島皇国軍の勇姿を写した写真(検閲済み)を持ち込み3日後の8月1日の新聞の1面を飾ったその題と内容は

【暴挙冀東保安隊民間人襲撃】

7月29日の日の出ていない真夜中に激しいノックで目を覚ました、ドアを開けると四季島皇国軍の軍人がいて英語ですぐに避難するように伝えてきた、混乱している私に兵士は死にたくないなら急いで支度して1階の玄関ホールに集まってくださいと言うと隣の部屋をノックして隣の部屋の客にも同じ事を言っていた、

から始まる

当時の緊迫的状况と冀東保安隊を恐ろしさと中華軍閥の恐ろしさと四季島皇国の懸命な防衛戦と士気の高さを新聞の1面全てを使って書いた記事であった

この記事は世界各国にて大量に売れた、特に大陸の各租界ではこの記事を見て、護身用の銃が大量に売れた、中津は自分の身は自分で守ろうと、護身用の銃の購入を煽り、軍に採用された94式拳銃(グロック17)の民間モデル中津37式(グロック26)海外ではナカツタイプ37もしくはNタイプ37またはナカツの37と言われる物が大量に売れた、中津はこれを受け上海向けの銃器運搬専用の輸送隊を編成して運び始めると上海以外の租界(香港など)からも発注があった。

またこの後四季島皇国は在中臣民の安全を考え上海共同租界と天津租界に避難するように伝えると同時にその他の租界を競売に賭け他国に売却することを発表した、それと同時に上海天津両租界に避難する皇国臣民の避難に手を貸すように要請した、列強各国はこの知らせを受けるとその競売への参加と避難協力を約束し、四季島皇国民は全員が各国の軍人に守られながら大半が上海に1部が天津にある四

季島皇国の租界に避難した

11月7日皇都東京中津商会本社執務室

中津「作戦は順調だな、リバテイリアと中華民国が同盟を締結か、これで全てのピースがはまった、そして」

コンコン

中津「入れ」

?1 「総帥、リバテイリアでトロツキストが自由と富の平等を訴えボストンなどで武装蜂起、一部の学生や労働者がそれに参加しています」

中津「本当かね山原君」

山原「はい、間違いありません」

中津「リバテイリア軍の動きはどうか」

山原「リバテイリア軍は蜂起軍を包囲していますが蜂起軍がリバテイリア陸軍に対して発砲、死者負傷者が出ています」

中津「リバテイリア政府内のシンパを動かせ、赤を狩らせる」

山原「はい」

パタン

中津「これでリバテイリアの対ソレンドリースは不可能

、あつたとしても量は少なくなる、それにこれで幾分か工場は破壊され生産力は幾らかは落ちるだろう、これで対ソ戦は枢軸側の勝利で終るだろう、参加しなければならんな、ウラル以東は貰いたいものだ、対ソが終われば対ブリテン、対リバテイリア、イタロス海軍も空母をどうやら追加で建造しているようだ、これなら勝てる」

同日リバテイリア合衆国ボストン

タンタン

リバテイリア陸兵「1名負傷、衛生兵早く」

リバテイリア陸大尉「撃ちまくれ、共産主義のクソツタレを撃ち殺せ」

ダダダダダダ

リバテイリア陸大尉「見たか共産主義者を一掃したぞ」

リバティリア陸下士「大尉、隣のブロックから救援要請です、火炎瓶を高所から投げ込まれて指揮官が後送されたようです」

リバティリア陸大尉「クソツタレが、中尉、分隊を率いて救援に迎え、航空隊のやつらは何をやってやがる」

リバティリア陸中尉「了解、分隊着いてこい」

リバティリア陸兵「伝令、戦車隊がこちらに援軍に来るようです」
リバティリア陸大尉「よし、野郎共踏ん張るぞ」

反乱は半年続き最終的には死者約70000名負傷者約400000名、その後の赤狩りで更に1000000名が逮捕拘束された、その後合衆国では共産主義の禁止、それに関する書籍の販売所持の禁止する法案が合衆国上院下院を通過1938年6月8日に共産主義禁止法が施行された、これに対してソビエト連邦は声明をだしこの度の反乱はリバティリア合衆国政府の言いがかりであり共産主義は関係無いと発表した

1938年6月15日リバティリア合衆国ボストン

リバティリア陸少佐「よし、その瓦礫はD―2地区に運べ、急げよ」
ここボストンは反乱の発生地でもあったため市内の27%が瓦礫の山となっていた特に港に続く道は爆薬を箱にいれて作られた簡易地雷が大量に置かれ多数の死者を出していたまた、港と近海は反乱軍に乗っ取られた艦船が自沈しており更に機雷も敷設され航行も不可能となっていた、復旧工事は1942年まで掛かるとされていた、

他にもデトロイトはゲリラ化した共産主義者の破壊工作が39年中頃まで続出した全てが工場の小規模な火災であったが失われた工場67棟、死者72名を出していた他の都市でも特に中小都市は取り締まり人員も少なく大都市から逃げてきた共産主義者と現地共産主義者の抗争すら起きる有り様となっており時には警察だけでなく軍の投入すら検討される有り様であった、これに対して合衆国政府は州軍の増強と州警察に強行突撃部隊の設置を決定された、陸軍から人員を派遣し重装警察による強行検挙と治安維持を目指していた、また、自衛武器が大量に売っていた、中津は出来るだけこの運動を煽ったが銃器の販売は利にならない（距離的な意味で）として参加はしなかつ

た、

他国ではこの一件以来共産主義は危険思想であると言う意見が広がり始めていた特にソビエト連邦と国境を接する国は軍備強化を宣言していた、また満州国軍では89式中戦車改(装甲を6mm厚くした物)やハ号や37mm対戦車砲などの陸戦兵器や95式戦闘機の導入を進めていた、珍しい四季島兵器導入国はフィラルド共和国であった、1934年末に中津商會がスノーモービルを手に出店、その後中津37式拳銃や中津式34式輸送機を購入小銃も中津の仲介で安価で大量の38式と89式軽機関銃(史実96式軽機関銃)を戦車も89式中戦車改20両購入戦闘機も95式戦闘機50機を購入海軍も砲艦2隻と水雷艇4隻と800トン級の小型潜水艦6隻を購入するなどきやがれソビエトの赤熊野郎と防備を整えていた。

第9話

1938年9月h o i 民からするといつも用にミュンヘン会談が発生、いつも通りズデーテンランドはドイツ第3帝国に編入された、どうやら会談にはチェコス・スロヴァキアの代表は呼ばれなかったようです、会談はドイツ第3帝国からアドルフ・ヒトラー、イタロス王国からベニート・ムッソリーニ・ガレア共和国からエドゥアル・ダラディエ、大ブリテン帝国からネヴィル・チェンバレン、の4名でズデーテンランドのドイツ領編入は決まったのだが、チェコス政府は反対したが意味がなかった

これによりだいたい見たことのある地図になり始めていた

1938年11月29日四季島皇国横須賀軍港

中津「ついに完成しましたか新型の重巡洋艦が伊吹型4隻同時竣工とはめでたいものですね」

伊吹型重巡洋艦詳元

排水量12000トン

全長202メートル

全幅21メートル

喫水6.1メートル

主缶：口号艦本式缶8基

主機：艦本式タービン4基4軸172,000馬力

速力：35ノット

航続力：6300カイリ / 14ノット

燃料：重油 2180トン（満載）

兵装

50口径二号20.3cm連装砲5基

40口径12.7cm連装高角砲4基

ボ式40mm4連装機関砲5基20門

25mm3連装機銃10基30挺

61cm四連装魚雷発射管4基

1番艦伊吹2番艦畝傍3番艦高千穂4番艦海門

中津「後8隻ですかね四季島皇国海軍には、それと輸出用のアレらは来月ですかね」

中津の言うアレとは装甲と航続距離を重視したドイツ、イタロス宛重巡であつた

諸元

基準11000トン

全長・198メートル

全幅・17.558メートル

吃水・5.71メートル

主缶・口号艦本式専焼缶12基

主機・艦本式タービン4基4軸172,000馬力

最大速力・36kt

航続距離・7500カイリ／20ノット

燃料・重油2370トン

ドイツ向け

兵装

SKC／34 20.3cm(60口径)砲連装3基6門

SKC／33 10.5cm(65口径)高角砲連装6基12門

37mm(83口径)機関砲連装8基16門

20mm(65口径)機関砲単装8基8門

533mm水上魚雷発射管3連装4基12門

イタロス向け

兵装

アンサルド Models 1929 20.3cm(53口径)

連装砲3基6門

OTO Models 1924 10cm(47口径)連装高角

砲6基12門

ブレダ M32 37mm(54口径)連装機関砲8基16門

ブレダ M313.2mm(75.7口径)連装機銃4基8門

53.3cm水上固定式3連装魚雷発射管4基12門

両国に4隻ずつ回された同艦艇群はドイツではアドミラル・ヒツ

パー型より使い勝手がいい、修理がしやすい、機銃を増設する余裕があるなど評価が高く追加発注の話が出るほどであった。一方のイタロスでは対水雷防御が素晴らしいなどの話が出ていた

1938年12月21日霧の島秘匿ドック

中津「完成しましたね、まさか機関関連であそこまで手こずるとは、とは言えど6隻とも無事に欧州に送れますね」

空母諸元

基準23000トン

219.32m

水線長

215.32m

垂線間長

206.00m

水線幅

26.70m

深さ

21.79m（飛行甲板まで）

飛行甲板

210.30m x 27.30m

エレベーター2基

吃水

公試平均 8.15m

ボイラー

口号艦本式専焼缶8基

主機

艦本式タービン4基

推進2軸

出力152,000馬力

速力25.68ノット

燃料

重油 4,100トン

航続距離 7,500カイリ / 20ノット

乗員 1,187名

艦載機 52機

ドイツ向け武装

SKC / 33 10.5cm (65口径) 高角砲連装 6基 12門

37mm (83口径) 機関砲連装 8基 16門

20mm (65口径) 機関砲単装 8基 8門

イタロス向け武装

OTO Models 1924 10cm (47口径) 連装高角

砲 6基 12門

ブレダ M32 37mm (54口径) 連装機関砲 8基 16門

ブレダ M313 2mm (75.7口径) 連装機銃 4基 8門

この空母を基幹として編成された機動部隊は大戦を通して大西洋、地中海を暴れまわり膨大な数の連合軍艦船と兵員を強制的に海の底に転属させていた、艦載機は当初は四季島製の96式艦戦や97式艦攻、ドイツ製のスツーカー急降下爆撃機の艦載機版が使われていた

1938年12月26日皇都東京中津商会ビル執務室

中津「ついに新型戦車が完成ですか、見た感じは3式チヌ車ですね、装甲は厚くなっているようですが」

中津の言う新型とは98式中戦車チへの事であった、性能はチヌ車の装甲を厚くしたのもであった

諸元

全長

5.9 m

全幅

2.8 m

全高

2.81 m

重量

26トン

速度

38.8 km/h

行動距離

300 km

主砲

98式7糎半戦車砲（口径75mm・45口径）×1

（弾薬搭載量 70発）

副武装

95式車載重機関銃

装甲

（砲塔）

前面65mm

側面前部55mm

側面後部35mm

後面30mm 上面20mm

（車体）

前面60mm 側面45mm

後面35mm 上面20mm

下面10mm

エンジン

中津38式

空冷4ストローク星型12気筒

ディーゼルエンジン

380hp

乗員

5名

チヌ車の装甲を厚くして砲を45口径に変更したものであった、中津考えていた対M4シャーマンに対抗するには十分な性能であり、T34―76とも殴り会える車両であったがT34―85相手には厳しい車両であるとして42年から43年中にドイツからライセンスを得た88mm高射砲を戦車砲に転用した仮称99式戦車砲を搭載し、前面装甲100mmの戦車を完成させる予定であった、中津はこれを量

産することでソ連、リバティリア合衆国の戦車を全てスクラップにしようとしていた、これの他にもしものために105mm砲を積んだ戦車、通称5式の研究を密かにさせていた、中津としてはこれは戦後に生産できればよいとしていた、それと同時にクローンを増産を予定していたのであった、新に人智の神の加護を得た中津は新型の培養機の製造法を入手、これは既存型が5年かかるところを2年で済むと言う画期的なものであった、中津はこれを使い40年中に50000ユニットの航空パイロットと150000ユニットの各種整備員の増強を決定していたそれと同時に新型戦闘機仮称零戦の開発を三菱中島と協力して行っていた、新型発動機晴風1350馬力がどうにか完成これを積むことで三社合意していたが、武装では中島の13・2mm6挺搭載案と三菱の20mm2挺と13・2mm4挺搭載案で揉めていた中津としては三菱案を採用したいが中島案も捨てがたかった

中津「さてどうしたものか、三菱案は史実の52型丙に近いのか、それに対して中島はどちらかと言えば史実のF6Fに近いのかね、防弾板は双方ともに13・2mm弾に対応できるものを装備か、機体は此方ではぼ設計してるから見た目は同じ、速度は中島の方が5キロほど速いか、とは言えF6Fが出てきた場合13・2mmで対処できるものかね、とは言え三菱をあまり重用するのみな、いや待てよ、艦載機は三菱にさせて中島には迎撃機を作らせればいいのか、迎撃機なら中島の方が秀でてるようだからね、それに陸軍使用機は中島にやってもらうかね、それでも領かないなら最悪、爆撃機の方も頼もうかね、発動機はうちの豊風1700馬力を使ってもらうが」

服部「総帥、非常事態です」

中津「どうした」

服部「メヒコでトロツキーが暗殺されました」

中津「なんと」

服部「史実より2年ほど早いですが暗殺されました」

中津「ソ連が殺ったと思うかね」

服部「なんとも言えませんが、ソ連だと思えます、ですが、リバティリアの反共産主義勢力の仕業かもしれません」

中津「可能性はあるな、まあよい、そう言えば陸軍の師団再編は終わってるのかね」

服部「はい、各師団定数は20000名になっております」

歩兵師団はそれまでものより人数を減らしその代わりに戦車や砲戦車を編成にいれ質の向上に努めていた

編成

歩兵4個連隊14000名

野戦重砲1個連隊3000名

多連装自走噴進砲(カチューシャ擬き) 1個連隊1500名

戦車1個大隊24両

砲戦車1個大隊24両

及び付属整備隊合わせて500名

本部大隊1000名

合わせて20000名

上記の師団が既に60個編成されていた

中津「知つての通りもうすぐノモンハンだノモンハンではよもや負けるとは思ってはおらん、服部」

服部「なんでしょう」

中津「明日島原中將を呼んでくれ、彼に部隊を任せてノモンハンに送り込む」

服部「了解しました」

中津「さて勝てることを祈ろう、まあ勝てるだろうが」

12月27日皇都東京中津商会ビル執務室

中津「よく来てくれた島原中將」

島原「ご用と聞いて参上しました総帥」

中津「うむ、知つての通りもうすぐノモンハンだ、君にはある隊を指揮してもらいたい」

島原「ある隊、ですか」

中津「そうだ、新設した特殊部隊だ、戦車や機械化歩兵で編成した師団規模の隊だ通称は島原支隊となる」

島原「総帥、確かに私は装甲部隊を指揮するクローン将校として製

造されましたが、いきなり師団規模とは」

中津「編成はこうなっておる」

編成は

戦車連隊6個

砲戦車連隊2個

自走砲連隊2個

自走多連装噴進砲連隊2個

機械化歩兵連隊2個

補給隊1個

本部大隊1個

戦車連隊

戦車288両

砲戦車連隊

砲戦車96両

自走砲連隊

自走砲96両

自走多連装噴進砲連隊

自走多連装噴進砲300両

機械化歩兵連隊

装甲車100両

装甲兵員車360両

本部大隊

装甲指揮車8両

装甲兵員車80両

戦車24両

輸送隊

トラック150両

車両合計1502両

兵員11000名

中津「戦車は新型のチへ車だ砲戦車は新型の88mm砲を試験装備したホ口車だ自走砲は15榴を積ませている」

島原「なかなか凶悪な部隊ですね、ノモンハンでソ連兵を殲滅しろ
と言うのですね」

中津「そう言うことだ、ノモンハンをソ連兵の集団墓地にしてくれ」
島原「了解しました、ソ連兵の墓場建設慎んでお受けいたします」
年明け1939年1月7日島原支隊11000名は満州方面に向
け出撃した、満州国軍は歩兵12個師団騎兵2個旅団戦車2個連隊で
編成されていた

関東軍は歩兵6個師団野戦重砲2個旅団戦車2個旅団と幾つかの
警備隊で編成されていた、ノモンハンには警備隊1個と第19師団が
展開していた

島原支隊は途中1月19日に釜山に上陸、そこで燃料弾薬食料を補
給した後に島原は満州国新京にて行われた会議に出席、ノモンハン戦
役におけるの独自行動権を得た

島原「さて、総帥からの指令は厄介だね、ソ連極東方面軍の撃滅と
は、総帥は出来ればと言ったが出来れば行いたいね、クローン将校内
の序列をあげるためにも出世のためにもな」

1934年4月四季島皇国軍は陸海軍航路防衛総隊海上保安庁の
全軍の統一指揮が可能な部署として統合作戦室を設置

1939年5月四季島皇国軍統合作戦室はソ連軍のノモンハン侵
攻に対して航空隊によるソ連極東方面軍攻撃を決定、ノモンハン会戦
が近づく

第10話

1939年6月19日満州国ノモンハン近郊四季島皇国軍仮説基地島原支隊指揮所

四季島伝令「伝令、ソ連戦車隊が前進してきています」

島原「ソ連の赤熊共め、またスクラップ予備軍を出して来よったか、大滝、山崎の第1中戦車連隊出撃だ、機械化歩兵1個大隊と砲戦車1個連隊も連れてかせな」

大滝「はい、直ちに」

島原「航空隊に出撃要請しな、空から叩かれちゃ堪らん、山崎隊の後を本隊も続くぞ」

大滝「はい」

15分後

中戦車48両

砲戦車48両

装甲車25両

装甲兵員車90両

機械化歩兵1000名

上空援護機97式戦24機

で編成された山崎少将指揮下の山崎先遣隊から遅れること2時間島原指揮下の本隊が出撃一路ノモンハンのソ連軍仮設拠点に攻撃を仕掛けた

同日ノモンハン最前線

四季島戦車兵「距離300ソ連戦車弾種徹甲照準よし、撃て」

ドン ヒューウ パス ドカン

四季島戦車兵「命中撃破、ソ連の歩兵か、弾種榴弾砲塔3時だ急げ」

四季島戦車兵2「了解砲塔3時装填よろし」

四季島戦車兵「撃て」

ドン ヒューウ ドカン

四季島戦車兵「見たか、歩兵がバラバラだ、この調子で行くぞ」

四季島歩兵士官「よし、総員着剣チへに続くぞ」

四季島歩兵「アレを！敵機です」

四季島歩兵士官「対空戦闘、全力射撃だ撃て、撃て、弾薬を惜しむな」

ダダダダ　ダダダダ　ダダダダ

ソ連パイロット「そんなもん当たるかよ、狙って喰らえ」

ダダダダ、ダダダダ

カンカンカンカン

ソ連パイロット「弾かれただとあの戦車なんて装甲だ、うん！上か」
ヒューン

四季島パイロット「それ以上やらせはせん」

ダダダダ、ダダダダ

パンパンパン

ソ連パイロット「クソが」

ヒューン、ドカン

四季島パイロット「1機撃墜、次は何奴だ」

四季島パイロット2『2時500下方に敵戦闘機数6機視認』

四季島パイロット『よし行くぞ小隊ついて来い』

四季島パイロット2、3、4『『了解』』

四季島パイロット「喰らいやがれ」

ダダダダ、ダダダダ

パンパンパン

ドカン

中村中佐『新たな敵航空隊接近1時方向500上方だ、各機我二続
ケ』

四季島パイロット「聞いな小隊、行くぞ」

四季島パイロット2、3、4『『了解』』

ソ連パイロット『追われてる、誰か助けてくれ』

ソ連パイロット2『今行く、待ってろ』

タタタタン、タタタタン

ソ連パイロット『ダメだ、火が火が』

ソ連パイロット2『クソ、アイツか仲間をやったのは、喰らえ』

ダダダダダダ

四季島パイロット「当たるか、そんなへなちよこ弾に」

四季島パイロット2『隊長、今後ろのハエを叩き落とすのでしばらく回避してくれませんか』

四季島パイロット「いいぜ、その代わり帰ったら一杯奢りな」

四季島パイロット2『了解、喰らいな』

ダダダダダダ

パンパンパン

ソ連パイロット2「クソが」

ドカーン

四季島パイロット「おいおい、危ないな、俺に当てる気かい」

四季島パイロット2『すいません小隊、どうにもすばしっこいハエだったので奢り2杯で許してください』

四季島パイロット「じゃあないな」

中村『敵の爆撃機隊だ全機片付けるぞ、小隊毎に攻撃、掛かれ、掛かれ』

四季島パイロット「聴いたな！小隊かかるぞ、狙いは左端の編隊だ、2番機着いてこい、3番機と4番機は時間を空けて混乱したところを突っ込んでこい、行くぞ全て喰ってやれ」

四季島パイロット2、3、4『『了解』』

四季島パイロット「喰らいな」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ドカーン

この日四季島皇国航空隊は中村中佐指揮下の48機の97式戦闘機で編成された陸軍第7飛行隊（史実の飛行戦隊に相当）はソ連戦闘機37機爆撃機71機を撃墜したのに対して被撃墜は0機帰還後廃棄1機のみと言うパーフェクトゲームを行った

この日3日後の6月22日には海軍陸上第2飛行隊の96艦戦48機と第1陸上攻撃飛行隊第1中隊の98式陸攻（史実の1式陸攻改造機）12機がノモンハン近郊のソ連軍仮説飛行場を攻撃98陸攻の1トン爆弾と96艦戦搭載の30キロ爆弾で飛行場を破壊した

それ以外に地上では6月20日にソ連装甲車部隊を島原支隊所属の砲戦車連隊が殲滅6月24日に島原支隊が第19歩兵師団第85歩兵連隊と師団付属の戦車隊と交戦していたソ連軍左翼側面を強襲して指揮官のロムスキー少将共々殲滅モンゴル軍の張少将を指揮していた騎兵部隊事多連装噴進砲弾の雪崩で消し飛ばしていた。

6月の半ばにはジューコフ将軍を罷免代わりにパーメン将軍が指揮官に任命された彼はノモンハン方面に極東方面軍から更なる増援を出すことを決定していたが日本海に面する舞鶴鎮守府に第1艦隊（長門型2隻扶桑型2隻伊勢型2隻）大湊鎮守府（39年4月に鎮守府昇格）に第1機動艦隊（空母8隻金剛型4隻）が展開した事を聞き、増援を出せばウラジオストックが攻撃され火の海になるかうラジオストックが四季島軍のものになると参謀に言われると、少数の航空隊と装甲戦力を増援として出すに留めた

6月30日ソビエト連邦ノモンハン近郊補給基地

ソ連補給少佐「ふう、どうにか補給部隊を出せたな、無事に前線にたどり着いてくれればいいが、四季島の爆撃機は容赦ないからな、せめてもう少し護衛を就けてやりたいが」

この日この補給基地から輸送用トラック80両戦車4両装甲車12両で編成された輸送隊が出発していた

ソ連補給基地司令「仕方あるまい、何せ兵力が無いのだよ、兵力が、輸送トラックがあるだけ良いではないか、隣の基地はトラックを吹き飛ばされて馬車を使う羽目になっているらしい」

ソ連補給少佐「ですが、せめてもう少し極東方面軍を動かせないのでしょうか」

ソ連補給基地司令「無理さ、あまり引き抜けば全面戦争になるぞ、そうなればウラジオストックが危ない他の場所もな、それにブリテンやガレアが四季島側に立って参戦するかもしれないぞ、それにリバティリアもキナ臭い」

ソ連補給少佐「それは、そうですね」

ソ連極東方面軍は歩兵18個師団騎兵3個師団騎兵2個旅団潜水艦9隻掃海艇2艇戦車730両航空機790機を数えたがノモンハ

ンにはそこまで割くことができなかつた、舞鶴に歩兵第1第2第3師団が樺太に歩兵2個師団が満州朝鮮境界線上に歩兵3個師団と戦車1個旅団が集結しつつあることが知れたからであった、それどころか7月に入るまでに航空機372機を撃墜もしくは地上撃破され戦車も既に245両が撃破もしくは鹵獲されていたのであった

この報告を聞いた筆髭やヨシフおじさんの呼び名で有名なソビエト連邦書記長ヨシフ・スターリンは報告を1度聞き直した後聞き間違いを疑いもう1度聞き直した後大激怒した。

その結果指揮官のパーメン將軍は更迭代わりにシュテルン將軍を指揮官として派遣、それと同時にスターリンはモロトフを呼び出して四季島皇国駐ソ大使を通して講和締結に向けて動き出していた

7月3日四季島皇国皇都東京皇居何時もの間

中津「まさかスターリンから書簡が届くとは、それも内容が講話についてか」

伏見宮「まあ、舞鶴に第1艦隊と3個師団を展開させた成果だろうな」

東條「そうですね、他にも各所に多数の部隊を回していますから」
有田「内容ですが、ノモンハンの境界線は満州国の設定したハルハ川のラインで認めると、他にも極東方面には150mm以上の砲の配備を制限すると言ってきています、その代わりに和平をと」

東條「なるほど、150mm以上かいいと思うがどうだろうな」

中津「いいと思いますよ、出来れば兵の数も縛ってほしいですが、3個師団減らして貰いましょう、そのかわりこちら側も3個師団を満州から他方面に回すとすればいいでしょう動かす師団は中華戦線に回せばいいでしょうし」

東條「確かに支那方面に増派は必要だろうな、満州から引き抜くと手薄にならんか」

中津「朝鮮半島に新設する機動歩兵師団を置いておけばいいでしょうアレなら国境線で持ち堪えている間にたどり着けるでしょう」

東條「確かにアレの脚は速いからな、要塞線を強化して航空隊を張り付けておけば問題ないな」

有田「では、この条件を纏めた書簡をソビエト連邦に送ります」
伏見宮「お願いしよう、それと、和平会議の議場はどこがいいかね？」

有田「東京かモスクワで行うかと思いますが」

東條「モスクワでいいのではないですかね」

中津「あまり熊を皇都東京ないれるのはどうかと、猟師が必要になつては堪りません」

伏見宮「確かにそうだ、熊狩りはしたくないな、モスクワで行えるように調整してくれ」

有田「わかりました。そう伝えます」

7月25日四季島、ソビエト間の休戦協定通称モスクワ条約が締結された、結果として国境はハルハ川とされた、他にも極東方面に展開する兵力は双方とも歩兵8個師団まで騎兵師団は2個まで戦車は700両までとされた砲についてはソ連側150mm以上の砲は1000門まで75mm以上150mm未満の砲は300までそれ以下の砲500門までとされた日本側150mm以上の砲は350門まで75mm以上150mm未満の砲は500門までそれ以下の砲は制限なしとされたソ連側のみ制限は航空機は戦闘機260機爆撃機は180機非武装機は無制限とされた。

この後スターリンは四季島軍の強さを改めて認識し軍の強化と中国共産党への支援量を増やして四季島皇国の負担を増やそうとしていた

第11話

1939年9月1日ドイツ第3帝国はポーツランドにダンツイヒを要求したが拒否されたため宣戦布告、これを受けガリア、ブリテンなどで構成された連合はドイツ第3帝国に宣戦布告した、この日第2次世界大戦が勃発した、四季島皇国は当初は欧州は欧州で好きにしろのスタンスであったが、ドイツ第3帝国からの要請によりタングステンやクロム等の資源を若干安価で供給することとなった、他にもチハの後継車たるチハ車も少数が輸出された、輸出されたチハ車はドイツ陸軍で徹底的な試験を受け、こう評価された、

第1機動性

速度は標準的な物であり不満はない、行動距離は300kmとなかなか物であり、我が国の戦車にも同等のものを望む。

第2兵装

主砲は非常に強力であり対戦車戦に極めて有効である、問題点として1両辺り70発しか砲弾を携帯できないが、そこは数で対処すること、あくまでも対戦車戦を重視して歩兵の随伴はチハ車にさせることであるために対して問題視されていないようである、機関銃は口径13.2mmで四季島の陸海軍で標準的に使用される弾丸を使用されている、能力的には非常に強力な機関銃であり、徹甲弾を使用すれば軽装甲の目標なら貫通できる性能を持っている、またこの機関銃は対空射撃が可能ないように砲塔上部にも専用のターレットリングがあり、車長が砲塔から身を乗り出しながら射撃できるようにされている。

第3防御

この車両は砲塔前面65mm車体前面60mmと非常に厚い装甲を有しており我が国の戦車砲や対戦車砲では極至近距離ですら貫通できないものがある砲塔側面は前面55mm後面35mmと厚くなっているここで特徴的なのは砲塔が六角形であることである、四季島の士官曰く側面前部に砲弾が当たるとある程度の確率で跳弾すると言うのである、これが事実であるのなら厚い装甲をつけるより角度をつけたあ

る程度厚い装甲で厚い装甲と同等の防御力を持たせられるかもしれない、車体の装甲は前面が角度60°程度で傾斜している、これも跳弾を狙ったものと思われる。

第4 総合的な性能

総合的に見て我が国の3年は先を行く戦車であると思われる、走攻守どれをとっても我が国の戦車以上のものをこのチハ車は保持している、特に対戦車性能はこの車両を今後の標準にすべきであると思われる。

上記の報告書みたドイツ国防軍司令部とドイツ第3 帝国総統、ちよび髭や美大落ちことアドルフ・ヒトラーはチハ車に勝てる戦車を作るように命令を出すとチハ車のライセンスを四季島から得るように外務省に通達した

そして、ヒトラーは戦車メーカーの技術者を呼び出して話を聞いた
ドイツ第3 帝国総統府執務室

ヒトラー「諸君、私はチハ車を見たときになんといったか覚えてるかね、私はこう言ったのだ四季島の戦車より強い戦車を作れと、忘れてるのか、あれから2年だ君達は何をしていたのだ我が国の戦車はチハを越えているのか、どうなのかね」

ドイツ技師「はい、先月より生産を開始した3号G型はチハ車より優れています」

これを聞いた鉛筆を投げつけてヒトラーは激怒した

ヒトラー「当たり前だ、チハ車は1932年生産開始だぞ、今何年だ！1939年の9月だぞ何で7年前の戦車に勝って満足してるんだ、チハ車を見ろ、次はあれより強い戦車を早急に出来れば今年中に完成させろ、いいな」

会議室

ドイツ技師1「どうする、あれ以上の戦車を年内になんて」

ドイツ技師2「3号じゃ無理だ、4号に長砲身積むか」

ドイツ技師3「そうするしかないな、だが装甲はどうする」

ドイツ技師4「追加で外側に取り付けるしかないな」

会議の結果改修工事を受けた4号は史実より早い40年5月にF

2型が完成した、これをみたヒトラーは次はこれより強い奴を作るように厳命した

所変わってチへ車に戦車隊をスクラップの山に変えられたソ連軍では新型戦車の製作が行われていたが史実より1月早くT34―76が完成したにとどまった。

それと、この結果を受けてフィラルド政府はチハ車の追加購入とチへ車の購入に向けて動き出していた、結果としてチハ車48両チへ車12両が購入できたがチへ車の整備は共に来る四季島整備官の監督のもと行う条件となった、またノモンハン戦役では四季島皇製の航空機の性能の高さと練度の高さが世界に証明された、この事を受けたフィラルド軍内では四季島製の航空機導入を進めていた、既に95式戦闘機を50機導入していることも後押しに繋がったフィラルド政府は中津商会を通じて四季島皇国に97式戦闘機の購入許可と教官派遣を要請すると同時にフィラルド政府には四季島皇国から対ソ防衛協定の御誘いがきた、内容としては、

加盟国甲がソ連に攻撃を受けた際は加盟国乙以下の各国はソ連に対して可能な限り宣戦布告、甲に対してソ連に宣戦布告した国は援軍をしていない国は義勇軍を速やかに派遣する、国境を接している国は国境に軍を張り付ける事が明記されていた。

またフィラルド政府に対して四季島皇国はある程度の戦力を駐屯させたい旨を伝えてきた、これに対してフィラルド政府は対ソ防衛協定に加盟する旨と四季島皇国陸軍の駐屯を許可した、これにより四季島皇国陸軍クローン将校の原大将を総司令とするフィラルド方面軍が設立、軍といつても兵力は地上部隊は雪原での戦闘に特化した特殊歩兵2個連隊5000名1個戦車連隊48両機動砲兵2個大隊2400名軍本部300名後方支援要員1700名航空部隊97式戦闘機で編成された第9戦闘飛行隊48機94式爆撃機で編成された第2爆撃飛行隊48機洋上戦力は旗艦砲艦橋立以下砲艦4隻と神風型駆逐艦4隻建造が終わり戦列入りした松型駆逐艦2隻で構成されていた

司令部はヘルシンキに置かれフィラルド軍との共同訓練も何度も

行われていた

そして運命の日11月30日ソビエト連邦がフィラルドに宣戦布告した開戦当時の北欧近郊の動員兵力は兵員ソビエト側500000フィラルド、四季島側270000航空機ソビエト側700機フィラルド、四季島側420機戦車ソビエト側1500両フィラルド、四季島側180両とソビエト側が圧倒的であったが、開戦時イタロスで四季島軍3個歩兵師団がイタロス軍との共同演習を実施していた、開戦を受け四季島皇国は演習中の軍をフィラルドに派遣した、それと同時にイタロス王国もフィラルドに対して義勇軍の派遣を決定、条件としてチハ車改2型の安価での販売とライセンスを求めた、結果としてイタロス陸軍2000名がフィラルドに派遣された、兵装は全て四季島製であった

また、イタロス王国タラント港には小沢治三郎中将指揮下の艦隊、旗艦空母龍驤、重巡洋艦高雄、軽巡洋艦長良、駆逐艦8隻、給油艦知床で構成されていた。この艦隊はイタロスとの演習を終え帰国準備をしていた、この艦隊は開戦と同時に出航ジブラルタル海峡を抜けフィラルド支援に向かっていた

そして12月3日四季島皇国は友胞フィラルドに対して宣戦布告したソビエト連邦を批難する声明文を発表、その中で、本格的参戦については濁しながらも欧州方面展開中の部隊は友胞フィラルドを支援する事と歩兵20個師団が朝鮮半島やモスクワ条約規定に違反しない場所に展開している事とこのままフィラルドに対しての侵攻を長期にわたり行うのならば条約破棄も辞さない事を明かした

これを受けたソビエトは12月末までにカレリア地峡を落として可及的速やかに休戦することを決め、いかなる犠牲を払おうとも前進することを命じた

12月5日ソビエト、フィラルド国境線四季島軍フィラルド方面軍
防御陣地

四季島軍少佐「来たぞ、ソ連兵だ撃ちまくれ、陣地に近づけるな」

四季島軍兵1「了解、くたばれ、ソ連兵」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

四季島軍兵2「グハア」

四季島軍兵3「1名負傷、衛生兵、急げ」

四季島軍中尉「ソ連めどれだけの兵を此処に回しやがる、援軍はま
だなのかよ」

四季島軍少佐「泣き言を言うな中尉、もうすぐ航空隊が来てくれる」
四季島軍兵1「少佐アレを、味方です味方の爆撃機です」

この時上空に飛来したのはフィラルド軍所属の94式爆撃機4機
と95式戦闘機5機であった

ヒューウ、ドカドカドカン

四季島軍兵1「オオオオ！」

四季島軍兵3「見たか、ソ連の熊野郎」

フィラルド兵1「大丈夫か、救援に来たぞ」

四季島軍少佐「感謝する、友よ」

フィラルド兵2「なに、祖国を守るために遠くから来てくれたのだ、
急いでくるのは当然さ」

四季島とフィラルド、ユーラシア大陸の両端にある両国は中津の介
入がなければほとんど関わりがなかった両国は今戦友として戦って
いた、その他にもスウェーデン（史実スウェーデン）デンマーク（史
実デンマーク）ノルリス（史実ノルウェー）等から義勇兵が来ていた、
彼らは四季島製の小銃と手榴弾を持って戦っていた

そして12月19日四季島軍遣欧艦隊司令に任じられた小沢治三
郎はレーニンググラード近郊のソ連飛行場の破壊を決めた、此処には戦
闘機、爆撃機などが合わせて300機程置かれていた、これは現在の
北欧近郊のソ連航空兵力のほぼ全てであった小沢はこの飛行場を叩
き、講話への道を作ろうとしていた

この作戦には

四季島軍96式艦戦24機99式艦爆12機97式戦闘機48機
94式爆撃機48機艦艇17隻

フィラルド空軍97式戦闘機48機94式爆撃機48機

イタロス空軍97式戦闘機48機

イタロス海軍96式艦戦24機97式艦攻24機偵察機4機艦艇

11隻

義勇軍戦闘機17機爆撃機4機

合計で航空機349機艦艇28隻が参加した、作戦としては義勇軍とフィラード空軍戦闘機隊と96式艦戦の傘のもと艦隊を囿に洋上に敵の航空隊を誘き寄せ、レーニングレードの爆撃する事だった、またこの作戦にはイタロス海軍も旗艦空母スバルヴィエロ以下空母1隻軽巡洋艦2隻駆逐艦8隻艦載機52機が参加していた

艦隊はトウルク軍港を20日に出航、途中ソ連潜水艦1隻を沈めると少しづつレーニングレードに向け航行していた、これを確認したソ連軍司令部はパニックに陥った、航空偵察により敵艦隊の数はわかったのだが、事もあるうに高雄を艦橋の大きさから戦艦と誤認したのであったけどさらに砲も14inchだと思い込み14inch砲10門の戦艦がレーニングレードに迫っていると思ひ込んでしまったのださらに長良とイタロスの軽巡洋艦を重巡洋艦と誤認したのであった、この為実際は空母2重巡洋艦1軽巡洋艦3駆逐艦22で編成された艦隊を戦艦1空母2重巡洋艦3軽巡洋艦8（陽炎型を軽巡洋艦と誤認）駆逐艦14隻の大艦隊と認識更にこの後方に輸送船を確認したとの報告がソ連軍司令部を更なるパニックに陥れる、これは砲艦橋立に護衛されたヘルシンキに向かっていた物資の運搬船なのだがソ連軍は揚陸艦と認識した、これはソ連航空偵察員の練度に問題があるのだが、周囲になにもない洋上で艦種を間違えないで報告することを洋上偵察もまともにできない、いやまともにしたことのない兵士に言うのも酷であろう、そしてソ連軍は21日航空機157機を攻撃隊として発進させた、それを聞いた、小沢が吠える、

小沢「戦闘機隊全機発艦、全軍に打電作戦【乱】発動」

四季島士官「了解、全艦に打電作戦【乱】」

四季島通信士「作戦【乱】発動、繰り返し作戦【乱】発動」

艦隊は四季島、イタロス艦隊はそれぞれ輪形陣を取った四季島艦隊が前に後ろにイタロス艦隊が展開したそして重巡洋艦高雄電探が接近するソ連機を捉えたのは9時17分の事であった、小沢は直ぐに上空待機中の96式艦戦48機と基地から飛来してきた97式艦戦48

機と義勇軍機17機を迎撃に向けた、それと同時に暗号電を打った
『我敵機と交戦せり』と

第12話

1939年12月20日バルト海上空

太田「落ちろソ連機」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ドカーン

太田「これで今日8機目か、小隊全機無事か」『味方が追われてるな、全機着いてこい』

四季島パイロット1、2、3『『了解』』

イタロスパイロット1『追われてる、助けてくれ』

太田『今行く』

ダダダダダダ、ダダダダダダ

パンパンパンパン、ドカーン

イタロスパイロット1『感謝する四季島の、帰ったら一杯奢らせてくれ』

太田『そいつは生き残らないとな、後で陸で会おう』

龍驤管制官『空母龍驤より各機、敵の新手が確認された高度3500m速度340キロ東から来ている、迎撃せよ』

太田『聴いたな、小隊、着いてこい』

四季島パイロット1、2、3『『了解』』

ソ連指揮官『資本主義のクソ共だ、各機掛かれ』

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ソ連パイロット「火が火が」

ドカーン

四季島パイロット4『被弾した、帰還する』

四季島パイロット5『了解、無事につけよ』

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ソ連パイロット1『後ろに着かれた、誰か助けてくれ』

ソ連パイロット2『今行く、待ってる』

ソ連パイロット1『ダメだ翼を折られた、脱出できない、助けてくれ、誰か』

ドカーン

ソ連パイロット2「クソ、敵艦隊はまだ見えないのか、味方の爆撃機はどれだけのこってるのだ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ソ連パイロット2「しまった、被弾した、アレは敵艦隊か、くそこまで来て」

ドカーン

ソ連指揮官「敵艦隊が見えたか、残ってるのは30機と言ったところか、くそ200機近い数が出撃したのに、全機あの戦艦（重巡洋艦高雄）をやるぞ」

『『ザーザーザー』』

ソ連指揮官「くそこのポンコツ無線機め、ええい、とにかく俺が突っ込めばついてくるだろ、行くぞ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ドンドンドンドン、ドンドンドンドン

ドカーン、ドカーン

四季島海下士官「撃て撃て、近づけるな」

四季島海兵1「弾が無い」

四季島海兵2「弾持ってきたぞ」

四季島海中尉「あの敵機を狙え」

四季島海兵1「装填よし」

四季島海中尉「撃て」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

各艦から12・7cm砲弾40mm25mm13・2mm弾がソ連機に浴びせられる

ソ連指揮官「くそ、舵が効かんか、アレはレンスキー中尉の機か、あの角度なら、行け」

パンパンパンパン

ソ連指揮官「しまった、だが行けレンスキー」

ドカーン

高雄艦橋

高雄見張り員「敵機投弾コース」

高雄艦長「面舵30回避」

操舵手「ヨーソロ、おーもかーじ30」

ヒューウ、ドカーン

艦長「被害報告、急げ」

艦橋要員1「右舷艦尾に1発直撃もう1発は外れました」

艦橋要員2「火災発生するも消火中です」

龍驤艦橋

通信士「高雄から発行信号、＜我被弾スルモ損傷軽微ナリ＞です」

参謀長「今のところ作戦は順調ですな、提督」

小沢「そうでなくては困る、にしてもソ連の航空偵察員は、高雄を

戦艦と誤認するほどの質なのか」

参謀長「そのようです、それどころか橋立に護衛された補給船を揚

陸艦と誤認しているようです」

小沢「粛清の傷は思ったより大きく深いのだな、攻撃隊からの作戦

成功の電信はまだか」

通信士「まだです」

小沢「予想より、時間が掛かっているのか、さてどうしたものか」

参謀長「提督、とは言え敵の攻撃はほぼ防いでおります」

小沢「それもそうだな、最悪は巡洋艦群を突っ込ませてレーニング

ラードを火に沈めるか」

参謀長「さすがに無謀ではありませんか、ここで重巡洋艦を喪うと、

今後の戦略に影響がありますぞ」

小沢「確かにな、レーニングラード突入は無しだ、その代わりに沿

岸部のソ連部隊を吹き飛ばすぞ」

参謀長「了解です、地上部隊に現状を確認させます」

同時刻レーニングラードソビエト軍司令部

司令官「攻撃隊からの報告はどうなっております」

通信士「ダメです、先程から呼びかけていますが雑音が多くて、そ

れに輻輳も多く聴き取れません」

ウーウオウオウー

参謀「司令官、緊急事態です、敵機が敵機の集団がこちらに接近しています」

司令官「なんだと、迎撃機を上げろ、高射砲用意」

参謀「司令官、滑走路には今発進準備中の爆撃機隊が」

司令官「なんだと、直ちにどかさせろ、戦闘機を上げるんだ」

ドンドンドン、ドンドンドン

この当時レーニンググラードの高射砲は一方向の高高度から爆撃機隊の攻撃に対応するように配置されていた、そのため複数方向の中低高度から同時攻撃には無力であった

四季島爆撃隊指揮官『全機コースそのまま、投弾用意』

指揮官機パイロット「隊長、投弾コースよろし」

爆撃手「コース、ちよい右」

パイロット「ヨーソロ」

指揮官『全機投下、投下、投下』

ヒューウ

ドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカ

ソ連軍司令官「なんと言うことだ」

参謀「これでは攻勢に出れないですぞ」

ソ連軍司令官「そんな事はわかってる」

フィラルドパイロット『ヒーハー、やったぜ、おい四季島のこのままモスクワ空襲といかないか』

イタロスパイロット『さすがにそりや無謀だぞフィラルドの』

義勇軍パイロット『おい新手の敵機が来たぞ』

四季島指揮官『指揮官機より各機、敵の戦闘機隊確認、殲滅せよ、繰り返す殲滅せよ』

ダダダダダダダ、ダダダダダダダ

ヒューウ、ドカーン

ソ連パイロット3「こいつら速すぎる、く、喰らえ」

タタタタン、タタタタン

カンカンカン

ソ連パイロット3「くそ、当たってる、当たってるはずなのに、何

でアイツは落ちないんだ、後ろか」

ダダダダダダダ、ダダダダダダダ

パンパンパンパン

ソ連パイロット3 「しまった」

ドカーン

指揮官『指揮官機より各機、敵機殲滅、残弾の多い機は機銃掃射でもしてくれ』

四季島パイロット1 『行くぜ野郎共、お仕置きの時間だ』

四季島パイロット2 『喰らえ喰らえ』

ダダダダダダ、ダダダダダダダ

ダダダダダダ、ダダダダダダダ

ソ連兵1 「撃て、奴等を撃て」

タン、タン

ダンドンダンドンダンドンダンドン

ブーン、ダダダダダダダ

ソ連兵1 「グハア」

パスパスパス、ドカーン

レーニンググラードの工業地帯、飛行場、港湾施設は大火に包まれた100機を超える爆撃機の攻撃は約100トンを超える50キロから1000キロ爆弾等の各種爆弾を大量にばらまいたのであった、これにより25日に行われる年内最後の大攻勢は延期せざるを得なかった、これはスターリンの命令である年内にカレリア地峡の占領が不可能になった

この爆撃の被害は航空機170機戦車200両砲類500門トラックなどの車両400両が灰塵と帰した死者5421名死者の中には航空機の整備兵やパイロットなどの航空関係者が多かった

龍驤艦橋

通信士「攻撃隊から通信、攻撃成功、レーニンググラードは大火に包まれている」

参謀長「提督、これは」

小沢「やったな、艦隊転進、敵陸上部隊に砲弾をくれてやれ」

参謀長「了解」

艦隊は前線の後方に居るソ連軍第27狙撃師団の5割と第84狙撃師団の司令部を消し飛ばした

また、艦爆、艦攻隊を使いトラックや対戦車砲などの隠匿されている小目標を叩き潰していた

この報告を聴いたスターリンは報告を上げてきた士官にこう言ったという

スターリン「君、エイプリルフルの練習かね、まだ早いし出来も最悪だな、シベリアで鍛え直してきた方がいいのではないかね」

士官はこう言う

ソ連士官「同志書記長、この報告に嘘偽りはありません、報告書の通りレーニングラードは大火に包まれ燃え落ちております、攻勢は数ヶ月は不可能です」

スターリンはその発言を聞き終わると、一言呟いた、講和だ、と年明け1月7日スウエーニア首都ストックホルムでフィラルド共和国とソビエト連邦の講和条約通称ストックホルム条約が結ばれた
参加国は当事者のフィラルドとソビエト、会談主催国のスウエーニア、フィラルドを援助していた四季島、イタロス、が参加していた
〔ストックホルム条約〕

1 国境は戦前の通り

2 捕虜は全て交換する

3 ソビエトはフィラルドに対して公開謝罪する

4 ソビエトは賠償金としてフィラルドに10000000スターリングポンド(現代換算で約60億円)を1940年3月までに支払う、支払わない場合講和条約は即刻破棄、仲介国及び対ソ協定締結国はソビエトに対して無条件で宣戦布告可能とする

5 ソビエトは国境から30キロに100mm以上の砲を配備しない

6 ソビエトはフィラルドに鹵獲兵器を返還する

上記の条件で条約が結ばれた

このソビエトに不利な条約をスターリンは飲むしかなかった、それはバティリア内で冬戦争介入して対ソ戦をするべきであると言う

意見が拡大してきたからである、さらに四季島で大規模な動員が発令された事が現地で細々と生き残っていた共産勢力が報告してきたのだった（組織は報告後特務憲兵隊により野砲と火炎放射器で焼却処理）

これを聞いたソ連軍司令部は恐怖したノモンハンの悲劇が繰り返されると、ノモンハンでの四季島軍は3個師団程度であったが今度はその10倍である30個師団が動員確定、さらに中華民国と停戦についての動きがあるとの報告も届いていた（無論誤報）これにより元より反共産であった中華民国が参加する可能性があった、それにリバテイリアが参加すると、中華民国の膨大な人的資源にリバテイリアの膨大な生産力、対ソ戦のプロである四季島が指揮を取って東西からの挟み撃ち、こうなればいかにソ連といえど対応できる可能性は今は無かった

スターリンはこの報告を読み呟いた、最低でも戦前の国境を維持、賠償金は1500000スターリングポンドまでだそれ以上は奴らにくれてやるなど、結果的に500000スターリングポンドは要らなかった訳だが、その代わり砲の配備にケチがついた、スターリンは海軍は適応外である事を確認すると重砲を積んだ地上支援艦の建造を進めさせた（独ソ戦で中止）

そしてこの日条約は締結された、史実よりだいぶ早い終戦であった

第13話

1940年3月18日四季島皇国軍令部総長室

中津「では、計画に追加艦ですか」

伏見宮「そうなる、建造計画通り進めると駆逐艦が足りなくなるこ
とが判明した、そこで松型と秋月型を増産しようと思う」

中津「史実島風型の量産を考えていたのですが、松と秋月ですか、い
ささか雷撃能力に問題があるかと」

伏見宮「史実島風か、何隻建造する」

中津「実を言うと次期造船計画の私案を持ち込んでおりまして、そ
れがこちらとなります」

〔仮称、次期造船計画〕

1 建造中の高速戦艦8隻の追加建造

2 伊吹型8隻の追加建造

3 仮称島風型16隻の建造

4 秋月型24隻の追加建造

5 松型48隻の追加建造

6 揚陸艦の建造

7 水上機母艦の建造

8 海防艦の増強

中津「以上となります」

伏見宮「やり過ぎにならないか、これは」

中津「ですがリバテリアとの戦いになれば、補充可能な艦艇は相
当数必要です、特に戦艦は前大戦型が多いですからね、史実米国は条
約明けから40・6砲搭載戦艦を10隻建造しています。それに巡
洋戦艦が2隻、それに我々の敵にはブリテンも居ますブリテンはキン
グジョージV世級5隻巡洋戦艦3隻を含む20隻これを足せば既存
のリバテリア艦隊17隻に新造艦12隻の29隻ブリテン艦隊2
0隻の合計で49隻それになりますガレア艦隊10隻が加わります、それも合
わせれば合計で59隻となりますそれに対して我が方我が国が追加
建造艦を含めて戦艦26ドイツが装甲艦含めて7イタロスが7の合

わけて40隻となります、さらにドイツ2隻イタロス3隻我が国26隻、14inch砲以上搭載艦はこうなります、対するブリテンは据え置き、リバテイリアは27隻ガレア2隻となります、合計で我が方31隻敵方49隻となります」

伏見宮「とすると、増強は必須か」

中津「そうなります、独伊が戦艦を建造すれば別ですが、無理だと思われ、ドイツがガレアを落として此方に引き込めば戦艦を新規に建造してほぼ只でくれてやってもいいですが、まあドックは時間断層工廠に腐るほど用意できますので」

伏見宮「だが、ガレアを落としたとして、此方側で参戦するかね」

中津「ガレアは今でこそブリテンと手を組んでおりますが、基本的には反ブリテン思想の強い国です、それに史実だと英国は独国と休戦した仏国の艦隊を沈めておりますので、そこで我々が手を差しのべれば可能性はありましょう、予定ではガレア向け戦艦14inch砲×12門艦4隻、となります、あまり強力だと独伊に何を言われるか分かったもんじゃありませんからね」

伏見宮「だがそれではガレアの戦艦は多く見積もっても10隻、あまり変わらんぞ」

中津「質の向上は望めるでしょう、ガレアの戦艦は大半が旧式酷いものでは弩級のクルーベ級すらあるようです」

伏見宮「そこまで酷いか」

中津「はい、文句が来たら戦艦を独伊にも売ってやりましょう、どうせ時間断層工廠ならいくらでも好きだけ建造できます」

伏見宮「確かに、駐在武官にその旨を伝える支度をさせよう」

中津「お願いします、出来れば早急に売り払ってしまいたいですね砲は彼方で用意してもらうか、資料を貰って此方で作るかですが、此方で作る方が良さそうですね」

この事を聞いたイタロスのドゥーチェムツソリーニはすぐさまに商談の支度すると返答して2時間後に担当者と会い、金額、兵装、引き渡し時期、乗員の輸送方法を聞いてきた、四季島側の回答は金額は要相談兵装は15inch砲3連装4基12門速度29ノット43

000トンで航続距離14ノットで7800カイリ引き渡し時期40年5月末日人員は高速船で送迎、と伝えられた、なぜそんなに早く完成するのか不思議がるドゥーチェムツリーニに担当者はオフレコですが、と一言伝え、発注ミスで4隻多く船台に設置されまして、気づいたときには手遅れだったのです、兵装も主砲以外既に設置されてまして、廃艦にするにしても費用がかかりますから、と言った後に主砲はそちらから設計図をいただいて製造したいのですが、と伝えられた。これを聞いたムツソリーニは即購入を決めて、返事をした、こうしてイタロスは15inch砲艦4隻を入手した艦級名はフランチェスコ・カラツチョロ級とされたこれを受けたガレア海軍は政府にリシユリユー級を2隻追加で建造するように迫ったが予算不足を理由に断念した

そして1940年6月10日イタロスは連合国に宣戦を布告、同時にガレア国境線にチハ車改二(装甲を55mmまで厚くした最終型)を先頭にアルパイン線を突破、史実のごとく負けることもなく、トゥーロン軍港を包囲近隣の拠点を制圧した、

この報告を受けたヒトラーはイタロス軍が予想より強いことを知った。そして6月22日ガレア政府が降伏するこれを認めないド・ゴール将軍が自由ガレアを設立ガレア政府はヴィシーガレアに名を変え枢軸に加盟その後メルセルケビル海戦を受け、ヴィシーガレア政府は連合国に宣戦を布告、同日四季島から14inch砲3連装3基12門搭載の戦艦4隻を供給され地中海の連合艦隊を多数撃沈そしてドイツ空軍は7月10日よりブリテン島全土を空襲することに決まった、後に言うBOBバトル・オブ・ブリテンの開始であった
初日の先鋒は四季島製の97式戦闘機22型68機とju88爆撃機48機が参加した当初はbf109が護衛の予定であったが、ゲーリング国家元帥がbf109は護衛に向かないので護衛に向いている97式を使うように指示したための参加となった

これに対してブリテン空軍は初めてやり合う97式戦闘機に格闘戦を挑むというミスを犯していた、これが自機より横の機動力に劣るbf109には有効であったが、挑んだ相手は格闘戦が得意な97式

戦闘機、10分もしないうちに18機のスピットファイアと12機のハリケーンが撃墜された無線では当初97式戦闘機を固定脚の旧式戦闘機と舐めて掛かったブリテンパイロットは次々と撃ち落とされていった

ブリテンパイロット1『後ろに着かれた、振り切れない、誰か助けてくれ』

ブリテンパイロット2『待ってる今行く』『後ろに奴だと』
ダダダダダダダ、ダダダダダダダ

パンパンパンパン

ブリテンパイロット2「グハア、だ、脱出する」

ブリテンパイロット1「ダメだ、火が火が」

ドカーン

ブリテンパイロット3『すばしっこい奴め、そっちに1機行ったぞ』

ブリテンパイロット4『任せろ303ブリティッシュで蜂の巣だ、

喰らえ』

ダダダダダダダ、ダダダダダダダ、ダダダダダダダ

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン

ブリテンパイロット3『嘘だろ』

ブリテンパイロット4『なんて装甲をしてやがる、まるで空飛ぶ装

甲車じゃないかあれじゃあ』

ブリテン管制官『敵爆撃機接近、迎撃せよ』

ブリテンパイロット3『無茶言いやがる、どうする』

ブリテンパイロット4『やるしかないだろ』

ブリテンパイロット5「くそ、何機生きてるんだ、上か」

ブーン。ダダダダダダ、ダダダダダダ

ブリテンパイロット5「糞が」

ヒューウ、ドカーン

ドイツパイロット1「97を舐めるからこうなるんだ、さて敵機は何処かな」

ドイツ指揮官『指揮官機より各機、これより爆撃を開始する、警戒を厳とせよ』

ドイツパイロット2 『敵機確認2時方向下方に6機』

ドイツパイロット3 『了解、叩き落としくれる』

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ドカーン

ブリテンパイロット6 『振り切れない、誰か助けてくれ』

ブリテンパイロット7 『助けてやりたいがこっちも手一杯だ』

ドイツ指揮官 『進路よし、全機投弾開始』

ヒューウ、ドカドカドカドカドカドカドカドカン

ブリテンパイロット7 『糞、工業地帯が』

ブリテン管制官 『敵の新手が飛行場に向かっていて、戦闘機隊直ちに迎撃せよ』

ブリテンパイロット8 『無茶にも程があるぞ』

ドイツ軍は2波に爆撃隊を分けることでブリテン空軍の消耗を誘ったのだった、この隊には四季島からの義勇兵が混じっていた、彼らは97式戦闘機の最終型である32型(発動機を1450馬力の暮風2型に換装速度560キロまで向上した機体)を使い多数のブリテン空軍機を叩き落としていた

加藤 『敵機集団確認2時方向500下方、上から被るぞ各機続け』

四季島パイロット達 『『了解』』

加藤 「喰らえ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ヒューウ、ドカーン

ウィンストン・チャーチルは被害報告を聞いて聞き直した

チャーチル 「航空機73機に高射砲41門工場142棟死者1754名か」

秘書 「はい」

チャーチル 「手酷くやられたな」

秘書 「四季島から輸出されたタイプ97は恐ろしい戦闘機です、bf109以上の機動性で多数のスピットファイアやハリケーンが撃ち落とされています」

チャーチル 「四季島はなぜナチを支援するのだ」

秘書「オーストリゼア（史実オーストラリア）のバカどものせいで
はないでしょうか、昨今嫌がらせのような行為をしていますからで反
ブリテン感情が増幅されてもおかしくないかと」

チャーチル「流刑人の末裔のやらかしのせいでは、そのせいで戦艦
8隻かそれも有力な戦艦を、全くどうしろと言うのだ」

史実のBOBに比べ此方のBOBは連合国側の被害が大きかった、
四季島の長距離飛行型戦闘機のせいであった

第14話

1940年10月4日海軍横須賀航空隊
ブーン

中津「アレが新型機か、なかなか速いな」
技術者「はい中津社長、昨日採用された零式艦上戦闘機21型最高
速度580キロです」

中津「武装は13・2mm4挺と20mm2挺でしたね」
技術者「はい、航続距離も11型より300km長い2500km飛べ
ますし、20mm弾にも耐えます」

中津「発動機は新型の晴風2型1600馬力でしたね」
技術者「そうです、整備性は雨風と同等で倍程の馬力ですからね、素
晴らしいものです」

零式艦上戦闘機21型

全幅・11・50m

全長・9・221m

全高・3・67m

翼面積・21・50m²

自重・2,250kg

正規全備重量・3,250kg

発動機・晴風2型(離昇1,600hp)

プロペラ ハミルトン定速3翅 直径3・05m

最高速度・640km/h (高度6,000m)

上昇力・6,000mまで5分1秒

実用上昇限度・11,740m

降下制限速度・720・7km/h

航続距離・1,920km(正規)／2,500km(増槽あり)

武装13・2mm機首2挺20mm翼内2挺

爆装・30kg爆弾2発又は60kg爆弾

1940年生産機数5000機

1941年から毎年15000機〜50000機作られた主力戦

闘機翌年には陸軍が1式戦闘機傘として採用させた

特徴的なのが重武装とくそ長い航続距離であつたりバテイリア航空隊は戦闘を放棄していい理由の幾つかとして自軍戦闘機隊の7割以上の数の零戦が居た場合をあげている、もしくは敵機より500下方に自部隊が居る場合、自部隊の半数が特定機種の場合(P40、P39、F4F)これは見つけたらほぼ逃げるしかないこととなつていた

戦後の試験では12.7mm弾500発を機体に撃ち込めば撃墜できるとされたが、1撃離脱戦法では不可能とされた

ニックネームはhell、Satan、Zekkeの3種類であつたりバテイリア海軍航空隊は対抗馬としてF4Uコルセア、F6Fヘルキャトを送り込んだがその頃には新型の22型や32型が投入されたための提供するにとどまつた

中津「で他の新型機はどこに」

技術者「格納庫です、零式艦上爆撃機と零式艦上攻撃機は」

中津「どちらもいい機体ですからね」

零式艦上爆撃機新星

全幅 12.00 m

全長 10.22 m

全高 3.295 m

主翼面積 23.6m²

自重 2700 kg

正規全備重量 3900 kg

発動機 秋風1型(離昇1, 800hp)

最高速度 580km/h (高度6, 000m)

上昇力 6, 000mまで5分54秒

実用上昇限度 11, 740m

降下制限速度 780.7km/h

航続距離 2, 320km

武装機首13.2mm1挺後部13.2mm旋回機銃1挺翼内20mm2挺

爆装胴体1000 kg爆弾1発か500 kg爆弾2発か250 kg爆弾4発

翼下100 kgまでの爆弾2発もしくは50 kg噴進弾4発
零式艦上攻撃機白山

全幅・15.00 m (主翼折畳時7.5 m)

全長・10.865 m

全高・3.800 m

主翼面積・37.202 m²

自重・3,200 kg

正規全備重量・5,200 kg

発動機・豊風2型 (離昇2,000 hp)

最高速度・560 km/h (高度6,000 m)

上昇力・6,000 mまで6分25秒

実用上昇限度・11,740 m

降下制限速度・680.7 km/h

航続距離・2,400 km

武装機首13.2 mm 1挺後部13.2 mm 旋回機銃1挺翼内20 mm

2挺

雷爆装胴体1000 kg魚雷1本もしくは1000 kg爆弾1発か500 kg爆弾2発か250 kg爆弾4発

翼下100 kgまでの爆弾2発もしくは50 kg噴進弾4発

これらは開戦に備えて大量生産された開戦時には零戦2000機
機零爆新星1000機零攻白山1000機の合計で4000機
機が生産、配備されていた

そして1940年11月翔鶴、瑞鶴、雲龍、天城の4隻が戦列要り、
同日空母8隻戦艦4隻を中核とした第1機動艦隊が編成された、編成
は

旗艦空母赤城司令官小沢中将

1 航戦

赤城 加賀

2 航戦

蒼龍 飛龍

3 航戦

翔鶴 瑞鶴

4 航戦

雲龍 天城

第1 巡航戦隊

金剛 比叡 榛名 霧島

第3 重巡洋戦隊

最上 三隈 鈴谷 熊野

第3 水雷戦隊

阿武隈

第9 駆逐隊

朝潮 大潮 満潮 荒潮

第10 駆逐隊

山雲 夏雲 朝雲 峯雲

第11 駆逐隊

霞 霰 江風 涼風

第12 駆逐隊

春雨 涼風 海風 山風

第1 防空戦隊

長良

第1 防空駆逐隊

秋月 照月 涼月 初月

第2 防空駆逐隊

新月 若月 霜月 冬月

航空機は赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴の4隻が戦闘機48機爆撃機24機攻撃機24機偵察機4機蒼龍、飛竜、雲龍、天城の4隻が戦闘機24機爆撃機12機攻撃機12機偵察機4機で構成されていた

艦隊は佐世保を根拠地として支那戦域に半数を張り付けていた、パイロットは坂井、岩本等の四季島海軍の最精鋭が集められていた

そして1940年11月5日大和型戦艦大和、武蔵、近江型戦艦近

江、越後が戦列入り翌日11月6日雲龍型空母葛城、笠置、阿蘇、生駒が戦列入り、翌日山口少将を中将に昇進させ第2機動艦隊が設立41年3月には多数の艦を擁する艦隊となった

5 航戦

紅鶴 蒼鶴

6 航戦

葛城 笠置

7 航戦

黒鶴 白鶴

8 航戦

阿蘇 生駒

第2 巡航戦隊

近江 越後 越前 豊後

第9 重巡洋戦隊

利尻 斜里 月山 蔵王

第6 水雷戦隊

矢矧

第21 駆逐隊

白露 時雨 村雨 夕立

第22 駆逐隊

初春 子日 若葉 初霜

第23 駆逐隊

有明 夕暮 松 竹

第24 駆逐隊

梅 桑 桃 桐

その頃リバティリア政府はアイオワ級8隻の建造を決定、四季島海軍の増強に備えていた、この当時リバティリア情報部は四季島海軍の増強計画を読み違えていた四季島海軍は対外的には戦艦8隻を建造して金剛型、扶桑型、伊勢型を退役させると発表していた、つまり14inch砲艦を退役させて16inch砲艦で統一させる、888艦隊計画を戦艦の質的強化であるトリバティリア政府は思っていた

のだ、飛行機は戦艦を沈めれない、これは当時の常識であった、あるリバティリア海軍士官は言った「空母艦載機で戦艦や重巡洋艦は沈まん、沈んでも駆逐艦や軽巡洋艦が精一杯だ」これはこの時代の海軍の基本であったし主流的な考え方であった、ハルゼー中将など1部将校は警戒をしたものの艦の増加は先送りされ訓練の増加や基地航空隊の増強で対処せざるを得なかった、ただでさえ大戦で忙しい他の列強国は空母の追加建造には否定的であった。

1941年1月四季島国家総動員法発布これにより中津は時間断層工廠と時間断層農場、畜産場の拡大とフル稼働を決定

年産

航空機

零式艦上戦闘機 150000機

新星 10000機

白山 10000機

98式陸攻 3000機

砲類弾薬

15cm榴弾砲 3000門

砲弾 300000発

10cm加農砲 1500門

砲弾 150000発

10cm榴弾砲 5000門

砲弾 50000発

75mm野山砲 1500門

砲弾 150000発

車両

チヘ車 5000両

トラック 20000両

兵員輸送車 15000両

牽引車 3000両

小火器

小銃 20000挺

重機関銃10000挺
軽機関銃25000挺
短機関銃15000挺
拳銃10000挺
13・2mm弾1000000発
7・7mm弾3500000発
9mm弾3500000発
穀物

精米3000000トン
小麦1500000トン

野菜類

各種野菜250000トン

肉類

豚肉12000トン

鶏肉25000トン

牛肉10000トン

1941年2月近江型戦艦越前、豊後、翔鶴型空母紅鶴、蒼鶴、黒鶴、白鶴が戦列入り

同日中津商会本社ビル地下秘密作戦室

中津「ついに88艦隊計画の第1期艦艇群が戦列に入り出したか、開戦時には第7、第8艦隊も設立できよう、狙うは1つウィストン・チャーチルの失脚」

服部「ルーズベルトでなくチャーチルですか」

中津「そうだ、ウィストン・チャーチルはいわば扇の要よ、連合国が纏まつるのはアレが率いるブリテンの外交力と艦隊の力よ、でなくば史実合衆国がソ連に物資を廻すものかい」

服部「なるほど、確かにそれならチャーチルの失脚を行えば連合国は崩壊ですか」

中津「第7艦隊の指揮にはクローンのエドワード中将にやってもらう彼は雲龍型を2隻と追加建造の近江型を4隻用意してやるそれを使つてインド洋で輸送船狩りをやって暴れてもらおう」

服部「彼にですか、確かに彼は通商破壊の研究をしていましたね」
中津「そうだピツタリの人選だろう、後第6艦隊からも1部の潜水艦をインド洋に回すように取り計らう」

服部「まさに連合崩壊作戦」

中津「そうだ、インドはある意味大陸だ、あそこを落とすのは至難の技と言っている、だが海上を封鎖すれば物資は亜大陸に入らんし出ん、インドはブリテン帝国の王冠の1番目立つところにある宝石だそれを奪い取れば帝位を失う何せブリテンの帝位はインドから分捕ったものだからな」

服部「楽しみですね、帝位を失い没落していくブリテンの姿が」

中津「楽しみだなブリテン帝国が王国に落ちるのが」

第15話

1941年8月1日四季島皇国皇都東京中津商会本社ビル地下秘
密作戦室

中津「ついに禁輸ですか、ではプランA発動だな、服部くん現地部
隊に暗号電を」

服部「はい」

トントンツーツー

中津「さて、どうなるかね」

服部「出来れば各地で起きてくれればいいのですが、彼らの蜂起が
プランAこれは潜入させた中津が作り上げたクローンの反政府主
義者と現地の反政府主義者のリバティリアやオーストリゼア等の連
合国で戦火から遠いところを荒らす作戦であった」

8月6日リバティリア合衆国ミズーリ州で反政府主義者による内
乱が発生、彼らはリバティリア連邦を名乗り合衆国に宣戦を布告した
ミズーリ州軍は鎮圧に兵員2500名を派遣するも内1800名が
離反鎮圧軍は壊滅、それどころかどこからともなく現れたブリテンや
ガレア製の旧式戦闘機と爆撃機、戦車が連邦軍を援護ミズーリ州の3
5%を制圧（解放）隣接するアイオワ州イリノイ州でもリバティリア
連邦を名乗る勢力が出現州警察や州軍を撃破合衆国政府は正規軍の
動員を決定350000人の陸兵が投入されたが準備中にリバティ
リア連邦はミズーリ、アイオワ、イリノイ州を完全に制圧、隣接する
州の州軍を撃破していた

アイオワ州ミネソタ州州境第1陣地

この日連邦軍の大規模攻勢が行われていた

ダダダダダダダ、ダダダダダダダ

ドカーン、ドカーン

ミネソタ州兵「くそ、反乱軍めどれだけの弾薬を持ってやがる、そ
れに救援部隊は何時くるんだ」

ミネソタ州兵2「泣き言を言うな、救援はくる必ず」

ミネソタ州士官「そうだ、今は眼前の敵を撃て」

ドカーン、ドカーン

ミネソタ州兵3 「第2陣地がやられました」

ミネソタ州兵4 「機関銃の弾薬が欠乏寸前です」

ミネソタ州通信兵 「はあ！どうなってるんだ援軍が来ないだ」と

ミネソタ州士官 「どう言うことだ！」

ミネソタ州通信兵 「不明です、ですが来れないと」

同時刻ミネソタ州司令部

雛壇の様な司令部の最上層でリバティリア正規軍からの連絡士官の通達を聞き司令官は詰めよっていた

ミネソタ州軍司令官 「テキサスとカナダケベックで決起だと、それで来援は来ないと」

リバティリア連絡士官 「はい」

ミネソタ州軍司令官 「だが前線では未だ敵の猛攻を受けているのだぞ」

そう言うと司令官は自分たちのいる場所より低い所にある司令所に居る通信士や中級指揮官達を見た

司令部通信士 「第3陣地守備隊応答せよ、応答せよ」

司令官通信士2 「第5戦車中隊は現状を維持」

司令部通信士3 「中佐第21砲兵中隊から上空援護機は何時来るのかと」

司令部通信士4 「航空隊基地から通信、既に多数の機が出撃中近隣防空戦闘隊以外の航空部隊おらず出撃は不可能と」

州軍中佐 「とにかく少数でも構わんから航空基地に上空援護機を出すように伝えろ、防空戦闘隊が足らんのなら付近の地上防空隊を回すと伝えろ」

司令部通信士5 「第8自走対空機関砲隊から何処に移動すればいいかと聞いてきています」

州軍中佐 「そのまま南下して第5陣地周辺の防空をさせろ」

司令部通信士6 「敵戦車部隊が第7陣地に向かっているとのこと、戦車隊の来援を求めています」

州軍中佐 「余剰は戦車隊なんて、司令に聞いてくる」

タタタタ

州軍中佐「司令第7陣地に敵戦車部隊です、どうしましょうか」

ミネソタ州軍司令官「予備の戦車隊は残っていないのか」

州軍中佐「残っているのは機銃を主砲にしているM1だけです」

ミネソタ州軍司令官「それでいいないよりはマシだ、それに火炎瓶製作キットが前線にはあるはずだな」

州軍中佐「はい、全陣地に配備済みです」

ミネソタ州軍司令官「それで対処させる」

州軍中佐「了解しました」

結果としてミネソタ州アイオワ州の州境は死守できたが戦死者8200名以上を出す大戦闘となった

8月15日にテキサスで南部解放同盟が蜂起8月17日カナダケベックでガレア系住民によるケベック解放戦線が決起、現地のガレア系軍人や警官を味方につけほぼ無血でケベック州を解放これを受けて四季島皇国は在リバティリア四季島人や四季島系リバティリア人の四季島皇国への帰還を命じていた。この命令の後1941年10月中に大使館要員以外の全ての四季島人四季島系リバティリア人は帰国した8月19日インドムンバイなど3カ所でインド解放戦線が決起現地の英印軍を撃破、1部を同志に迎え在ブリテン軍を撃破していた、カナダ、インド方面にはオーストリゼア軍が救援に出撃したが手薄になったオーストリゼア各所で反ブリテン主義者の集団オーストリゼア独立連合が決起シドニー、ダーウィンが陥落、これを受けて連合各国はこの内乱を第3国の支援があると推察、四季島皇国に関係性の説明を求めた、四季島皇国は対ソ連連合の維持に全力を尽くしており内乱勢力援助は不可能と回答、確かに四季島はフィラルド等の北欧各国に戦闘機、爆撃機、戦車、野砲、小銃、機関銃等を多数無償、有償で援助していた、その負担と支那戦域を考えれば内乱支援は不可能であるとの回答に連合各国は納得した。

10月に入るとインド、オーストリゼアの内乱は終結、しかしネブラスカ州カンザス州がリバティリア連邦に制圧された、南部解放連邦もオクラホマ州を制圧したが、合衆国軍は10月15日に反抗作戦を

開始

10月21日オクラホマシテイ

ドカーン

リバテイリア兵1「くそ、こいつらどれだけの地雷を埋めやがった」
リバテイリア兵2「手榴弾にワイヤー着けて簡易地雷にしてやがる、おい、よく見渡せよ」

リバテイリア通信兵「こちら第5中隊、司令部地雷撤去班はまだか」
司令部『現在3ブロック隣で撤去中』

リバテイリア士官「地雷撤去班はまだか」

リバテイリア通信兵「まだです3ブロック隣で撤去中です」

ヒューウ、ドカーン

リバテイリア士官「グハア」

司令部『第5中隊応答せよ、応答せよ』

10月25日オクラホマシテイ奪還双方合わせて死者行方不明者27547名を出した、勢いに乗る合衆国軍は11月15日にオクラホマ州を解放、勢いそのまま11月20日に南部解放同盟首都オースティンを制圧そのまま降伏させた11月30日にリバテイリア連邦を降伏させた、結果として蜂起した者の大半を逮捕射殺してのだからリバテイリア連邦首相ジョン・マック・スミス、副首相アナーキリス・メイガー、軍司令官ジョセフ・マッケンジー等を捕まえることはできなかつた他にも南部解放同盟議会議長レノン・アスキス、同議会軍事委員長ジャク・マーキン、南部解放同盟軍司令官ジャスパール・マーキユリーら蜂起の中心人物は取り逃がした。

そして合衆国政府は権威高揚を鑑みハルノートを実行し渡して来た、そして四季島皇国12月8日を開戦日することを決定海軍は第1機動艦隊がハワイを第2機動艦隊がアラスカを第2、第7、第8艦隊がシンガポールなどの東南アジア一帯を第4艦隊がウエーク島を第6艦隊の対地攻撃型潜水艦が西海岸各所に噴進弾で攻撃することとなった、残りの第1第3第5艦隊は本土を警備することとなった、陸軍は18個歩兵師団と8個揚陸師団、5個戦車旅団を投入することとなった、

そして第1機動艦隊にはある新兵器が用意されていたそれは重油を焼き払うための兵器通称T弾中身はパーム油とテルミットが別容器で入れられた爆弾であった重量およそ100kg新星の胴体に4発翼下に4発を搭載しハワイオアフ島真珠湾の重油タンクを破壊して450万バレルの重油を焼き払うことが命令書に明記された

そして12月1日夜全世界に向け四季島皇国は声明を発表した

「この度のリバテiria合衆国の要求は文明国家に対する侮辱ともとれるものであり、我々四季島皇国はそれを呑むことなど何があつたとしてできるものではない、これは東アジアをその手中に納めんとするリバテiriaの愚かなる行為である四季島皇国は皇国標準時12月7日までにこれに対する回答の無い場合自由と正義、それに東アジア解放のために連合各国に宣戦を布告することをここに宣言する、これは畏れ多くも陛下からの勅令である」

翌日皇都東京では号外が配られていた、紙面には勅令下る開戦確定か、等の文字が書かれていた

第16話

12月7日海軍省会議室

伏見宮「結局リバテイリアは何も言つて来なかつたな」

中津「仕方ないですよ、ルーズベルトは開戦肯定派ですからね」

伏見宮「今頃第1機動艦隊から攻撃隊が出てる頃だろうね」

中津「そうですね、確か第1次攻撃隊が飛行場と湾内の艦艇を攻撃して第2次攻撃隊が重油タンクとドック設備でしたな」

伏見宮「そうだ例のT弾が雲龍と天城に積み込まれた」

中津「史実より艦の数も多いですからなこれでリバテイリア太平洋艦隊の戦艦隊は叩き潰せるでしょうな」

伏見宮「赤城や加賀も船体の延長工事までして搭載量を増やしたからな」

中津「ええ、その結果第1機動艦隊は常用機総数600機程の航空機が使えるようになりましたからね」

伏見宮「機体の手配には世話をかけたな」

中津「いえいえ、2個機動艦隊予備合わせて1400機予備部品と弾薬燃料爆弾魚雷に至るまでしっかりと用意しましたよ」

伏見宮「我々にできることはもうないな、祈るだけか」

中津「そうですね、スターブレイカー作戦、補給線は新型の旗艦型海防艦と商船改装の特務航空輸送艦を用意できました」

旗艦型海防艦

全長150m

全幅13.2m

基準排水量3800トン

武装14cm連装砲2基4門

長砲身7.6cm連装高角砲6基12門

ボ式40mm連装機銃4基8挺

25mm3連装機銃6基18挺

25mm連装機銃10基20挺

水上機射出カタパルト1基水上機3機

特務航空輸送艦

全長190m

全幅29・8m

基準排水量18040トン

武装長砲身7・6cm連装高角砲6基12門

ボ式40mm連装機銃4基8挺

25mm3連装機銃6基18挺

航空艤装カタパルト1基

搭載機96式戦12機（4機露天駐機8機格納庫）

物資1万トン

スターブレイカー作戦それはアラスカ準州の制圧と北米戦線の構築を目指したものであったが、第2の理由として試作機が完成した弾道弾仮称1式弾道弾の射程が4500kmとアラスカからなら西海岸全域と中北部の1部を射程にとらえることができるからであった、この作戦には第2機動艦隊と揚陸師団2個歩兵師団7個戦車旅団2個で橋頭堡を作り上げたその後山岳歩兵師団8個と雪原戦闘旅団5個を投入することが決められていた、この部隊の補給のために第5艦隊と航路防衛総隊の装甲巡洋艦出雲、八雲（共に改装済み）軽巡洋艦天龍、龍田、護衛空母2隻水上機母艦瑞穂、日進、特務航空輸送船20隻旗艦級海防艦8隻標準型海防艦64隻輸送船200隻輸送量220万トンが参加していた

12月8日リバティリア合衆国等の連合国に対して四季島皇国は宣戦を布告同時に枢軸国に対しての物資類の確約販売を発表そして四季島皇国はスターブレイカー作戦を発動、第1機動艦隊がハワイオアフ島真珠湾を攻撃していた

第1機動艦隊旗艦赤城艦橋

参謀長「提督、第1次攻撃隊全機発艦完了しました」

小沢「よろしい、第2次攻撃隊の発艦準備にかかれ、それと第4航空戦隊にT部隊の準備をさせろ」

参謀長「了解しました」

第1次攻撃隊288機第2次攻撃隊288機の合計576機がハ

ワイオアフ島真珠湾に襲いかかった

ハワイ現地時間12月7日午前5時太平洋艦隊は史実通り停泊していた四季島の宣戦布告は知っていたが主目標はフィリピン及び東南アジアであると思われる。為に一応増強されたアジア艦隊に警報が出されていた当時のアジア艦隊は戦艦1早期建造された護衛空母1重巡洋艦1軽巡洋艦2駆逐艦18隻で構成されていた、この戦力で四季島艦隊とやりあうのは無謀である。為開戦後すぐにフィリピンを放棄して太平洋艦隊に合流する予定であった。

そのため太平洋艦隊は真珠湾に呑気に寝ていたのであった、そして今攻撃隊が闇夜に隠れて迫っていたのであった。

戦艦カリフォルニア艦橋

艦長「そういえばそろそろ開戦時刻か副長、司令部から何か言ってくるか？」

副長「いえ、艦長がお休みになつている間に司令部からの言伝はありません、警戒しますか？」

艦長「いや、警戒はせんでいいだろう、ここはオアフ島真珠湾だぞ最短距離で来たとしても6000km以上の距離がある、その間には我が方の拠点もいくつがある、それに陸軍の連中が哨戒飛行してるはずだろ、来たとしても我々の敵ではない」

副長「確かに四季島海軍はフィリピン攻略の方が先でしょうしね」

艦長「さてああ君コーヒーを頼み、副長も飲むかね」

副長「ええいただきます」

艦長「コーヒー2つ急ぎでな」

従卒「了解」

ブーン

艦長「なんだあの高さは高度規定違反じゃないか誰の機か調べらせろあのパイロットの安全規定違反を航空隊に報告しないといかんな」
ヒューウ、ドカン

艦長「なんだ、弾薬庫の爆発か何かか」

副長「いいえ艦長アレをジャップの攻撃です」

艦長「そんなバカなここはパールハーバーだぞなぜジャップが攻撃

できるんだ、とにかく対空戦闘用意、機関始動急がせる狭い湾内では戦うに戦えん」

副長「了解です」

ドカーローン

海軍兵「アリゾナが」

砲術長「なんて事だ」

ダダダダダダ

ドカン ドカン

海軍兵「敵機接近」

艦長「近づけるな撃ちまくれ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

艦長「なんて低さだ甲板より低く飛んでいるぞ」

ドカーローン

副長「メ、メリーランドが」

艦長「くそのままでは、味方の戦闘機はどうした」

ドカーローン

副長「艦後部に1発被弾火災発生」

艦長「消火急げ、機関長どうだでられそうか」

機関長「どうにか出せませんが速度は13ノットが限界ですなんせ幾

つかの工程を強引に解決させたので」

艦長「構わん、僚艦に伝えろ我二続ケいいな、あらゆる手段それこ

そ手旗信号や信号旗も使え」

通信長「了解」

攻撃開始から30分後カリフォルニアを先頭重巡洋艦ヒューストン軽巡洋艦3隻駆逐艦9隻が続いていた

翔鶴所属の新星隊がこれに襲い掛かった

四季島パイロット1「行くぞ、くらえ」

ヒューウ、ドカン

四季島パイロット2「そろもう1発」

ヒューウ、ドカン

カリフォルニア艦橋

艦長「被害報告」

副長「3、4番砲旋回不能、軽巡洋艦1隻駆逐艦3隻戦列より離れます」

機関長「機関出力低下出し得る速力8ノットまで低下」

太平洋艦隊司令部

リバティリア海中佐「くそどうなってる状況は敵機はどっからきた」

通信士「メリーランドが沈んだとの事」

通信士2「飛行場が壊滅状態」

ガタン

キンメル「どうなっている、敵の空母は見つかったのか」

海中佐「いえ、確認できず、可能な限りカタリナを飛ばしておりませんが発見には至っておりません」

通信士3「ネヴァダ航行不能」

通信士4「アリゾナ乗員の救助未だ進展なし」

通信士5「入渠中のペンシルベニア4発被弾1、2番主砲損傷」

通信士6「敵の第2波です数は不明」

キンメル「くそ、どうすればいい、ともかく艦隊を湾外に出せいな」

海中佐「カリフォルニアを基点にある程度の艦が脱出に成功したようです」

キンメル「そうか脱出した艦隊にはハワイ島方面に向かうように伝えろ」

ヒューウ、ドカーローン

この瞬間キンメルは崩れてくる天井に押し潰された、艦隊司令官や参謀の1部は無事であったが司令部機能を失った事で事実上太平洋艦隊司令部は壊滅それに海軍の迎撃管制設備が破壊された瞬間であった

カリフォルニア艦橋

通信士「司令部応答されたし、応答されたし、司令部通信途絶」

艦長「なんだと、もう1度呼び出してみよ」

艦長（まさか、破壊されたのか、いやそんなはずはないあつてたまるか）

オアフ島パールハーバー海軍基地
ヒューウ、ドカーーーン

海軍兵1「くそめちやくちやだ」

海軍中尉「おい担架もってこい担架」

海軍兵2「誰か手を貸してくれ」

ブーン、ダダダダダダダ、ダダダダダダ

パンパンパンパン

パスパスパス、ドカーーーン

海軍少佐「くそ、衛生兵、衛生兵は何処だ負傷者が多いんだ直ちに
来い」

海軍兵3「少佐伏せてください」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

海軍軍曹「何さつき発進した航空隊は壊滅、そんなバカな」

高射砲陣地

陸軍大尉「ジャップの爆撃機など落として見せろ」

陸兵1「装填よし」

陸兵2「照準よし」

陸軍大尉「撃て」

ドン、ドン、ドン、ドン

ホイラー飛行場近隣対空機関砲陣地

陸軍少佐「撃ちまくれ敵を飛行場に近寄らすな」

ダンドンダンドンダンドン

陸兵3「弾を弾をくれ」

陸兵4「弾持ってきたぞ」

陸兵5「装填よし」

陸軍少佐「撃て」

ダンドンダンドンダンドンダンドン、ダンドンダンドンダンドンダンドン、
ダンドンダンドンダンドンダンドン

ヒューウ、ドカーーン

陸軍少佐「グハア、誰か誰か生きてる奴はいないか」

陸兵6「少佐、大丈夫ですか」

陸軍少佐「何とかだ、陣地は」

陸兵6「壊滅です、機銃は全てスクラップに」

ヒューウ、ドカドカドカドカン

海軍兵4「タンクが重油タンクが」

陸兵7「燃えてる」

海軍大佐「ありえんそうやすやすと重油は燃えないはずなのに」

重油は燃えにくいそれは理系の常識であった重油は発火点（燃え始める温度）が高いため通常爆弾なら簡単には燃えないしかしこの時の爆弾はパーム油を燃料にテルミットの着火剤を利用した焼夷弾であったため重油の発火点60度〜70度を普通に超えて燃え始めたのである当時パールハーバーの重油タンクには史実より多い850万バレルの重油が保管されていたそしてその全てが焼き払われたのであった

消防士1「炎の勢いが強すぎる、退避退避だ」

消防士2「クソ、退避」

リバティリアハワイ方面軍司令長官のショート中将は6時には司令部に入り指揮を取っていたが太平洋艦隊司令部の壊滅と錯綜する情報の中ではこれといった指揮が取れていなかった

ショート「発進できた戦闘機は何機いる」

通信士「確認できたのは7機です」

ショート「たったのか」

通信士「はい」

通信士2「第2高射砲陣地、壊滅」

通信士3「太平洋艦隊司令部が攻撃により破壊されましたキンメル

長官の安否不明」

ショート「何、キンメルがだと」

ショートはキンメルとはゴルフを一緒にするほど仲が良かったのだ、ショートは悲しんだが感傷に浸る時間はなかった

ブーン、ヒューウ、ドカーーン

シヨート「なんだ」

通信士「グハア」

7時18分ハワイ方面軍司令部が新星の1トン爆弾4発の命中で壊滅したこれによりまとまった抵抗はできなくなりつつあった

カリフォルニア艦橋

副長「高角砲の半数が破壊されました、それと駆逐艦5隻が新たに脱出しました」

艦長「司令部との通信は」

通信長「そ、それと司令部が破壊されたとの通信を確認しました」

艦長「そうか、指揮は誰がとっている？」

副長「不明ですが順序的にはパイ中將かと」

通信士「艦長、重油タンクが燃えているとの事です」

艦長「ありえんジャップめどんな魔法を使いやがった」

副長「敵機が後退を始めたようです」

艦長「そうかとにかく指揮系統を回復させろそれと負傷者の救護だ」

副長「了解」

8時7分空母赤城艦橋

小沢「これで第1段階は終わったな、では次はエンタープライズの搜索か、参謀長偵察隊は何か言ってきているか？」

参謀長「いえまだです」

小沢「そうか、戦果はどうなっている」

参謀長「戦艦6隻は湾内で撃沈1隻を湾の出口で撃沈1隻が湾外で未だ生存ですがほぼスクラップに近いようです重巡洋艦1隻軽巡洋艦3隻が大破駆逐艦10隻を撃沈できましたまた重油タンクは全て破壊できました飛行場も全て破壊できております、司令部も破壊できたようです」

小沢「作戦は成功だな」

参謀長「被害ですが航空機7機が未帰還ですが機体は全て洋上に脱出して潜水艦救難地点まで辿り着きました損傷機ですが49機が損

傷しました」

小沢「予想よりでかいな被害が」

ブーン、

9時2分偵察隊がエンタープライズを確認したのであったそして

小沢「攻撃隊全機発艦」

攻撃隊は赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴の4隻から48機ずつが発進して
いった総数192機内戦闘機96機爆撃機48機雷撃機48機編成
されていた

第17話

ハワイ現地時間1941年12月7日10時6分空母エンタープライズ艦橋

ハルゼー「状況はどうなっている、敵空母は発見できたのか」

参謀長「空母は確認できておりません、パールハーバーの被害ですが戦艦6隻が撃沈1隻がドックでスクラップに1隻が湾外で生存するも出せる速力5ノットまで落ちています。他の艦も多数が撃沈ないし大破底着飛行場が壊滅それに艦隊司令部が壊滅キンメル長官も戦死されたと、陸軍のシヨート中将も司令部ごと戦死されたと」

ハルゼー「何と言う被害だ、艦隊と根拠地の再建に何年かかるのだ、ハワイからカタリナはでているな」

参謀長「出ていますが発見の報告はありません」

ハルゼーは迷ったこのままハワイに向かうべきかそれともミッドウエー方面にいるレキシントンと合流すべきか

通信士「緊急電哨戒中の機が敵機を確認数は約200機との事です」

ハルゼー「全戦闘機発進、近くに雲はあるか」

観測員「艦隊後方にある程度の大きさのものを確認」

通信士「レキシントンから入電我敵機集団を確認す、ごく至近にレキシントンが」

ハルゼー「なんだと、ではこの攻撃隊はレキシントンを狙っているのか」

通信士「可能性は高いかと、レキシントンは我々に逃げろと言ってきています」

通信士「レキシントン対空戦を始めたようです」

参謀長「提督、反転命令を、ここで本艦隊がやられればレキシントンの犠牲が無駄になります」

ハルゼー「わかった、艦隊反転あの雲に隠れる」

空母赤城艦橋

小沢「何、敵艦隊はレキシントンを中心とした艦隊だ」と

参謀長「はいレキシントンと駆逐艦3隻を沈めたようですが残りは雲に入られたらしく攻撃不能と」

小沢「仕方あるまいまあレキシントンを食えただけよしとしよう、では帰るとしよう」

10時58分第1機動艦隊はハワイ方面から撤退を始めた艦隊の被害は航空機17機が撃墜されただけであった、対するリバティリア軍はハワイ方面では戦艦6隻撃沈ないし大破底着戦艦1隻ドック内で大破戦艦1隻大破以上撃沈未済その他艦艇多数が撃沈ないし大破底着さらに帰投中のレキシントンが撃沈オアフ島各所の基地施設飛行場は壊滅400機程の各種航空機は全て灰塵とかしたところか重油タンクが吹き飛ばされたため流れ出た重油の処理から開始しなければならなかった結局パールハーバーの復旧は1944年初頭になってしまった、さらに太平洋艦隊司令部が壊滅、それ以外にもフィリピンクラーク飛行場が地底貫通弾48発の直撃で月面のような有り様にアジア艦隊も駆逐艦10隻を失っていた。それどころか第6艦隊の対地攻撃型潜水艦がロサンゼルス沖から搭載している無誘導対地噴進弾24発を発射、大半は無人地帯に落ちるも数発が森林部に命中中規模な火災を発生させたさらにキスカ、アッツ両島が第5艦隊と第1揚陸師団により制圧されリバティリアがアッツ島に建設中であつた飛行場が占領され2週間後に完成ダッチハーバー空襲に使用されていった他の連合加盟国の状況もひどくオーストリゼアではブリスベン入港中の駆逐艦が市民の眼前で撃沈マレー半島に歩兵8個師団と戦車2個師団が上陸ブリテン軍の防衛線を突破して年内にシンガポールにまでたどり着いた対するブリテン軍も戦艦プリンス・オブ・ウェールズ、巡洋戦艦レパルスを基幹とする艦隊を出動させるも第7第8艦隊の近江型8隻の前に撤退シンガポール港に立て籠もらざるを得なかつた

ルーズベルトはこの報告を聞くと3度聞き返して理解すると卒倒した、それもそのはずである当初の計画ではフィリピンで陸軍が抵抗している間にアジア艦隊と太平洋艦隊を合流させブリテン東洋艦隊と共同で四季島艦隊を撃破する予定であつたのだがその中心になる

予定だった太平洋艦隊が司令部ごと壊滅しそれどころか自国領土それもほぼ住民もおらずインフラが整っていないとはいえ一部とはいえ占領されたのだそれどころかロサンゼルスが攻撃されるという事態まで起きていたリバティリア本国が攻撃されるのは1812戦争以来実に229年ぶりのことだった、ルーズベルトは支持率急落を恐れてすぐさま演説を行ったが、騙し討ちを受けたわけでもないのにこの被害なのかと上院、下院両議会の議員達に言われていた

これを受け、ルーズベルトは直ちに攻撃に出るように海軍に通達、これを聞いた海軍は空母を使った1撃離脱戦法でマーシャルやギルバート空襲を予定していた

参加予定の兵力は

総指揮官ハルゼー中将

攻撃部隊

空母エンタープライズ

重巡洋艦チェスター

駆逐艦5隻

補給部隊

給油艦1隻

駆逐艦3隻

が年明け2月18日に出撃する予定になっていた、それと同時期に太平洋艦隊司令部と拠点をサンディエゴに移動ハワイ方面にはオアフ島以外の各所に陸海軍の飛行隊と海兵隊、陸軍の歩兵師団が展開してハワイ諸島防衛をしていた、四季島軍の上陸を警戒してのものであった、リバティリア情報部は四季島陸軍の大規模上陸準備情報をキャッチしていたがそれがどこに上陸するかまではつかめていなかった、第1にフィリピンであるというものも居たが、すでにフィリピンはその大半の施設を失い航空兵力も壊滅し機雷で封鎖されたフィリピンの可能性は低かった、次に予想されたのが蘭印であったが既に蘭印近隣には別の四季島陸軍が展開しているため、それとあくまで上陸はリバティリアだとの情報のもと却下された次に予想されたのがハワイであった、太平洋艦隊は壊滅状態ウエーク島が四季島皇国

により制圧されて物資集積基地化されていたからである、上記の事から四季島皇国の攻略予定地点をハワイ諸島と断定歩兵6個師団と新設された戦車2個旅団を展開させた、この他にも一応アラスカにも歩兵1個師団を派遣合計で2個歩兵師団と州兵5000名でを広大なアラスカを守備することとなった

1941年12月26日四季島皇国はシンガポール沖でブリテン東洋艦隊と第7艦隊が交戦プリンス・オブ・ウェールズを大破、レパルスを近隣に座礁させ鹵獲したと報道した、それに対してブリテン海軍は事実であることを認めるがプリンス・オブ・ウェールズは中破であるとしたまた四季島の戦艦1隻を大破させたと反論したが四季島海軍はそのような事実はないとした、我が方の損害は戦艦1隻小破のみであると報じたのであった、実際はブリテン側プリンス・オブ・ウェールズ大破シンガポール港帰還後に着底、四季島戦艦若狭小破といった被害であった、鹵獲されたレパルスはその後霧の島に回航され霧の島大3ドックにて補修改装工事を行われ主砲を41cm連装砲3基6門に換装機関を換装して速力30ノットを出せるように改装された、42年3月に新設された本国守備艦隊に戦列入りしたこの艦隊は鹵獲艦や旧式艦や民間船舶徴用の特務艦や水雷艇、旗艦級海防艦、標準型海防艦を中心に構成されていた、そのため艦隊旗艦はレパルスに置かれ艦名もレパルスから丹波に変更されていた、艦隊は

旗艦戦艦丹波（旧名レパルス）

特設航空母艦（艦載機戦闘機12機爆撃機8機攻撃機4機）常盤丸、浜松丸、静岡丸、箱根丸

特設水上機母艦晴丸、露丸

巡洋艦新高（ヒューストン）巡洋艦五百島（寧海）巡洋艦八十島（平海）巡洋艦平戸（筑摩型防護巡洋艦）

特設巡洋艦鼎丸、秋葉丸、あるぜ丸、ときよう丸

峰風型駆逐艦峰風、澤風、沖風、灘風、羽風、潮風、秋風、夕風、太刀風、帆風、波風、沼風

神風型駆逐艦松風、追風、疾風、朝風、夕風

若竹型駆逐艦若竹、呉竹、早苗、早蕨、朝顔、夕顔、芙蓉、刈萱

旗艦級海防艦甲9号から甲16号

標準型海防艦丙121号から丙152号

水雷艇千鳥、真鶴、友鶴、初雁

1号〜4号警備艇（桃型駆逐艦）

1号〜24号哨戒艦（旗艦型海防艦ベースの探敵能力向上艦カタパルト2基水上機6機搭載）

艦上機艦隊合計96機

水上機艦隊合計230機

艦隊は旗艦級海防艦1隻と標準型海防艦4隻で構成されている哨戒艦隊8個水上機母艦1隻と水雷艇2隻で構成されている警備艦隊2個と哨戒艦が各所で単独行動していた後の残りの艦で構成されている本隊で構成されていた、この艦隊は序数艦隊が各前線に展開している間の本国警備の任に当たることとなっていた、中津としてはドーリットル空襲に対処するための艦隊として用意していたが基本は航路防衛総隊や海上保安庁と共同で民間船舶の安全維持を行っていた

そして1942年1月四季島皇国は巧みな情報操作でまことしやかな噂を流していた（曰く四季島海軍はリバティリアの新造艦隊が揃う前に大西洋艦隊を太平洋に誘き寄せ撃滅すべくトラック、マーシャルに集結中である）

（大西洋艦隊が展開する前に機動艦隊の総攻撃を持って西海岸を火の海に赤く染め上げると）

実際に第1第4艦隊第1機動艦隊がトラック泊地に展開第2艦隊がマーシャル泊地に展開、第2機動艦隊の消息が不明となっていた、最後に確認できたのは呉鎮守府から発進し小笠原諸島沖で確認できたのが最終確認であった、この事を受けリバティリア太平洋艦隊司令部は四季島海軍の目標は西海岸焼き討ちと釣られて出てくるであろう残存太平洋艦隊とこちらに向かっている大西洋艦隊の各個撃破であると推定残存太平洋艦隊は戦艦1隻空母2隻護衛空母3隻重巡洋艦5隻軽巡洋艦6隻駆逐艦45隻しかいなかった、戦艦カリフォルニアが4月戦列に戻る予定となっていたが決戦には間に合わないとされていた。また大西洋艦隊も独伊機動艦隊や41年12月15日に

参戦したヴィシーガレア艦隊の対処に忙しく救援艦隊はどうか史実より早く戦列入りしたサウスダコダとノースカロライナ、ワシントンの戦艦3隻と空母ヨークタウン、ホーネット、護衛空母ロングアイランド、ボーグ級4隻重巡洋艦3隻軽巡洋艦5隻駆逐艦24隻がすべてであった

救援艦隊はパナマ運河を42年1月15日に通過したがその後すぐに伊13潜を旗艦とする第3長距離潜水戦隊の襲撃を受けた、この攻撃でボーグ級1隻が撃沈1隻が中破駆逐艦3隻が撃沈5隻が戦列から離れた

2月3日に救援艦隊はサンディエゴに到着ニミッツ大将の指揮下に入った、その後すぐにマーシャル方面を偵察していた潜水艦が四季島艦隊マーシャル方面に展開の報を知らせてきた艦隊は第1第2第4艦隊と第1第2機動艦隊な連合艦隊主力であった、その後方には輸送船団を確認していた、また東南アジア方面からも第7第8艦隊が残存アジア艦隊を攻撃していたこの艦隊は戦艦1隻と軽巡洋艦1隻駆逐艦5隻で構成されていた

そしてニミッツ大将は艦隊に指示を出した「全艦出撃用意目標はハワイ進撃してきている四季島艦隊を撃滅する」

第18話

1942年4月3日ハワイ島とある飛行場
ブーン

リバティリア陸中将「B17重爆撃機、本国からの増援か、あれに
対艦攻撃ができるものか、せめて双発のB25かB26にしてくれ
ばいいものをあれなら魚雷を積んで対艦攻撃もできたのだが」

陸中尉「閣下、戦闘機隊が後30分で到着するそうです」

陸中将「そうかさて多数のP40が展開しているが、あのSatana
(零式艦上戦闘機のコードネーム)相手にどこまで戦えるものか」
同日太平洋艦隊旗艦戦艦コロラド提督執務室

パイ「はあ、この艦隊でジャップの主力と戦いハワイを守れか、無
理難題にも程があるぞ、この艦隊には16inch砲艦は4隻のみだ
それに対してアッチは16inch砲艦10隻だそれに14inc
h砲艦も8隻もいるせめてカリフォルニアが復帰すれば、せめてアジ
ア艦隊と合流できればな、まあ無理かあちらには戦艦が8隻もいるら
しい、何が戦艦はまだ4隻しか完成していないだ、16隻も戦列に
入っているではないか怠慢な情報部め、しかしここで負けるのもまず
いがそれ以上に戦艦隊を失うのはさらにまずい、サウスダコダ以外同
型艦の戦艦は早くても6月までは戦列に入れんと聞く、メリーランド
とウエストヴァージニアの復帰も早くても来年初頭だアイオワ級も
まだ完成しない、ハワイ航空隊の傘の下で戦えといっても傘の外を
ジャップの艦隊に抜かれて本土を叩かれてはどうにもならんぞ、追
撃しようにもコロラドは鈍足、ボーグ級も鈍足、これでは集中運用は
不可能に近い、かと言ってコロラドを除いて決戦をすればただでさえ
低い勝率がさらに低くなる、まあ最初から1%あるかもわからない勝
率だが、それに敵機動艦隊が問題だと相手は軽空母も含めて空母は2
2隻もいるようだ、我々には鈍足で性能の低いボーグ級を含めても7
隻だというのにそれに敵機は我々の機体より性能が上のようだ、ハワ
イ航空隊は600機ほど戦闘機は350機ほどかジャップの1個機
動艦隊と機数では同等性能では劣っているもしかしたら練度でも負

けているかもしれない、我々の空母航空隊が390機程合計でも1000程度、ジャップは2個機動艦隊で1200機それに軽空母がいるこいつらを足せば1500機は超えるだろう、ふう、最初から勝ち目はないな、せめて後半年あればそうすればワस्पとレンジャーもこちらに回されただろうそれに足が遅いとはいえボーグ級も幾分か回されたはずだそれに残りのサウスダゴダ級も戦列に入ったはずだ、半年稼げなかった政府の連中め、だいたいハルノートあれを叩きつけなければ四季島は開戦しなかったんだぞ」

コンコン

パイ「どうぞ」

ハルゼー「荒れてるなパイ」

パイ「これで荒れずにいられるかどうかやっても勝てん戦だぞ」

ハルゼー「確かに勝ち目は無い、それどころか上層部は艦隊を生贄にしようとしてるらしいって言われてるぜ、艦隊が壊滅したら即講和を政府に訴えるらしいからな」

パイ「らしいな、まあ支持率も既に30%を切ったらしいそれどころか不支持率が40%を越えたらしい、1戦交えた後結果で休戦か和平だろうな」

ハルゼー「やはりそうなるか、できれば白紙和平と行きたいが無理だろうな」

パイ「上層部は最悪ハワイ以西の無防備か、グアム、フィリピン、アッツ、キスカの割譲で済ませたいらしい」

ハルゼー「そうなればナチ共と大西洋で殴り合いか、あつちには空母が6隻いるらしいからな」

パイ「らしいな、噂だと四季島が追加で2隻から4隻ヴィシーガレアとイタロスに売ったらしいぞ」

ハルゼー「とすると合わせて最大14隻か、いくら中型でもそりや不味いな、艦載機も合わせりや700機くらいか」

パイ「今の合衆国の空母を全てぶつけても勝てんな、ブリテンのを含めてもだ」

ハルゼー「なんということだ、で新型の空母はいつ完成するんだ」

パイ「来年になるだろうな、なにせパールハーバーの1件まで主力は戦艦だったからな特に四季島の888艦隊計画で戦艦8隻が確定してそのあと巡洋戦艦4隻建造の噂が立ったからな、アイオワ級の追加計画とサウスダコダ級の追加で遅れに遅れてるらしい」

ハルゼー「あの時はそれが正しかったとはいえずしてやられたな全部ジャップの手の上で転がされてたってわけか、パイ、どうするどうやったって勝てんぞ、それこそ今からジャップに臨時停戦でも申し込むように意見したほうがいいくらいだ」

パイ「だが負け続けて停戦は無理だせめて1戦して勝たねばならんそれがたとて艦隊が壊滅しようともな、敵を撃退できれば我々の勝利になる、その結果を持って早期講和、それが上層部の考えだろう」

同時刻ワシントンDCホワイトハウス

ルーズベルト「でだ軍は勝てるのかね」

キング「海軍としては勝率は1%あればいい方かと」

ルーズベルト「なんとしてもジャップに打撃を与えろ最悪は西海岸で防衛戦だ」

マーシャル「了解しました大統領閣下」

ステイムソン「西海岸で防衛戦ですと、ですがどのラインで防衛するのですか、下手をすれば中部まで攻められますぞ」

ルーズベルト「そこは君たちに任せる、頼んだぞ」

3人「了解しました」

合議の結果四季島陸軍の上陸予想地点はロサンゼルス、もしくはサンフランシスコであるとされた両地には歩兵3個師団ずつと戦車旅団1個ずつを配備トーチカの建設を開始した、この報告を受けた四季島皇国では作戦の成功を確信したと同時にハワイの傘の外に合衆国艦隊を引き摺り出すように作戦を開始した、そして4月7日四季島艦隊は出撃大小合わせ179隻の艦艇がトラック、マーシャル両泊地を進発同時に西海岸各所に潜水艦隊が対地噴進弾を多数投射、中にはハワイ本島や修復中のオアフ島に叩き込んだ艦もあつたそして本隊は途中リバテリアの潜水艦哨戒機を叩き沈め落しながら1路ハワイ方面に進撃していた、この報を受けた太平洋艦隊司令部は迎撃を決

定ハワイ航空隊の傘の下で海戦しいかなる損害を受けようとも四季島艦隊を撃退することとした

4月23日ハワイ沖索敵中のカタリナ

偵察員「居ませんね、ジャップの艦隊」

機長「時間的にはそろそろこの辺りのはずだ、周辺警戒嚴重にな、落とされた機も多いからな」

機銃手「きやがれジャップ、この機銃で落としてやる」

このようにハワイ沖の海域を多数のカタリナやB25、B26が哨戒に従事していた、だが一向に敵艦隊は発見できない、そして4月28日オアフ島仮設泊地にてイタロスから借り受けた水中工作班による特殊攻撃が発生、戦艦コロラドが撃沈、ノースカロライナ大破、ワシントン、サウスダコダ中破、空母サラトガ、エンタープライズ大破底着と言った被害を被った、さらに攻撃当時コロラド艦橋にいたパイ中將も負傷し人事不在に陥ってしまった。これは晴天の霹靂であった何せ西海岸が丸裸になったのださらにロサンゼルス沖に南雲忠一中將指揮下の四季島第4艦隊が出現3時間後に攻撃することを告げて市民の避難を呼びかけた、リバティリア軍は海岸砲台や航空隊でこれを叩こうとしたが35・6cm砲弾が陣地を耕していた、また上空にも多数の零戦が乱舞していた

第4艦隊旗艦扶桑艦橋

南雲「そろそろ時間か、全艦に通達、砲撃はじめ」

通信長「了解、全艦砲撃始め」

ドーン、ドーン、ドーン、ドーン

ヒューーウ、ドカーーーン

ヒューーウ、ドカーーーン

この攻撃で軍事施設や港湾設備以外にも多数の民家が商店が工場や橋が破壊された艦隊は4時間撃ち続けていた全艦交互射撃のため1分間に24発が撃ち込まれた4時間で何度かの目標地変更を行いながら合計4800発が撃ち込まれた途中何度も10数機の航空機が艦隊に攻撃しようと接近したが第4艦隊所属の零戦と第3航空戦隊からの上空援護機により艦隊に近づくこともできなかった。でき

たとしても多数の高角砲とボ式40mm25mm機銃のシャワーで叩き落とされる事が決まっていた、そして艦隊は姿を消した、太平洋艦隊は機能不全に陥り第4艦隊を迎撃できなくなっていた、大西洋からサウスダコダ級3隻と空母ワスプが太平洋に向かったが、そんな中5月2日アンカレッジ沖に四季島第5艦隊が出現同行していた揚陸艦隊から多数の戦車搭載の特大発や歩兵満載の大発が吐き出されていた揚陸部隊は

軽歩兵4個連隊14000名

野戦軽砲1個連隊3000名

多連装自走噴進砲(カチューシャ擬き) 1個連隊1500名

戦車1個大隊24両

砲戦車1個大隊24両

及び付属整備隊合わせて500名

本部大隊1000名

合わせて20000名

で編成された第2揚陸師団であった、当時アンカレッジには州兵2000名が守備についていたが第5艦隊と第2戦艦戦隊(長門、陸奥)により防御陣地ごと吹き飛ばされていた、結果として第2揚陸師団は無血でアンカレッジを制圧後続の部隊が送り込まれ歩兵3個揚陸2個師団と戦車2個旅団がアンカレッジからアラスカ全土制圧のために進発アラスカ守備隊を撃滅し5月29日にカナダとの国境までを制圧したこの時には歩兵15個師団と揚陸3個師団戦車5個旅団が展開していた、そして6月3日5大湖工業地帯に多数の1式弾道弾が飛来、数日前から四季島皇国は5大湖攻撃を宣言していたが片道4000kmを越える爆撃はあり得ないとしていた、だが弾道弾の存在を知らないリバティリアには攻撃は航空爆撃だと思っていたから仕方ないであった、この攻撃で工業地帯に13%が灰塵となった、攻撃がアンカレッジからだと思ったルーズベルトは直ちにアンカレッジ奪還を命令した、その命令を受けリバティリア陸軍27個師団とカナダ軍6個師団が攻撃の支度をしていた

第19話

1942年6月10日ブリテン帝国ロンドン首相官邸

チャーチル「シンガポールが落ちたか、これで着底してるプリンス・オブ・ウェールズも四季島に奪われるか」

秘書「首相、カナダ軍のアラスカ侵攻部隊が壊滅しました」

チャーチル「被害は、被害はどのくらいか」

秘書「6個師団が壊滅捕虜は約30000人、40000人程度かと」

チャーチル「そうか、アラスカ侵攻にはリバテイリア陸軍もいたはずだがどうなった」

秘書「そちらも既に10個師団が壊滅残りの師団も平均4割の被害が」

チャーチル「カナダはなんと行ってきている」

秘書「救援の陸軍部隊を求めてきています」

チャーチル「無理を言うな、余剰な兵力などあるわけなからう、インドやオーストリアから軍を運ぼうにもインド洋や太平洋の制海制空の両権は四季島に奪われた以上どうやって運ぶと言うのだ、全て水没させられるぞ」

秘書「停戦をしますか？」

チャーチル「無理だろう、それに今すれば極東利権、いやインドや中東利権すら奪われるぞ、そのようなことになれば帝国は没落するぞ」

1942年6月10日シンガポール軍港が陥落大破着底していた戦艦プリンス・オブ・ウェールズが四季島軍に鹵獲され時間断層工廠で改装、あまりにもクソい装甲と砲のゴミみたいな整備性により、1時はスクラップ送りの予定であったが、時間断層の最奥の時間が100倍速で進む無人工廠で改装の結果41cm3連装砲3基をどうにか載せて艦上部構造物のペラペラ装甲も四季島製戦艦標識にまで厚くされていたまた同時にアジア艦隊追撃戦で鹵獲した戦艦アイダホの改修が行われていたアイダホの方は船体の延長と機関の改装の結果

速力29ノットの快速艦となった

プリンス・オブ・ウェールズは本国守備第1艦隊に配備され、アイダホは新設された本国守備第2艦隊に旗艦として配備されたこの艦隊は旧本国守備艦隊現本国守備第1艦隊司令部から防衛範囲が広すぎて対処不能との意見を受け新たなる鹵獲艦と既存艦隊からの引き抜きで設立された

旗艦戦艦石見（旧アイダホ）

軽巡洋艦黒部（旧ボイス）

特設巡洋艦太田丸、豊根丸

特設航空母艦佐世保丸、横浜丸

特設水上機母艦りおね丸、めきし丸

松型駆逐艦雪松、只松、黒松、白松

5号〜12号警備艇

25号〜36号哨戒艦

駆潜艇1号〜84号（史実第28号型駆潜艇ベースボ式40mm機銃装着）

規模としては本国守備第1艦隊に比べて小規模なものであったが大量の駆潜艇が配備されたこれは防衛範囲が本土から台湾一帯と行った小規模な範囲であるが大量の輸送船舶が航行する航路であるためであった

6月25日史実よりほんの少し早いブラウ作戦が発動されたこの時ソ連は極東方面軍から相当の兵力を引き抜いていたその結果極東方面軍は狙撃2個師団と戦車1個連隊、航空機80機程度にまでなっていたこれを知ったヒトラーは四季島に対ソ戦参戦を要請する使者としてリツベントロップを送ると同時にフィラルドにも参戦要請をしていた四季島に対しては三国同盟の真骨頂を見せるべきだと語りウラル山脈以東は四季島割譲するようにに総統閣下はおつしやていと伝えた、フィラルドには冬戦争の報復を共にと伝えていた、フィラルド国民は四季島の参戦があれば参戦するように政府に要求する可能性は高かった、冬戦争当時多数の軍を引き連れて援護してくれたのは四季島とイタロスであった、イタロスは対ソ戦に参戦していた、

フィラルドにはイタロスからも参加のお誘いが来ていたが、四季島の参戦があれば確実に行うだろうというのがヒトラーの考えであった、事実としてフィラルドの親四季島感情は高く現在の対連合戦にもある程度の義勇軍を政府とは無関係として四季島に派遣されていた彼らは四季島製の装備を持ち四季島軍の指揮下で主にアラスカ戦線で活躍していた

7月18日四季島皇国皇都東京

中津「では対ソ開戦と」

東條「そうなります、モスクワ条約違反が確認できたのですよ、戦車が幾分か増強されているようです、些か、いやだいが古くさいやつですが、それに中華共産党の工作員が、国境線で何かしているようです、先日の1件もやつらの仕業でしょう」

中津「警戒しておきましょう、で開戦はいつ頃」

東條「予定では8月8日でしょう」

中津「なるほど史実の逆ですか、ではヒトラーには支度に時間が掛かるとおきですか」

先日の1件とは満州国鉄道の鐵路が破壊された事であった、この1件は中華共産党による破壊工作であったが陸軍は、これをソ連の仕業として開戦の決め手としようとしていた、その為に歩兵師団48個戦車師団8個航空戦闘戦隊7個航空爆撃戦隊3個で編成された第2統合航空戦闘団を投入この部隊には戦闘機爆撃機合計で2400機が所属していた、それに海軍第3艦隊、本国守備第2艦隊がウラジオストク攻略に動員された、これに対してソ連側は狙撃師団2個戦車連隊1個航空機80機潜水艦3隻掃海艇3隻哨戒艇5隻モンゴル軍歩兵師団が5個騎兵師団が7個戦車20両航空機7機戦力になるか不安な中華共産党公称1000000人実数1800000人であった、よくまあここまで盛ったものである

7月24日ベルリン総統官邸

ヒトラー「四季島はなんとやってきている」

リツベントロップ「8月に開戦となにぶんアラスカ戦線や支那戦線、太平洋戦線があるようでそこまでの兵は出せない」と

ヒトラー「それは仕方あるまい、あの広大な戦線を維持しているのだ。ともかくだなんとしても前線を突破するように伝えよいいな」

陸軍高官「はい」

ヒトラー「それとゲーリング国家元帥、ブリテン空襲はどうなっておる、いまだにチャーチルの頸はこの私の前に届かんのだが」

ゲーリング「なにぶんロンドン一帯の防空網が厚く、今四季島から1式弾道弾の輸入が出来ないか交渉しております、あれがこちらにも来れば必ずやチャーチルの頸を閣下の眼前にお持ちします」

ヒトラー「そうか、レーダー元帥海軍の方はどうなっておるロイヤル・ネービーを撃滅しろとは言わんがせめて戦艦の1隻くらい沈めてくれないかね」

レーダー「その事ですすが昨日の海戦においてリバティリアの戦艦ニューヨークを大破させました、それにブリテン戦艦ハウにも相当の被害を与え輸送船30隻以上を撃沈しております」

ヒトラー「そうか、だがニューヨークは旧式の戦艦だったはずだな、それにこちらの被害は」

レーダー「確かに旧式ですがリバティリア大西洋艦隊に残された数少ない戦艦です被害ですがビスマルクが小破、重巡洋艦ザクセンが中破しております」

ヒトラー「ならよい、次は戦艦ハウを叩き沈めるのだよいな」

レーダー「はい、必ずや」

この当時大西洋にはリバティリア大西洋艦隊に戦艦は大破したニューヨーク以外には戦艦テキサス、ニューメキシコ、ミシシッピ、アーカンソーが展開していたがどれもこれも前大戦型や戦間期の旧式間揃いであった、ブリテン艦隊はキングジョージV世級4隻ネルソン級2隻クイーンエリザベス級2隻レナウンの合計11隻自由ガレア艦隊クルーベ級2隻プロビデンス級1隻合計で18隻がいたがそれに対して枢軸はドイツ艦隊ビスマルク級2隻シャルンホルスト級2隻ポケット戦艦3隻イタロス艦隊ヴィットリオ・ヴェネト級3隻フランチェスコ・カラッチョロ級4隻コンテ・デイ・カブール級2隻カイオ・ドゥイリオ級2隻ヴィシーガレア艦隊ダンケルク級2隻

リシユリユー級2隻リヨン級4隻合計で24隻が居たのである空母はリバテイリア艦隊が空母レンジャー、ボーグ級7隻ブリテン艦隊が空母アーガス、フューリアス、イーグル、イラストリアス、ヴェイクトリアス、フォーミダブル、インドミダブルの7隻自由ガレアがベアルン1隻合計で16隻対する枢軸は四季島から購入した空母3国合計で14隻それ以外にドイツのグラーフ・ツェッペリン級2隻の16隻であった無論ジブラルタルがブリテン側である以上イタロス艦隊とヴィシーガレア地中海艦隊は地中海から出てこないがそれも時間の問題であった、既に対岸のセウタが枢軸の手に落ちた以上いつまで持つかわからなくなっていた

そして8月8日四季島皇国はソビエト連邦にモスクワ条約違反と先の満州鉄道の破壊工作を理由に宣戦布告した

第20話

1942年9月15日

リバティリア合衆国ワシントンDCホワイトハウス

ルーズベルト「でだ、軍はいつ反抗作戦を行うのかね、開戦からはや9ヶ月ジャップが対ソ戦を始めて既に1ヶ月たっている、スターリンから太平洋に第2線を作れと矢の催促だ、艦隊も揃ったのでそろそろ始めてくれないかね、それと先月の反抗は失敗したようだが、次はないぞ」

キング「その件ですが来月には始めれるかと、海軍はサウスダコダ級6隻ノースカロライナ級2隻とエンタープライズ、サラトガ、ワスプ、エセツクス級6隻、ボーグ級8隻を投入します、目標はソロモン諸島となっております」

マーシャル「それに陸軍も3個師団を派遣する予定です、海兵隊が先に上陸しますが」

ルーズベルト「勝てるのかね、ジャップの艦隊は精強だ」

キング「無論です、ソロモン方面のジャップの艦隊は戦艦4隻空母2隻を主力とした第8艦隊です、数的優位をとっております、それにオーストリゼア各地の飛行場からラバウル等のジャップの拠点への空襲を徹底的に行っております、被害も甚大ですが多数の敵機を破壊しております」

ルーズベルト「だが、トラックには戦艦6隻と空母2隻を主力とした第1艦隊と戦艦4隻と空母8隻を主力とした第1機動艦隊がいるだろうこれが出てきたらどうするのだ戦艦と空母がそれぞれ10隻ずつ増えるのだぞ」

キング「それについてですが、ブリテン艦隊がオーストリゼアに展開しておりますR級4隻と空母ハーミーズ、我国から寄与したボーグ級が4隻です」

ルーズベルト「ならいいが、アラスカ奪還はどうなっている、何時までもジャップに神聖なる国土を制圧されているわけにもいかん」

マーシャル「それについてですが、現在国境線に歩兵24個師団戦

車7個旅団を展開させております、他にもカナダ軍5個師団が展開、それに航空機1000による大規模空襲も頻繁に行っておりますので次の夏に奪還する予定です」

ルーズベルト「ならいい、必ず勝てよ、特にアラスカはな、五大湖に奴等の忌々しいmeteor(1式弾道弾)が降り注いでおる、アレを止めねば再来年の選挙に勝てんのだ」

1942年9月19日四季島皇国横須賀

中津「ついに完成ですか大鳳、40000トン級の割りに搭載機数は雲龍型と同等なのはあれですが」

造船技師「ですが装甲でガチガチです、2000kg爆弾の直撃に耐えれます、砲撃戦に巻き込まれたとしても耐えきれるかと、大和の主砲弾は流石に無理ですが、リバテリアの戦艦砲には耐えられると思います」

中津「で、2番艦の天鳳共々第1機動艦隊に所属ですか」

山本「予定ではそうなります」

中津「第1機動艦隊は今トラックでしたかね」

山本「そうですねなので配属は遅ければ年明けになるかと」

中津「急げませんか、リバテリアの反抗作戦が近そうです、狙いはソロモン諸島の辺りだと思うので」

山本「昨今のラバウル空襲はその布石ですか」

中津「だと思えます、リバテリアは負け続け、そろそろ勝たないと支持率に影響が出るでしょう」

山本「確かに連戦連敗向かうとこ負けのみ、44年の大統領選に負けますな、このままだと、で反抗ですか、ですが先月の1戦でヨークタウンを失いホーネットを鹵獲された彼方にそこまでの余力があるのでしょうか」

中津「あるでしょう、どうにも新型空母6隻とサウスダコダ級6隻が太平洋に展開しているようです」

山本「あっちは豪勢ですな、新型空母が6隻ですか」

中津「必要なら用立てましようか？現状建造中の大鳳型6隻に追加で大鳳型6隻と近江型6隻」

山本「やめておきます、護衛の艦が不足しますから」

中津「それなら護衛の艦艇も追加しましょうか、具体的には伊吹型8隻に秋月型24隻に松型32隻でどうでしょう」

山本「流石にそこまで増やしますか？」

中津「まあ第3機動艦隊を作れる程度にしましょうか」

山本「そうですね、その程度がいいでしょう」

その後大鳳型8隻近江型4隻伊吹型4隻秋月型8隻松型16隻を追加で建造これに軽巡洋艦2隻を追加し、角田中将を司令官とする第3機動艦隊を42年11月に戦列入りさせた

その日の夜皇都東京中津邸

中津「さて、この大戦ももう長くはないだろう、マンハッタンプランかやつと掴んだぞ、ロスアラモスカ、攻撃圏内だな1式弾道弾で叩くか、それとも試作中の例の多弾頭式の方がいいか、少なくとも主だった研究者を川の向こうな送らないとな、どっかで再研究などされては溜まったもんじゃないからな、毒ガスの利用しての殲滅、流石にこれは不味いな、まあそこは参謀本部の連中に任せよう、後は終わらせ方だな、ウラル以東のソ連領、それに満州国、福建一帯、東南アジア、アラスカ、これだけは確保できるだろう、防衛の事を考えれば陸軍は50個師団はいるな、海軍も現状維持、鹵獲艦と旧式艦で構成される本国守備艦隊は解体、退役まあレパルスはブリテンに返してやるか、ホーネットもリバティリアに返すかな、あっても終戦後は使い道がないからな、まあリバティリアをいくつかに分割するのは規定ですが、どこに返すかな」

この夜中津の中で戦後に関する指針が作り上げられた

1, 中華地域は複数の国家に分割

2, ウラル以東、アラスカは本国編入

3, 東南アジアは史実通り独立、設立予定の環太平洋協定に参加させる

4, リバティリアを複数国家に分割

5, インドはブリテンに任せる

6, 東南アジアにあるヴィシーガレア領は四季島皇国が購入後解放

- 7, 北欧諸国は四季島皇国との防衛協定継続
 - 8, 本国守備艦隊は解体、1部鹵獲艦は返還
 - 9, 初春型までの駆逐艦、球磨型までの軽巡洋艦、伊勢型、扶桑型、鳳翔、龍驤、大鷹型は退役、解体、祥鳳型、千歳型、龍鳳、古鷹型、青葉型、川内型は改修後航路防衛総隊に配属
 - 10, 航路防衛総隊の装甲巡洋艦、天龍型、夕張は退役
 - 11, 赤城、加賀、飛龍、蒼龍は代艦の建造後退役代艦は75000トン級艦載機100機ジェット機対応の改大鳳型空母
 - 12, 上記の改大鳳型4〜8隻の建造
 - 13, 85000トン級51cm3連装砲4基12門搭載33ノットを出せる高速戦艦4隻の建造
 - 14, 上記の艦建造後長門型は記念艦に
 - 15, 最上型、利根型を後部砲塔撤去して回転翼機運用艦に改装
 - 16, 歩兵師団は機械化と同時に50個師団程度に削減
 - 17, 戦車師団は15個を定数に、展開力の高い旅団を4個設置
 - 18, 揚陸師団は5個に削減
 - 19, 兵員8000名程の即応旅団の設置
 - 20, 上記の旅団は8個を定数に
 - 21, ICBMの早期量産
 - 22, 原子力兵器の研究と生産
 - 23, 東南アジア諸国の政府、軍組織の早期設立
 - 24, 東南アジア諸国海軍に軽空母を1960年代に配備できるように整備
- 中津「こんなものかな、出来れば1950年代機動艦隊をジェットに完全対応させたいが、翔鶴型はジェット機対応改装できるように設計していたな、だとすると使えるのは翔鶴型8隻大鳳型10隻か、とは言え大鳳型は雲龍型程度の搭載力翔鶴型は少し減って84機程度になるか、いや、そう言えば翔鶴型は艦首方向に拡張できましたね、だとすると96機積めますか、予備機を減らせばいいか、どうせ機種は2種類に減らせるんだ、予備機もその分減らせる、後は戦艦か大和型4隻近江型16隻長門型2隻金剛型4隻、伊勢型と扶桑型は即退役、

いやタイ辺りに売り払ってもいいかもしれん、とは言え多いな26隻、長門型は記念艦にさせればいいそれに第3機動艦隊を解体すれば近江型4隻が空くか、金剛型も記念艦にするか、それなら建造予定の超戦艦込みで24隻戦中の30隻に比べれば削ったほうだろう、それに鹵獲戦艦はすべて破棄返還する、現在は鹵獲艦込みで33隻になるからな、空母も特設航空母艦は全艦退役、売却軽空母は全艦退役、もしくは航路防衛総隊送り、諸外国に軍縮していると言えるな」
こうして夜は更けていった

第21話

1942年10月12日史実より2ヶ月遅れて連合国のウオッチタワー作戦が決行された当初ガダルカナル島攻略を望んだのだが飛行場が完成し多数のトーチカと歩兵1個師団が防備を固めた島を落とすのは不可能として近隣のソロモン諸島マライタ島に上陸ここにも四季島軍の飛行場が建設されかけていたがこれは未完でありこれを制圧した。そこまではよかったが第1次ソロモン諸島海戦で四季島第8艦隊により輸送船の8割を撃沈され大被害を受けていたそれ以降島に隠れていた四季島軍の特殊部隊による夜襲や狙撃などのゲリラ戦で基地守備隊やパトロール隊の壊滅が相次いだ、海兵隊の損耗を嫌ったりバテيريا上層部は陸軍師団の派兵を決定歩兵第5師団と第9師団を送り込んだが、四季島第6艦隊の潜水艦により上陸出来たのはその2割程度の8202名であったさらに重装備(重砲や戦車重機関銃)も大半も海没していた揚陸できた装備はM4中戦車シャーマン17両75mm野砲6門M2重機関銃49挺のみであった

10月25日マライタ島上空

リバテيريا管制官『敵機の方位はいつも通りガダルカナルからまっすぐ来てる数は120機半数は戦闘機の模様、各機迎撃せよ』
リバテيريا大尉「管制め無茶を言いやがる、このP40で勝てるわけないだろうが、せめてP38ならどうにかなるのに」

リバテيرياパイロット1『見えたぞジャップの航空隊だ』

リバテيرياパイロット2『なんて速度だ、聞いてた話より速いぞ』

リバテيرياパイロット3『やるしかないぞ各機続け』

ブーン　ダダダダダダ、ダダダダダダ

リバテيريا大尉「なんだあの機体はSatana(零戦21型)なのにSatanaより速い、Satanaの新型か」

リバテيرياパイロット1『新型のSatanaか、速いぞ』

リバテيرياパイロット3『追われてる、助けてくれ』

リバテيرياパイロット2『今行く、持ちこたえてくれ』

ダダダダダダ

パンパンパンパン

リバテイリアパイロット3 『火が、火があああ』

ドカーン

リバテイリアパイロット2 「クソ、新型のSatanaなんてきいてないぞ」

リバテイリアパイロット4 『爆撃機が島の方に』

リバテイリアパイロット5 『アイツらを落とせ基地をやらせるな』
ブーン

決死の覚悟で10機程度のP40が向かうが直上から降下してきた戦闘機、新型機2式戦闘機の飛燕により1機残らず撃ち落とされた、この機体は零戦21型が高高度性能が心持たないことがあるために試作生産された機体であった、発動機に新型突風11型2450馬力を与圧可能な操縦席武装として20mm機銃4挺13・2mm機銃2挺ロケット弾8発を搭載可能なハードポイント20mm機銃に耐えられる装甲水平で750km降下時に900km出せるように設計されていた連合国はこの機体をGARGOYLESと呼び恐れた、特に迎撃機としてこの機体は優れており、アラスカ戦線に現れた機体は高度9000を飛行していたB17重爆撃機編隊60機と護衛のP38戦闘機48機が飛燕1個中隊12機により1機残らず撃墜された

リバテイリアパイロット6 「何だこいつら、新型だと言うのか」
リバテイリア大尉『管制塔、ジャップの新型だとても速いやつだ、応援を頼む』

リバテイリア管制官『なんだと、クソ、護衛空母シールドの艦載機が上がっている、たどり着くまで持ちこたえてくれ』

リバテイリア大尉『了解、各機聞こえたな、持ちこたえるぞ』

リバテイリアパイロット7 『低高度に敵の新手、Betty(98式陸攻)じゃないぞ新型だ』

リバテイリア大尉『ここはジャップの新型展示会場じゃないんだぞ』

新型の双発機は2式襲撃機であったこの機体は発動機に零戦22型と同じ晴風2型1900馬力2基を搭載し機首に20mm機銃2挺

13. 2mm機銃2挺後部旋回機銃として13. 2mm機銃連装銃架で
装備機体下部に20mmもしくは30mm斜銃2挺口ケツト弾12発も
しくは250kg爆弾2個搭載可能なハードポイント速度560km
装甲は40mm弾の直撃に耐えるようになっていた、対地攻撃の高さか
ら陸軍兵に天より舞い降りる悪魔、機体の美しさを見て死を告げる天
使付けられたコードネームはSkydevilあつたら死を覚悟し
ろと言われるほどの機体であつた

リバテイリア大尉『行かせるな、基地を殺させてはならん』

大島少佐『各機ついてきてるな、各後部機銃手敵機を近づけるなよ』
四季島パイロット1『敵機来ました後方距離1500高度1000
上方』

大島少佐『各機聞こえたな、撃ちまくれ、近づけるなよ』

ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダダダダダダ

リバテイリアパイロット8「クソ、なんて弾幕だ」

リバテイリアパイロット9『上方から近づけない』

リバテイリア大尉『下方から近づきたいが奴ら高度1000m以下を
飛んでやがる下手すりや海にドボンだ、前から行けないか』

リバテイリア海パイロット1『待たせたな陸軍のこちら護衛空母
シールド戦闘機隊、これより戦闘に参加する、各機掛かれ』

ブーン、ブーン

ダダダダダダ、ダダダダダダ

カンカンカンカン

リバテイリア海パイロット2『What、どうなってやがる、当たつ
たはずなのに、なぜやつは落ちない』

リバテイリア大尉『奴らどんな装甲を積んでやがる弾が弾かれる
ぞ』

ドン、ドン、ドン、ドン、ドン

リバテイリア大尉『いかん、全機離脱、対空砲の射程に入るぞ』

リバテイリア海パイロット3『だが、敵機は』

ブーン、ヒューウ、ドカドカドカーン

リバテイリア大尉『なんてことだ管制塔、管制塔、聞こえているか、

滑走路の状況は』

『ザーザー』

管制官『こちら管制塔、滑走路は、壊滅状態バラシユートで艦隊の近くか港の近くに降りてくれ』

リバテイリア大尉『、、、了解した、各機間こえたな、機体を捨てるぞ』

リバテイリアパイロットズ『『『『了解』』』』

リバテイリア海パイロット1『こちら海軍機、艦隊の付近に下りる機体ついてこい』

数時間後マライタ島司令部

バンデクリフト「被害はどうなっておる、飛行場が消し飛んだのは聞いたが」

幕僚1「被害ですが戦車72両、重砲18門、野砲37門が破壊され兵員ですが海兵578名陸兵724名が戦死しました」

バンデクリフト「海軍の被害は」

幕僚2「駆逐艦1隻中破輸送船3隻が撃沈されました」

バンデクリフト「手酷くやられたな飛行場再建はどのくらい掛かる」

幕僚3「なんとも言えません、何せ工作機械も大半がスクラップなので」

幕僚2「それに再建したといえど航空機が残っておりませんジャングルに隠匿した機体も尽く破壊されました残っているのは観測機2機と戦闘機3機です」

バンデクリフト「本国に、、、本国に補給を要求しろ、それと海軍の動きは多数の艦が展開しているはずだろう」

海軍連絡士官「その件ですがラバウル攻撃に向かう予定です」

バンデクリフト「そうか、勝てるのか、先のソロモン沖海戦では第8艦隊との海戦でサウスカロライナが大破、ノースカロライナが中破、サラトガとエンタープライズが戦列を離れたのだろうそれに、ラバウル航空隊の攻撃で護衛空母3隻が沈められたようだが」

海軍連絡士官「問題ありませんレキシントンIIとエセツクスに新型

戦闘機のコルセアが配備されていますあの機体ならSatanにも勝てるでしょう、制空権さえ取れば我々の勝利です」

バンデクリフト「ならいいが」

幕僚4「閣下、帰還したもののからの報告でSatanの新型があらわれたと」

バンデクリフト「間違いないのか」

幕僚4「間違いありません」

バンデクリフト「なんと言うことだ、コルセアで勝てるのか、敵は新型を出してきたぞ」

海軍連絡士官「わかりませんが、勝てるよう祈るしかないかと」

バンデクリフト「機動艦隊を援護する、魚雷艇部隊を出すように伝えてくれ」

幕僚3「よろしいのですか、あれを失えばマライタ島の哨戒網に穴が空きます」

バンデクリフト「機動艦隊が敗北すればどうせ我々は孤立するのだ、ならば攪乱のために使った方が良からう、精鋭200名を選別しろガダルカナルに上陸して決死隊による攪乱攻撃を仕掛ける」

幕僚1「ですが決死隊は帰ることは出来ませんぞ」

バンデクリフト「わかっている、わかっているよ、その事は、だがそれ以外手はない、敵の目をこちらに惹きつけるにはそれしかないのだ」

10月25日第1艦隊、第1機動艦隊がソロモン方面に秘密裏に出発、同日マライタ島より魚雷艇60艇がツラギ、ガダルカナルに停泊する艦艇を攻撃せんと出撃、それに対してガダルカナル泊地に展開していた四季島海軍は新兵器である戦闘艇を投入この艇はボ式40mm機銃1挺13.2mm連装式で6挺搭載し13.2mm弾の直撃に耐えるようになおかつ速力40ノットを出せるまさに魚雷艇キラーとして配備されていた、ガダルカナル泊地には1個戦闘艇隊48艇が展開し魚雷艇を待ち構えていた

大沼大佐「来やがれ魚雷艇共みな海の藻屑としてくれるわ」

四季島海大尉「大佐、観測員から魚雷艇出撃の報が」

大沼大佐「よろしい全艇出撃狩りの時間だ」

10月26日未明第1戦闘艇隊が出撃した魚雷艇を血祭りに上げるべく

1号戦闘艇

全長30m

全幅7m

武装

ボ式40mm機銃艇尾1挺

95式重機関銃ブリッジ両側面に連装2基ブリッジ備え付け連装1基

速力40ノット

搭乗要員25名

特殊装備機雷投下機構1型機雷48個

中津が魚雷艇対策として開発した艇、ソロモン方面やフィリピン方面にて活躍、1部は電探を搭載し対空警戒線の構築や、フィリピン方面では機雷投下装備を取り付けた機雷散布型も使われた

第22話

10月26日未明ガダルカナル島近海

リバティリア海少佐「そろそろガダルカナル泊地に着くか、全艇戦闘態勢」

リバティリア海中尉「了解」

リバティリア艇長1『左舷に敵小型艇部隊接近』

ブーン

リバティリア艇長2『敵機来襲』

リバティリア海少佐『全艇戦闘態勢、1号から36号艇はこのままガダルカナルに残りは敵小型艇を叩け』

ヒューウ、パーン

ダダダダダダ、ダンダンダンダン

ドカーン

大沼大佐「よし見事な背後照明だ水偵隊いい仕事だ。よし第1隊を右翼に向かわせろ左右後方から猛射撃してやれ」

四季島艇長1『了解、第1隊続け』

四季島艇長2『12・』『了解』』

リバティリア少佐「退路を塞ぐ気が、クソ、彼我の火力が違いすぎる」

リバティリア艇長2『被弾した魚雷を投棄して退避する』

リバティリア艇長3『機関停止、航行不能』

四季島艇長7『こちら7号艇敵1艇を撃破』

四季島旗艇艇長「司令、本隊も前進する頃かと」

大沼大佐「そうかね」

四季島旗艇艇長「本隊の他の兵は戦いたがっています」

大沼大佐「よろしい前進する、敵の最左翼を叩き潰す、本隊前進」

四季島旗艇艇長「了解しました」

ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダンダンダンダン

ドカーン

リバティリア海少佐『全艇、後退、バラバラに逃走しろ』

ボン

リバテイリア海少佐「なんだ、何が起きた」

リバテイリア旗艦艇長「司令、後部に被弾しました、この艇はもう持ちません、脱出してください」

リバテイリア海少佐「くそ、脱出だ急げ」

リバテイリア旗艦艇長「ボルトを外せ魚雷を投棄するんだ」

少佐は脱出を命じ艇長が魚雷投棄を命じた瞬間少佐や艇長は火に飲まれた、いや艇自体が火の玉に変わったのだ、理由は簡単だボ式40mm弾が魚雷に直撃爆発して弾薬燃料に引火して吹き飛んだのだ

10月26日午前10時マライタ島司令部

バンデクリフト「壊滅か、残存艇数はいくつか」

幕僚1「残存数7艇です」

幕僚2「その内すぐに戦闘可能なのは2艇、修理を行えば3日ほどで後2艇戦列に入ります」

バンデクリフト「ハルゼー提督の艦隊は無事にラバウル方面に向かっていているのかね」

海軍連絡士官「無論です、オーストリゼア海軍やブリテン海軍の陽動もあり無事にラバウル方面に向かっております」

バンデクリフト「せめてもの幸いだな、後はハルゼー機動艦隊がラバウルを焼くだけか」

その頃ハルゼー機動艦隊はソロモン諸島の北側を通りブーゲンビル島を後8時間で攻撃圏内に収める場所にいたが第1機動艦隊に発見され、第1機動艦隊と前衛の第1艦隊との大規模航空戦を行おうとしていた

編成としては

第1艦隊

司令官伊藤中将

旗艦戦艦大和

第一艦隊

第1戦隊

大和 武蔵 信濃 甲斐

第2戦隊

長門 陸奥

第1直掩戦隊

飛鷹 隼鷹

第1重巡洋艦戦隊

高雄 愛宕 摩耶 鳥海

第2重巡洋艦戦隊

妙高 那智 足柄 羽黒

第1水雷戦隊

川内

第4駆逐隊

朝霧 夕霧 天霧 狭霧

第6駆逐隊

暁 響 雷 電

第7駆逐隊

朧 曙 漣 潮

第8駆逐隊

綾波 敷波 磯波 浦波

戦艦6隻空母2隻その他25隻

第1機動艦隊

司令官小沢中将

旗艦空母大鳳

第1航空戦隊

赤城 加賀

第2航空戦隊

蒼龍 飛龍

第3航空戦隊

翔鶴 瑞鶴

第4航空戦隊

雲龍 天城

第1装甲航空戦隊

大鳳 天鳳
第1 巡航戦隊
金剛 比叡 榛名 霧島
第3 重巡洋戦隊
最上 三隈 鈴谷 熊野
第3 水雷戦隊
阿武隈
第9 駆逐隊
朝潮 大潮 満潮 荒潮
第10 駆逐隊
山雲 夏雲 朝雲 峯雲
第11 駆逐隊
霞 霰 江風 涼風
第12 駆逐隊
春雨 涼風 海風 山風
第1 防空戦隊
長良
第1 防空駆逐隊
秋月 照月 涼月 初月
第2 防空駆逐隊
新月 若月 霜月 冬月
空母10 隻戦艦4 隻その他30 隻
ハルゼー機動艦隊
司令官ハルゼー中将
本隊
旗艦空母エセックス
空母エセックス レキシントンII イントレピッド
ヨークタウン ホーネット フランクリン ワस्प
戦艦ワシントン
重巡洋艦7 隻
軽巡洋艦4 隻

駆逐艦38隻

空母7隻戦艦1隻その他49隻

前衛艦隊

司令官リー中将

旗艦戦艦サウスダコタ

戦艦サウスダコタ インディアナ マサチューセッツ

アラバマ ケンタッキー

重巡洋艦2隻

航空巡洋艦2隻

軽巡洋艦1隻

駆逐艦12隻

戦艦5隻その他15隻

それ以外にも第8艦隊27隻がオーストリゼアから出撃したR級4隻を主力としたブリテン太平洋艦隊とオーストリゼア艦隊合わせて37隻とソロモン諸島南側で交戦第2艦隊44隻がソロモン諸島に急行していた

9時10分空母エセックス艦橋

ハルゼー「敵艦隊を見つけたのだな」

幕僚1「はい、戦艦4隻空母2重巡洋艦2その他多数を引き連れた艦隊を発見しております」

報告を聞いたハルゼーは戸惑った、聞いている四季島海軍の艦隊に当てはまるものがなかったのだ、近いのは第7、第8艦隊のどちらかだが第7艦隊は未だインド洋に展開しているし、第8艦隊は、ソロモン諸島の南側、確認された場所にはいないはずであった、実際確認されたのは第1艦隊であったが史実より5m程長くなつた大和型のデカさに隣接する長門型を重巡洋艦と見間違えたのだ、しかしここでこの事を指摘できるものはいない

そして迷うハルゼーに幕僚が言う

幕僚1「提督、オザワ艦隊の前衛ではないでしょうか、我軍と同じように前衛艦隊を出していると思われませう」

ハルゼー「前衛にも空母を入れている事になるぞ、常識的にはあり

えん」

幕僚2「閣下情報部が言っている例の装甲空母ではないでしょうか、装甲空母なら爆撃に耐えれますし重巡洋艦の攻撃にも耐えれます」

その言葉にハルゼーは決断した

ハルゼー「よし、まずこの艦隊を叩き潰す、攻撃隊を出せ」

30分後第1時攻撃隊が防空用に用意したワस्प以外の空母から合計で戦闘機72機爆撃機144機雷撃機72機全機合わせて288機が出撃した、それと同時に周辺警戒としてワस्पから戦闘機36機他の空母から戦闘機12機が発進した

四季島第1艦隊旗艦大和艦橋

伊藤「そろそろかな、参謀長直掩隊を上げてくれ、予備も全てだ」

参謀長「予備もですか」

伊藤「予備もだ、そうでもしないと防ぎきれんぞ」

参謀長「了解しました全機上げさせます」

通信士「敵機確認、ガ島から発進した水偵が敵機を確認しました」
伊藤「迎撃する戦闘機隊の大半をこの編隊に向かわせろ」

10時15分飛鷹 隼鷹の2隻から零戦22型120機が上げられ48機を残して発見された航空隊に向かつていった、この零戦22型は発動機を晴風3型(離昇1750hp)に換装した機体であった
そして11時5分前に四季島戦闘機隊はリバティリア攻撃隊を捕捉した

石島少佐『いくぞ各機突撃』

ブーン、ダダダダダダ、ダダダダダダ

リバティリアパイロット1「な、う上だと」『各機ブレイク、ブレイク』

ダダダダダダ、ドカーン

リバティリアパイロット2『助けてくれ追われてる』

マックス『待ってる今行くからな』

ダダダダダダ、ダダダダダダ、パンパンパン

リバティリアパイロット2『火が、火が、少佐助けてくださいマッ

クス少佐』

ヒューウ、ドカーン

マックス「くそ、ええい s a t a nめ喰らえ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダダダダダダ

カンカンカンカン ドカーン

マックス「やっと1機か、味方の攻撃隊は、アレか、なに、アレだけしか残ってないのか200機いたはずなのにもう100機いないのか」

リバテイリアパイロット3『こちら攻撃隊指揮官機、4機の s a t a nに追われてる誰か助けてくれ、ううあー』

ダダダダダダ、ダダダダダダ

リバテイリアパイロット4「くそ敵が速すぎる、コルセア隊は何してるんだ」

期待された新鋭機コルセアはこの編隊に24機のみこの数で72機の零戦22型を攻撃機に近づけないようにするのは不可能であった

リバテイリアパイロット5『残存攻撃隊分散しろ1機でも敵空母に攻撃するんだ』

リバテイリアパイロット6『味方の戦闘機はどこに居るんだ』

味方の戦闘機は何処にいる？、これはこの海戦の趨勢を表していた、たしかにコルセアは零戦21型相手ならその降下性能をもち充分対応できるものであったが速度を21型から30km上げ降下制限速度もコルセアに一步劣る程度に強化された22型相手では劣勢に立たざるを得なかった

結局攻撃隊は31機の突破機以外は全機撃墜された

大和艦橋

伊藤「ここまで来たか、通信士上空の直掩隊に伝えろ叩き落とせと」

通信士「了解です提督」

伊藤「参謀長全艦に対空戦闘用意をさせろ」

参謀長「了解しました」

艦長「対空戦闘用意」

砲術長「主砲対空0式弾（史実3式弾）装填」

観測員「敵機数7機直掩隊を抜けた、高度4500m方位1―7―
2」

艦長「撃て」

ドーン

ヒューウ、ドカーン、ドカーン、ドカーン

観測員「敵機3機低高度に突っ込んでくる」

艦長「撃ち方はじめ、近寄らせるな」

各艦から12・7cm砲弾40mm弾25mm弾がリバテイリア機を襲った

ドンドンドンドンドンドンドン

ダダダダダダ、ダダダダダダ

川内艦橋

艦長「手強いな、よし砲術、艦橋前のあれを使うぞ」

砲術長「了解、照準よし」

ドドドドドドド

ヒューウ、ダダダダダダダ

観測員「敵機全機撃墜」

艦長「案外使えるのだな艦対空多連装噴進砲は」

砲術長「雷撃機には効果的ですね、何せ進路を変えることが少ないので」

艦対空多連装噴進砲、それは史実で28連装ロサ砲と言われた兵器であったコレの事を思い出した中津はこれを改造まず飛距離を4500mまで延長8連装に変え艦橋で操作できるように改造装填も自動化された操作は艦橋にあるジョイスティックで行われた設置は川内型や長良型、球磨型や新型の阿賀野型等の軽巡の場合は艦橋前の機銃台等の艦橋前に設置された

空母エセックス艦橋

ハルゼー「全滅だと、200機だぞ、それで戦果は」

幕僚1「確認戦果は空母1隻中破戦艦1隻小破、駆逐艦2隻中破航

空機15機程度を撃墜しております」

ハルゼー「たったそれだけか、200機の攻撃隊でそれだけか」

幕僚2「提督、リー提督からです、敵機襲来だと」

ハルゼー「何、戦闘機隊を上げる前衛艦隊を援護する」

エセックス、レキシントンII、ワスプの3隻から合わせて48機の戦闘機が出撃した

同時刻リー艦隊は第1機動艦隊の第1次攻撃を受けていた

戦艦サウスダコタ艦橋

艦長「取舵15急げ」

操舵手「ヨーソロ取舵15」

観測員「敵機更に近づく」

ドンドンドンドン、ダダダダダダ

ブーン、ヒューウ、ドカーン

リー「本隊からの直掩隊はまだ来ないのか」

幕僚3「向かってきているはずですが」

観測員「後方から友軍機」

マックス少佐「ジャツプめ、これ以上の好き勝手は許さんぞ、喰らえ」

ダダダダダダ、ダダダダダダ

パンパンパンパン、ドカーン

マックス少佐「くそこいつら何機いるんだ」

ダダダダダダ

リバテイリアパイロット7『くそ喰らった脱出する』

この時前衛艦隊を襲ったのは第1機動艦隊の1航戦と3航戦合わせて192機であったその内半数の96機が零戦22型であったそれに対してリー艦隊の直掩隊は元から展開していたワイルドキャットの水上機仕様のF4F3Sワイルドキャットファイツシュ24機ワイルドキャット12機増援のワイルドキャット24機コルセア24機の84機であった数的には変わらないものの質では四季島側の圧勝であった

観測員「敵機引いていきます」

艦長「ダメージレポート」

副長「2番及び3番砲付近に被弾、旋回不能です」

伝令1「左舷高角砲群全滅」

機関長「機関出力低下」

伝令2「艦首に浸水発生」

通信士「無線機故障」

艦長「なんとしても復旧させろ」

リー「艦長この艦はまだ戦えるかね」

艦長「いえ、不可能です」

リー「将旗をアラバマに移す通信長アラバマに伝えろ」

通信長「無線機が使いません」

リー「発光信号で構わんこの距離ならアラバマから見えるだろう」

アラバマ艦橋

艦長「ようこそアラバマに、とは言にくい状況です」

リー「状況はサウスダコタは通信設備を潰されて状況が全くわからん」

艦長「状況ですが、サウスダコタ、ケンタツキーは戦列から外さなければならぬほどの被害です特にケンタツキーは速力が19ノットまで落ちたとのことですからそれ以外にも水戦隊は全機未帰還航空巡洋艦マイアミ、シアトルが大破駆逐艦3隻が撃沈2隻が大破乃至中破マサチューセッツも小破しております」

リー「ハルゼー大将から何か指示はあるか？」

艦長「退避しろとしか」

リー「仕方あるまい、艦隊後退だがインディアナと重巡洋艦2隻それと軽巡洋艦と駆逐艦5隻は本隊に合流させる」

こうしてハルゼー機動艦隊は前衛を失った

第23話

1942年10月26日空母エセックス艦橋

ハルゼー「リーの艦隊は退避できたか」

幕僚1「はい」

ハルゼー「残りの航空機は何機ある機種ごとに報告してくれ」

幕僚2「コルセア27機ワイルドキャット137機ドーントレス7機アヴェンジャー32機全機合わせて341機です」

ハルゼー「オザワの残存機数は推定何機だ」

幕僚2「推定ですか600を割込むのは確かなので概ね580機程度かと」

ハルゼー「無念だが後退する」

通信士「緊急電、合流のために向かっているインディアナがこちらに向かっている敵攻撃隊を確認したと」

ハルゼー「やるしかないな、全戦闘機発艦対空戦闘用意」

同空母飛行甲板

マックス少佐「行ってくる、戦果を期待してくれ」

甲板要員「頼みましたよ少佐」

14時10分ハルゼー機動艦隊上空に戦闘機164機が展開した
そして14時30分攻撃隊が襲来したこの時襲いかかったのは垂
井中佐指揮下の攻撃隊336機とブインの陸攻隊48機であった

ハルゼー「OPEN FIRE」

ドンドンドン

ブーン、ダダダダダダ

パンパンパンパン

リバテイリアパイロット1「くそやられた」

岩村大尉「よし、今日3機目、これなら掛けに勝てそうだな」

マックス少佐「よし、堕ちろ」

岩村大尉「しまった」

ダダダダダダ

ブーン

岩村「腕のいいやつ、間違いないなアレはエースだ」『小隊続けアイツをやる』

四季島パイロット123 『『了解』』

マックス少佐「集団戦か、くそ」『誰かいないか、編隊戦に持ち込まれた』

ジャック少尉『少佐今行きます』

マックス『少尉かすまん』

マックス「よし、よく狙って、ここだ」

カチ ダダダダダダダ、ダダダダダダ

ブーン

マックス「避けただとなんて腕だ」

リバテイリアパイロット2『敵部隊が抜けていく、誰か追いかける』
ジュノー艦橋

艦長「空母をやらせてはならん両舷増速」

砲術長「撃ちまくれ、砲身が銃身が焼け付くまで」

前進し対空砲を撃ちまくるジュノーに多数の攻撃機が襲来した
ダダダダダダダ

ドカーン

副長「後部砲門群沈黙、左舷機銃群壊滅」

機関長「機関出力低下、なれど航行に影響なし」

艦橋要員「艦後部で火災発生、消火不能です」

伝令「艦首に浸水発生排水間に合いません」

艦長「総員退艦だ、副長サリヴァン兄弟は何人生きてる」

副長「3男と5男が生きてます、残りは生死不明です」

艦長「そうか、2人はしつかり脱出させろよ、全員戦死は避けねばならん、さあ行け」

副長「艦長も御速く」

艦長「俺は最後でいい、艦長は最後に退艦と決まっとる、急げよ」

副長「了解」

結局艦長は退艦しなかった最後の救命ボートが出る前にジュノーは真つ2つに折れ沈んだのだった

空母エセックス艦橋

ハルゼー「ジュノーが」

幕僚2「ジュノー沈みます」

ハルゼー「救命ボートの回収させろ」

観測員「クリーブランド以下駆逐艦5隻が戦列を離れます」

ジュノーに続けとばかりに軽巡クリーブランドと駆逐艦5隻が前進したのであった

観測員「クリーブランドより発光信号、我殿となる急ぎ脱出させられし」

ハルゼー「すまん、全艦最大船速、急げ」

観測員「敵機直上急降下」

ブーン、ヒューウ ドカーン

艦長「う、ダ、ダメージレポート」

艦長が痛む身体を気力で立ち上がり艦橋内を見回したそこには血を流し倒れるウィリアム・ハルゼーの姿があった

副長「閣下！閣下！」

幕僚1「軍医を呼べ」

幕僚3「担架だ担架急げ」

ハルゼー「し指揮権をフレッチャー中将に委任する」

幕僚4「閣下！閣下！」

幕僚3「直ちにレキシントンIIに発光信号、指揮系統を維持するぞ」
レキシントンII艦橋

フレッチャー「なにハルゼー提督が指揮不能だと、間違っていないのだな」

副官「はい」

フレッチャー「なんと言うことだ」

観測員「敵機更に近づく」

フレッチャー「撃ち落とせこれ以上やらせてはならん」

フレッチャーの檄も叶わず次々と被弾して沈んでいく艦艇群

幕僚5「閣下、戦闘機隊の大半が撃墜されました」

幕僚6「インディアナポリス被弾しました」

フレッチャー「どうにもならんか」
ワस्प艦橋

観測員「左舷雷跡4」

艦長「あの角度か取舵15急げ」

操舵手「取替15急げ」

観測員「回避成功」

海軍兵1「すごいな家の艦長殿は」

軍曹「何本の魚雷を回避したのやら」

観測員「て敵機直上きゅ急降下です」

副長「回避、対空砲叩き落とせ」

艦長「間に合うものか、副長ダメージコントロールの用意を」

ヒューウ、ドカーン、ドカーン

副長「艦前部と後部に被弾」

ドカーン

艦長「何事か」

中尉「先の敵弾が格納庫を貫通弾薬庫で爆発した模様、火災も発生しておりますか」

副長「なんだと」

艦長「消火可能か？」

中尉「不可能です、すでに誘爆も」

ドカーン

副長「なんと言うことだ」

艦長「総員退艦、急げ、レキシントンIIに発光信号我弾薬庫にて誘爆発生退艦する」

副長「了解」

レキシントンII艦橋

フレッチャー「なに、ワस्पがか」

幕僚5「はい、総員退艦と」

観測員「ワस्प後落していきます」

幕僚6「ワシントン被弾、駆逐艦2隻沈みます」

レーダー員「前方に艦艇多数を確認これは」

幕僚5「友軍だと」

観測員「友軍機飛来、護衛空母部隊の機です」

フレッチャー「救援か、しかしこのままでは」

この時来援したのはマライタ島防空の任に付いていた護衛空母アーマー、メイル駆逐艦7隻であった

副官「護衛空母隊からです、我囷となる、脱出されたし」

フレッチャー「仕方あるまい、艦隊最大船速、友軍の犠牲と献身を無駄にするな」

残存するハルゼー機動艦隊は脱出していった、残された護衛空母隊は1隻また1隻と航空隊の餌食となつていったこのソロモン諸島の南北と付近の陸上基地を巻き込んだ大海戦で連合国はハルゼー機動艦隊の空母ワスプ、フランクリン巡洋艦ジュノー、クリーブランド駆逐艦10隻を失い、戦艦サウスダコタ大破、ケンタッキー中破、マサチューセッツ中破ホーネットIIヨークタウンIIが双方中破巡洋艦マイアミ、シアトルが大破駆逐艦2隻が大破、護衛空母隊の全滅ブリテン、オーストリゼア艦隊のR級1隻と護衛空母2隻駆逐艦5隻を失つた、航空隊も全艦隊合わせて残存機数115機まで減っていた、またオーストリゼア各地に展開している航空機も149機が空戦で218機がラバウル航空隊と第8艦隊の攻撃で地上撃破された

対する四季島側は戦艦武蔵小破、空母飛鷹中破巡洋艦高雄中破、川内小破駆逐艦5隻が小破もしくは中破下航空隊は第1艦隊15機と第1機動艦隊59機第8艦隊17機ラバウル飛行隊19機ブイン飛行隊5機が失われた

機動艦隊敗北の報を聞いたバンデクリフトはマライタ島にオザワ機動艦隊による空襲を想定して対空警戒を厳重にして飛行場の再建と周りの木を加工したハリボテ飛行機の制作を行わせた、バンデクリフトとしては島の防衛砲塁を守るための策であった、バンデクリフトの想定としては飛行場と航空隊が展開していればそれを空襲で破壊しきるまで上陸作戦は行われず時間稼ぎを行えろと考えたのだ、事実数日後にガダルカナルから飛来した航空隊は飛行場とハリボテの飛行機を攻撃していた、バンデクリフトは早ければ明日にも来ると想定

して翌朝までにハリボテP40戦闘機20機とドーントレス7機を完成させ飛行場も1部を復旧させた、だがいつまで経っても第1機動艦隊は現れなかった、そして11月3日リバティリア領サモアに第1機動艦隊が襲来、在地リバティリア軍や在島艦艇を叩きのめしサモア泊地を完全に破壊した。

更に艦隊はニュージーランド、オーストリアに進路を向けたと同時に両国政府に対して和平交渉が行われた条件は連合国からの脱退と四季島皇国を盟主とする太平洋経済協定への参加、資源の安価での供給と基地の有償提供であった条件には戦争犯罪人に対する裁判は行わない事と現政府の解体は行わないことが明記されていた、これを受けた両国政府は悩んだりバティリアやブリテンからは受けるなど言われたが救援は未だに來なかつた、更に連合国は四季島相手に連敗街道を驀進していた先のウォッチタワー作戦ではマライタ島を奪還したかと思えば罫にハマリ数万の將兵を失いオーストリア海軍の貴重な艦艇を失ったのだからオーストリア政府は受ける和平派と受けない強硬派にわかれていた、一方のニュージーランド政府は即断で和平を受諾11月5日に連合国脱退と太平洋経済協定への加盟を果たしたこれに揺れたのはカナダであつたカナダはアラスカ失陥以降国境線に多数の軍を貼り付けながら欧州戦線に兵を向けていた、史実なら欧州戦線だけであり負担も軽かつたがアラスカ戦線の主役がカナダである以上それはとても重く財政に負担を強いていた

結局オーストリアも11月8日に和平を受諾、即日太平洋経済協定に加盟した、これに危機感を覚えたのはリバティリアであつた両国が連合国を去りサモア泊地を失つたことによりマライタ島守備隊は孤立補給不能となつた、一応潜水艦を使った輸送(四季島軍命名モグラ輸送)を行つて入るがマライタ島には2万人以上の兵士がいるために焼け石に水どころの状況ではなかつたこの潜水輸送隊は1度に8隻で120トンの物資を運べたがその内半数程度が食料となつていた基本的に人間は1日1kgの食料を消費する場合マライタ島に2万人の兵士がいると仮定して運ばれた食料は3日でなくなる事となつていたそれに四季島軍の対潜哨戒網に捕まり沈む艦も多かつ

た

そして四季島皇国はインド方面に進出カルカッタに第5軍歩兵6
個師団戦車1個師団を展開させた

第24話

1942年11月27日ニューデリーブリテン軍インド方面軍司令部

マウントバツテン「くそ、敵がすでにカンプール近郊にまで進出てきたかそれどころかコロンボが落とされチュンナイ、バンガロール、マンガロールを結ぶ線にまで北上してきているとは」

幕僚1「それどころか多数のインド国民軍が四季島軍に合流しております、膨大な量の物資も大船団を使って補給しているようで情報部からの報告では300隻程の輸送船が補給物資を運んでいると」

マウントバツテン「くそ、海軍は何をしているんだ、なぜ船団を襲わん」

幕僚2「不可能です東洋艦隊主力は先のソロモンの戦いで沈むか脱退したオーストリゼアに抑留されており、すぐに四季島に引き渡されなかっただけマシかもしれません」

マウントバツテン「潜水艦はどうしたリバティリア海軍は何処にいる」

幕僚2「潜水艦はすでに全滅しましたリバティリア艦隊も遙かサンデイエゴです」

四季島皇国軍は第5軍をカルカッタから西進させ南方から第7軍を上陸させこれを北上させながらインド国民軍との合流を果たしていたインド国民軍は総兵力48万人にも及びその補給のために航路防衛総隊から装甲巡洋艦八雲、浅間、護衛空母夜鷹、軽巡洋艦夕張、旗艦級海防艦10隻標準型海防艦40隻駆潜艇120艇が300隻の1万トン級輸送船とタンカー40隻を護衛していた

カンプール近郊ブリテン軍防陣地

ドカーン

ダダダダダダ、ダダダダダダ

ブリテン少佐「くそ忌々しい四季島航空隊め、」

ブリテン兵1「少佐、第2高射砲陣が破壊されました」

ブリテン少佐「第2高射砲陣地がだと、なんてことだ、味方の戦闘

機は何をしている」

ブリテン通信士『航空基地、航空隊の来援はどうなっている』

管制官『すでに出撃済み、しばし持ちこたえられたし』

ブリテン通信士「出撃しているようです」

ブリテン少佐「持ちこたえるしかないか」

ブーン

ブリテン中尉「少佐あれを、友軍機です」

ブリテンパイロット1『各機聞こえるか、目の前の敵機を叩き落と

せ、全機突撃』

ブーン

四季島パイロット1『敵が来たぞ第1第2中隊は敵機を残り地上

の連中を殺れ』

ダダダダダダ、ダダダダダダ、ダダダダダダ

ブリテンパイロット2「くそ速すぎず、捉えた、喰らえ」

ダダダダダダ

パンパンパン

ブリテンパイロット2「効いてないのか、くそだめだこの機体では

勝てない」

ブリテンパイロット3『助けてくれ奴に追われてる』

ブリテンパイロット2『待つてろ今行く』

ブリテンパイロット3『だめだエンジンから火が』

ドカーーン

当時のインド駐留ブリテン軍の戦闘機は主力は旧式のハリケーンmkIIや複葉のグラディエーターであった、この機体で陸軍の隼2型（海軍の零戦22型の折り畳み翼機構を排除した機体）や飛燕に勝てというのも不可能な話であった

ブリテン帝国帝都ロンドン首相官邸

チャーチル「インドの戦況は悪いのだな」

秘書「そのようです、それにアフリカ戦線もエル・アラメインが陥

落寸前と」

チャーチル「モントゴメリー將軍はなんと行ってきている」

秘書「補給を求めてきています」

チャーチル「補給か、とはいえ、セウタが落ち、ジブラルタルすら危ない現状で補給か、護衛無しで喜望峰ルートでどうにかならんか」
海軍参謀「閣下四季島海軍の潜水艦隊がマダガスカルに展開してお
ります、護衛艦無しでは船団は餌にしかありません」

チャーチル「しかし、なら潜水艦を使った輸送はどうだ、砲や戦車は無理でも重機関銃や食料弾薬医薬品なら運べるだろう」

海軍参謀「ですが、そこまでの潜水艦は残っておりません」

チャーチル「そうか、駆逐艦を使った輸送は可能かねリバティリアがソロモン方面でやってたやつだ」

海軍参謀「船団護衛の護衛艦艇が不足する可能性があります、まあ戦艦や重巡洋艦には駆逐艦では敵いませんが」

チャーチル「少数の高速艦艇を使ってアフリカ戦線に物資を輸送してくれ」

陸軍参謀「閣下、アフリカ戦線にいる陸軍を維持するには日に食料50トンと200000Lそれに多数の武器弾薬医薬品が必要です、それだけの物資をどうやって運ぶのですか、海軍の事情は知りませんが駆逐艦1隻にどれだけの食料と水を運べるのですか」

海軍参謀「ドラム缶1個あたり約100kgで1隻でおおよそ200個おおよそ1隻で20トンとなります」

陸軍参謀「それで何日に1度補給をしてくださるのですか、それと1度に何隻来ていただけるのですか」

海軍参謀「10隻が精一杯ですそれ以上は船団護衛に穴が空きます、代わりにですがコルベットやフリゲート艦でも行わせますなので1度に20隻は確約しましょう」

陸軍参謀「何日に1度回してもらえますか、いくら1度の量を増やしても兵の腹を満たす前に餓死させれないのです」

海軍参謀「確約は出来ませんが週に1回が限界です」

陸軍参謀「その補給量ではエル・アラ要塞は維持できない」

何時しか双方の意見交換は怒号と嫌味の言い合いに変わっていった、それを見かねたチャーチルは提案した

チャーチル「中東から1部運んではどうかね、まだ鉄道とトラックを使った陸路なら量は少ないが確実に届くと思うが」

陸軍参謀「たしかにそうですが、海路と違って量と時間が問題になります」

チャーチル「1度にどのくらい運べるかね」

陸軍参謀「確認しなければわかりません」

会議は1度休会となり3日後に資料を集め再度行われた

チャーチル「でだ鉄道輸送とトラック輸送でどれだけ運べるかね」
運輸専門家「1編成辺り200トンが限界となります、トラックの場合1両辺り3トン1つのトラック部隊はトラック45両軍用自動車15両合わせて135トンとなります」

陸軍参謀「閣下、アフリカ戦線の縮小をこのままでは持ちません」

チャーチル「仕方あるまい、スエズ運河まで後退を許可する」

バタン

秘書「閣下」

チャーチル「どうした、そんなに急いで」

秘書「緊急事態ですソビエトからの通達でイルクーツクが四季島軍に攻略されました」

チャーチル「なんだとそんな所まで攻め込まれているのか」

秘書「はい」

バタン

陸軍士官「閣下、カナダから急報」

チャーチル「今度はなんだ」

陸軍士官「アラスカ奪還軍が集結地点の基地ごと消滅しました」

チャーチル「ま、間違いないのか」

陸軍士官「はい、展開していた飛行隊ごと消滅したと」

チャーチル「何があつたと言うのだ、調査を急げ、それとカナダにさらなる軍の展開を要請しろ」

この事態は連合各国を恐怖に陥れた周辺では高温を観測し、駐屯地は跡形もなく消えていた死者の数は

チャーチル「推定20万人以上だと」

陸軍士官「はい、最低でもその数は戦死したかと」

チャーチル「アラスカ戦線は崩壊したと言えるのかこれは」

陸軍士官「早期奪還は不可能になりました」

12月4日アラスカ戦線連合軍駐屯基地跡地

リバティリア調査隊指揮官「生存者無しか、それに大半の死体は炭化しているししていない死体は圧死か窒息死、どうなってやがる」

リバティリア調査員1「なんだこれ、装甲が溶けてやがる」

リバティリア研究員「装甲が溶けてる、融解したのか、だとすると瞬間的に温度は1500度位になったのか」

リバティリア調査員2「おい、こつちに来てくれ、この残骸の下も見たい」

リバティリア陸軍兵1「今行きます」

リバティリア陸軍兵2「そつち持っていくぞせーの」

リバティリア調査員2「防空壕の入口かここは」

リバティリア調査隊指揮官「よし行くぞ」

リバティリア調査員1「行くんですか」

リバティリア調査隊指揮官「防空壕の中の状態で敵の正体がわかるやもしれん、避難してる兵の遺体があれば空襲によるものだと断定できるからな」

防空壕の中は地獄絵図であった、炭化した遺体や黒く焼け焦げた壁や備品が調査隊を迎えたのであった

リバティリア調査員3「何があったんだ、黒焦げじゃないか全て」

リバティリア調査員2「指揮官焼け具合は奥よりも出入り口付近の方が酷いみたいです」

リバティリア調査隊指揮官「よし戻るぞ」

12月15日ワシントンDCホワイトハウス

ルーズベルト「で、なにが起きたのだ」

調査隊指揮官「それが高温でそれも1500度以上の温度で焼き払われたとしか説明できません、それも防空壕の奥まで焼くほどの大きさの」

ルーズベルト「ジャップの攻撃であるのは間違いないのか」

調査隊指揮官「そこも判断できません」

ルーズベルト「報告ご苦労、後で詳しい報告書を上げてくれ」

調査隊指揮官「はい、失礼します」

ルーズベルト「オツペンハイマー博士、これは例の兵器が使われたのかね」

オツペンハイマー「放射能は観測できておりませんのでそれはありえないかと」

ルーズベルト「では何だというのだ、ジャップの新兵器は何を使つたのだ」

オツペンハイマー「鋭意調査しております」

何が起きたのか、それは中津が開発させた特殊燃料気化爆弾による攻撃であつた、爆発物として水素ガスを圧縮して大量に詰め込んだもので威力としては広島型原爆の数倍の威力を持つていたので中津はこれを増産しリバテiria全土に仮称3式弾道弾に載せてばらまく気であつた、核のように放射線の心配もなければ製造も保管も容易である為に中津としては使用にためらいはなかつた

第25話

1942年12月27日伏見宮は統合作戦室長に就任した

1943年1月7日四季島皇国皇都東京統合作戦室

伏見宮「さてアラスカ戦線は例の攻撃以来とても低調のようだ、リバティリア機動艦隊も動きが鈍くなっている、どう動くかね」

山本「はい、聯合艦隊としては残っているリバティリア機動艦隊の撃滅を行いたいと」

東條「陸軍としては春を待つてクラスノヤルスクまで戦線を進める予定です」

伏見宮「うむ、インド戦線はどうかね昨日デリーに入城したと聞いたが」

東條「はい、ブリテン軍の大半は包囲殲滅済み残りは中東方面に脱出しております」

伏見宮「残りはインド国民軍に任せても問題ないかね」

東條「はい、第5軍はこのままインド国民軍と共同して中東方面からの反攻作戦に備えさせます、第7軍はアフリカ戦線に送る予定です」

伏見宮「アフリカにかね、補給はどうするのだね」

山本「第4第7艦隊をインド洋からアフリカ方面に貼り付けます、それに新設した第3機動艦隊を向かわせます」

土方「それと船団護衛は任せていただきたい装甲巡洋艦浅間、常磐、吾妻、春日軽巡洋艦鬼怒、護衛空母小鷹、春鷹松型駆逐艦32隻旗艦級海防艦10隻標準型海防艦40隻これを持って航路を維持します」

伏見宮「そろそろ戦線を1つ減らしたいものだね」

コンコン

辻「失礼します、緊急電です」

東條「何事か」

辻「ソビエトが降伏したと」

伏見宮「ソビエト戦線は解体だな、」

1943年1月5日にソビエトで政変が発生講話の決意を決めた

スターリンは反対する幹部を肅清するとそのままドイツ第3帝国に講話を打診その結果ソビエト社会主義共和国連邦は領土をウラル山脈以西からウクライナ東端までとされたこの結果ドイツはブリテン島上陸を決意ジブラルタル攻略した事もありイタロス艦隊やヴィシーガレア地中海艦隊の支援を受けて攻略準備を開始すると同時にアフリカ制圧を厳命すると同時に四季島軍の到着を待った

1月12日四季島皇国都東京

伏見宮「でドイツはアフリカ攻略した後共にブリテンをと」

ドイツ連絡士官「はい総統閣下はそう伝えるようにと」

伏見宮「そうか、回答は少しお待ちいただけませんか、参加するにしても艦隊を見繕わねばならぬのでね」

ドイツ連絡士官「はい、お決まりになりましたら、御連絡を」

伏見宮「ああ、良い返事ができるようにしておこう」

同日夜中津邸

中津「なるほど、第3機動艦隊と第8艦隊を回しましょう、第7艦隊をインドからラバウル方面に回しましょう、ラバウルに展開している第2艦隊はマーシャルでどうでしょう」

伏見宮「うむ、ラバウル方面が手薄にならんかそれでは」

中津「リバティリアの反攻作戦は今後ハワイを拠点にするしかありません、その場合近い我が方の拠点はウエークとアラスカ、アラスカはありえませんがアラスカ方面は航空要塞とでも言える数の航空機が展開していますし、天候が変わりやすく艦載機の運用は容易ならざる地です。それにアラスカ奪還をしたとしてもその先には極寒のアリユーション、そして進軍容易ならざる北海道、特に日高山脈を超えるのは至難の業、その前に各所の湿地帯で戦車は足を取られ航空隊に撃破されるのみ、そして北海道のインフラは場所によつてはチハ車ですら危ういハ号の対戦車自走砲で精一杯、重く鈍重なりバティリア戦車ではすぐに埋まってトーチカの如くなるでしょう」

伏見宮「ではウエークからマーシャル、トラックか」

中津「はい、ウエークにも航空隊は居ますが戦闘機24機に水上機24機、これでは機動艦隊どころか空母1隻に叩き潰されます、よつ

てウエークは放棄、木製のハリボテ飛行機と案山子の兵士を並べればいいでしょう」

伏見宮「それはいいな、決戦はマーシャル沖でいいかね」

中津「はい、第2艦隊で敵を食い止めつつ、第1第4艦隊を前衛として第1第2機動艦隊を守りつつ纏めて叩き潰します」

伏見宮「そうか、そろそろこの戦争を終わらせるときやもしれぬな」

中津「はい、それとリバティリアの原爆計画もどうにかせねばなりません、場所はわかっております、例の気化弾の使用許可を」

伏見宮「よかろう、許可はどうにかする、早急に原爆基地を破壊しろ」

中津「はい」

そして軍は動き出した1月18日第8艦隊がアフリカ方面に進出、同時に第3機動艦隊もブリテン軍の防御陣地に苦戦するドイツアフリカ軍団に航空支援実施そしてジプチに第7軍が上陸制圧したそして1月31日ブリテンアフリカ方面軍降伏第7軍と第8艦隊第3機動艦隊はそのまま欧州方面軍としてブリテン攻略を目指した

2月7日リバティリア合衆国ワシントンDCホワイトハウス

ルーズベルト「で海軍は何時攻めるのかね、半年ほど前も同じ話をしたような気がするが、早急にマリアナを落として飛行場を整備し四季島全土を焦土にするのだ」

キング「はい大統領、来週にもウッドチップ作戦を行います目標はウエークそしてマーシャルです」

ルーズベルト「戦力はどれだけ出す」

キング「スプルーアンス大将を司令官にエセックス級8隻インディペンデント級6隻アイオワ級4隻重巡洋艦7隻軽巡洋艦9隻駆逐艦37隻を投入します。それに艦隊の前衛としてデヨ中将指揮下のサウスダコタ級6隻ノースカロライナ級2隻インディペンデンス級2隻重巡洋艦3隻軽巡洋艦3隻駆逐艦19隻を展開させます」

ルーズベルト「敵はどの程度だ」

キング「敵はオザワとヤマグチの機動艦隊空母は大小合わせ20隻かと、それとイトウの戦艦隊とナグモの戦艦隊合わせて10隻です、

両戦艦隊には空母が2隻つづきますので敵空母は24隻となりますが新型のF6Fの敵ではありません」

ルーズベルト「ウエークの航空隊はどの程度だ」

キング「50機もいません、すぐに殲滅できます」

ルーズベルト「マーシャルはどの程度だ」

キング「概ね水上機で80機程度です、障害にはなりません」

ルーズベルト「いいだろう、だが5月にはマリアナを抑えろいいな」

キング「はい」

2月15日復旧させたオアフ島パール・ハーバーよりスプルーアンス機動艦隊空母16隻戦艦12隻重巡洋艦10隻軽巡洋艦12隻駆逐艦56隻が対潜警護の護衛空母4隻軽巡洋艦1隻駆逐艦12隻フリゲート艦18隻の護衛を受けながら出撃翌16日この艦隊をハワイ方面偵察中の伊27号潜水艦が確認、艦長は悩みながらも魚雷6本を発射魚雷は護衛空母ボーク、ランスを撃沈戦艦ノースカロライナを中破させた、艦隊各艦は爆雷やヘッジホッグを乱れ撃つが伊27潜巧みな操艦で全て躲し安全圏に離脱すると同時に艦隊司令部に敵機動艦隊確認と雷撃戦果を報告した

報告を受けた統合戦室長の伏見宮はウエーク放棄とマーシャル決戦を通達臨時に第1装甲航空戦隊の2隻を第1艦隊に編入し改大鳳型の大鶴、天鶴を第1機動艦隊に編入し飛鷹、隼鷹を第2機動艦隊に編入しトラックからマーシャルに向けて出撃した

第1艦隊

司令官伊藤中将

旗艦戦艦大和

第1戦隊

大和 武蔵 信濃 甲斐

第2戦隊

長門 陸奥

第1装甲航空戦隊

大鳳 天鳳

第1重巡洋艦戦隊
高雄 愛宕 摩耶 鳥海
第2重巡洋艦戦隊
妙高 那智 足柄 羽黒
第1水雷戦隊
川内
第4駆逐隊
朝霧 夕霧 天霧 狭霧
第6駆逐隊
暁 響 雷 電
第7駆逐隊
隴 曙 漣 潮
第8駆逐隊
綾波 敷波 磯波 浦波
戦艦6隻空母2隻その他25隻
第2艦隊
司令官木村中将
旗艦重巡洋艦伊吹
第4重巡洋艦戦隊
伊吹 畝傍 高千穂 海門
第5重巡洋艦戦隊
穂高 石鎚 瑞牆 磐梯
第2直掩戦隊
鳳翔 龍驤
第2水雷戦隊
阿賀野
第1駆逐隊
陽炎 不知火 黒潮 親潮
第2駆逐隊
初潮 夏潮 初風 雪風
第3駆逐隊

天津風 時津風 浦風 磯風

第4 駆逐隊

浜風 谷風 野分 嵐

第4 水雷戦隊

能代

第1 3 駆逐隊

夕雲 卷雲 風雲 長波

第1 4 駆逐隊

卷波 高波 大波 清波

第1 5 駆逐隊

玉波 涼波 藤波 早波

第1 6 駆逐隊

早波 沖波 岸波 朝霜

重巡洋艦8 隻空母2 隻その他3 4 隻

第4 艦隊

司令官南雲中将

旗艦戦艦扶桑

第3 戦艦戦隊

扶桑 山城 伊勢 日向

第7 重巡洋艦戦隊

青葉 衣笠 古鷹 加古

第4 直掩戦隊

祥鳳 瑞鳳

第5 水雷戦隊

神通

第1 7 駆逐隊

吹雪 白雪 初雪 深雪

第1 8 駆逐隊

叢雲 東雲 薄雲 白雲

第1 9 駆逐隊

睦月 如月 弥生 卯月

第20 駆逐隊

皐月 水無月 文月 長月

戦艦4隻空母2隻その他21隻

第1 機動艦隊

司令官小沢中将

旗艦空母大鶴

第1 航空戦隊

赤城 加賀

第2 航空戦隊

蒼龍 飛龍

第3 航空戦隊

翔鶴 瑞鶴

第4 航空戦隊

雲龍 天城

第2 装甲航空戦隊

大鶴 天鶴

第1 巡航戦隊

金剛 比叡 榛名 霧島

第3 重巡洋戦隊

最上 三隈 鈴谷 熊野

第3 水雷戦隊

阿武隈

第9 駆逐隊

朝潮 大潮 満潮 荒潮

第10 駆逐隊

山雲 夏雲 朝雲 峯雲

第11 駆逐隊

霞 霰 江風 涼風

第12 駆逐隊

春雨 涼風 海風 山風

第1 防空戦隊

長良

第1防空駆逐隊

秋月 照月 涼月 初月

第2防空駆逐隊

新月 若月 霜月 冬月

空母10隻戦艦4隻その他30隻

第2機動艦隊

司令官山口中将

旗艦空母紅鶴

第5航空戦隊

紅鶴 蒼鶴

第6航空戦隊

葛城 笠置

第7航空戦隊

黒鶴 白鶴

第8航空戦隊

阿蘇 生駒

第1直掩戦隊

飛鷹 隼鷹

第2巡航戦隊

近江 越後 越前 豊後

第9重巡洋戦隊

利尻 斜里 月山 蔵王

第6水雷戦隊

矢矧

第21駆逐隊

白露 時雨 村雨 夕立

第22駆逐隊

初春 子日 若葉 初霜

第23駆逐隊

有明 夕暮 松竹

第24駆逐隊

梅 桑 桃 桐

空母10隻戦艦4隻その他21隻

第26話

1943年2月18日ウエーク島沖

スプルーアンス機動艦隊旗艦戦艦アイオワ艦橋

スプルーアンス「時間だ参謀長攻撃隊発艦始め」

ムーア「はい、第1次攻撃隊全機発艦」

空母イントレピッド艦橋

通信士「旗艦より入電、攻撃隊発艦せよ」

艦長「攻撃隊発艦始め、急げよ」

同空母飛行甲板

甲板要員「カタパルトよし、少佐ご武運を」

マクレマスキー「任せとけ、ジャップの死体の山を築いてやるからな」

ブーン

第1次攻撃隊として空母イントレピッド、エセックス、バンカーヒル、ランドルフの4隻から戦闘機72機爆撃機72機攻撃機72機が発艦編隊を組むと1路ウエーク島に向かった

リバティリアパイロット1『見えたウエークだ、敵機はいないぞ各機突撃』

ヒューウ、ドカーン

リバティリアパイロット2「ジャップの戦闘機はどこにいるんだ」

マクレマスキー「おかしい、ここまで抵抗が無いのはありえん、まさか、」

リバティリアパイロット3『西からなにか飛んできてる、恐ろしく速い』

マクレマスキー「なに、しまった罫か」『全機散開しろ』

ヒューウ、ドカーン

その瞬間強烈な閃光とともに熱風と暴風が吹き荒れた

マクレマスキー「くそ」『ジョージ、アレックス、ベニー生きてるか』
ジョージ『生きてます少佐』

アレックス『エンジンから煙吐いてますがなんとか』

マクレマスキー『ベニー生きてるか、返事をしろ』

ベニー『生きてます、でも機体が、舵がうまく、言う事を聞かなくて下さいこのままウエークに不時着して救助を待ちます、他にも何機か降りてみたいなんです』

マクレマスキー『わかった、先にイントレピッドで待つてるぞ、帰ってこいよ』

ベニー『はい少佐』

リバティリア指揮官機『各損傷機はそのままウエークに不時着して救助を待て、燃料の少ない機は艦隊に帰還、充分な機はこのまま上空哨戒を行え』

戦艦アイオワ艦橋

スプルーアンス「被害はどうなっている、何処からの攻撃か」

ムーア「不明です、反応は突如現れたとしか」

通信士「マクレマスキー少佐からです、ウエークに敵おらず、先の攻撃での損傷機はウエークに降りるとのことです」

スプルーアンス「前衛艦隊をウエークに急がせろ要員を救助させる」

通信士「はい」

前衛艦隊旗艦戦艦サウスダコタ艦橋

デヨ「急げ、負傷者を救助するのだ」

レーダー員「飛翔体接近」

艦長「なに！」

デヨ「全砲撃ちまくれ、近寄らせるな」
ドンドン

ダンドンダンドン

ヒューウ、ドカーーーーン

デヨ「ぐ、ぐわ」

艦長「ううあ」

戦艦ノースカロライナ艦橋

デューポス「サウスダコタはなんと行ってきている」

通信士「サウスダコタ通信途絶」

艦長「なんだと、間違いないのか」

通信士「はい」

デューポス「仕方あるまい、デヨ司令の安否がわからぬ以上前衛艦隊は私が指揮をとる前衛艦隊全艦に知らせ、それとスプルーアンス閣下にもこの事を」

通信士「はい」

デューポス「艦隊の被害はどうなっている」

「戦艦ノースダコタ通信途絶」

「軽空母プリストンより入電飛行甲板上の艦載機が全機吹き飛ばされた」

「重巡洋艦ポートルランド火災発生」

「複数の駆逐艦で火災発生」

デューポス「くそ、何というザマだ損傷の少ない艦は他艦の消化に回せ、無事な駆逐艦何隻かをウエークに向かわせろ」

通信士「了解、全艦に通達します」

艦長「少将通信途絶している艦もあります、発光信号や信号旗を使われてはいかがでしょう」

デューポス「そうしてくれ艦長、とにかく艦隊を纏めねば」

機動艦隊旗艦戦艦アイオワ艦橋

スプルーアンス「なに、前衛艦隊が先と同じ攻撃を受けデヨが行方知れずだと」

幕僚1「はい、現在指揮はデューポス少将が取っております」

スプルーアンス「周辺警戒を厳重にしろ、もし本隊が先の攻撃を受けければ壊滅するぞ」

「「は、」」

数時間後スプルーアンスの下に被害報告が届いた被害は戦艦サウスダコタ中破、ノースダコタ中破、軽空母プリストン中破、艦長以下艦橋要員全滅重巡洋艦ポートルランド小破駆逐艦7隻中破航空機215機喪失と言ったところであった、それに加え前衛艦隊司令官のデヨ中将が重症司令部も潰滅状態になっていた

スプルーアンス「どうする、マーシャルに向かうか否か」

参謀「引くべきです、艦載機の損耗が激しい次の攻撃が本隊に飛んでくれば潰滅します」

ムーア「だが1戦もせずに引くことは」

通信士「閣下、潜水艦がマーシャルから出撃する敵艦隊を捉えた」と

スプルーアンス「規模は」

通信士「巡洋艦7隻空母2隻駆逐艦多数」

スプルーアンス「前衛艦隊か、時期に主力も見えるだろうな、やるしかない、やらねば臆病者と誹られる、ハワイよりの補給を受け然る後全艦前進ジャップの主力を叩き潰す」

「「は、」」

スプルーアンス「ハワイのニミッツ提督に通信、航空隊の補給を求むと」

通信士「了解」

ハワイオアフ島太平洋艦隊司令部

ニミッツ「スプルーアンスはなんとやってきている」

幕僚2「敵の未知の攻撃で前衛艦隊司令部が潰滅、航空隊も200機程を喪失するも、マーシャルからジャップ艦隊が出撃した為補給を受けてこの艦隊を撃滅したいと」

ニミッツ「補給か、護衛空母に航空機を載せて送れ、足りねば訓練中の空母ワस्पIIとハンコックを使えといいな」

幕僚2「はい」

スプルーアンス機動艦隊は2月23日に補給を受けると翌24日にマーシャル諸島に向けて進出25日にマーシャル諸島から200海里の地点に到達そこで四季島海軍第2艦隊を発見、当初スプルーアンスはこれを前衛と考えたがその後の報告でその艦隊の後方に戦艦主体の艦隊が2つあることを知り困惑した後で旧来の四季島海軍に当て嵌めこれを夜戦前衛の第2艦隊戦艦隊を第1第4艦隊と推察しその後方に機動艦隊があると想定した。実際スプルーアンスの推察通りの陣形を四季島海軍は組んでいるわけだがスプルーアンスからすれば叩きたい機動艦隊は遥か彼方ということになるスプルーアンスは機動艦隊の位置を400海里と予想この距離は額面以上の距離

に思われた、攻撃隊を送り出したとしてまずドーントレスは航続距離が足りずに送り出せないそれにより機体数は減る道中で3個艦隊からの迎撃を受けそれを超えたあとは2個機動艦隊からの迎撃を受けるわけであり到達できる機体は直掩機を除いた400機を出したとしても30機を切ると想定された。

スプルーアンス(第2艦隊まで180マイル、第1、第4艦隊まで280マイル、機動艦隊まで推定400マイル、どうするべきか)

考えに考えた末に第2艦隊をその後第1艦隊を叩き潰す事にした

マーシャル沖第2艦隊旗艦重巡洋艦伊吹艦橋

木村「そろそろか、参謀長、直掩隊発艦、マーシャルからの援護機はまだか」

参謀長「はい後10分で到着します」

時計を見ながら木村が呟く

木村「そうか、そろそろ飯かな」

参謀長「そうですね、腹も虫が鳴いてきましたよ」

その時艦橋に何人かが入ってきた

給量員「昼飯です」

艦橋要員「待ってました」

艦長「おいおい、提督がお先だぞ」

艦橋要員「おっと、それは失礼」

木村「握り飯と沢庵、それにゆで卵か」

給量員「はい、腕によりをかけてご用意しました」

木村が握り飯掴み食べると

木村「うむ美味しい、さあ諸君も食べよう」

艦橋要員「ではお1つ、美味しい」

艦長「塩が効いていいな」

同時刻第2艦隊後方マーシャル島第26戦闘飛行隊指揮官機

大島少佐『各機、付いてきているな、もうすぐ作戦区域だ気張ってけよ』

『『了解』』

大島少佐（全く、各小隊の4番機は雛鳥か以前より腕は上がっているか、生きて帰れよ、それに新兵器の噴進弾か、相手より500上方から一斉射しろ、か、役に立つかは知らんがやるしかねえな）

『こちら第2直掩戦隊旗艦空母龍驤管制接近してきている友軍機、現時刻を持って我が管制下に入る』

大島少佐『こちら第26戦闘飛行隊了解したこれより貴官の管制下に入る』

管制『第26戦闘飛行隊各機燃料の補充のために両艦に着艦されたし』

大島少佐『了解、第3、第4中隊から着艦せよ』
『了解』

大島少佐「雛鳥ども失敗しないだろうな」

伊吹艦橋

通信士「潜水艦伊41より緊急電、敵大編隊接近」

木村「距離は？」

通信士「本艦隊から140海里の距離です」

木村「戦闘機隊発艦、第26戦闘飛行隊も補給完了後全機発艦他の艦隊にも伝えろ、それと、艦隊180度反転敵艦隊を引き込むぞ」

「はっ」

木村（にしても鳳翔か随分と大きくなったな、中津商会の技術力恐るべき）

この時空母鳳翔は全長15m延長し戦闘機36機を積めるように改造されていた

木村（にしても来るか、スプルーアンス来てみるここが貴様の墓場だ）

参謀長「戦闘機隊全機発艦しました」

木村「そうか、全機合わせて132機だったな」

参謀長「はい第26戦闘飛行隊は敵の上方から新兵器を使うとの事です」

木村「そうか」

ブーン

第27話

1943年2月第2艦隊前方空域

ドーストマン中佐『もうすぐジャップの艦隊が見える、気張れよ』
『了解』

ドーストマン中佐(にしても600機近い大部隊か敵は重巡洋艦主体らしいが弾があまりそうだな、なにか光ったか?、アレは)『全機散開、上から敵だ』

ヒューーウ、ドカーン

リバテイリアパイロット1『ううわあー』

リバテイリアパイロット2『損傷した助けてくれ』

リバテイリアパイロット3『敵は何処だ』

ドーストマン中佐『落ち着け全機小集団で固まれ』(何機、いや何1機食われたいもので、ウエークで飛んできたアレの艦載型か厄介な)

ポーン中尉『上方より敵機』

ブーン ダダダダダダ、ダダダダダダ

リバテイリアパイロット4『追われてる助けてくれ』

永倉大尉「落ちろカトンボ」

ダダダダダダ

ドカーン

永倉大尉「1丁上がりつてな、」(にしても艦載型気化弾とは恐れ入るぜ、流石中津の旦那やる事がえげつねえな、リバテイリアの連中下手したら小集団の攻撃隊以外出せなくなりそうだな、さっきのでも50機は最低でも喰えた、その後の1発含めりゃ100機は喰えた(うな)

ヒューーウ、ドカーン

ドーストマン中佐「ええい、やってくれわ、喰らえ」

ダダダダダダ

四季島パイロット1「被弾した、機体がくそ脱出」

ドカーン

ドーストマン中佐「これでやつと1機か、どれだけ喰われたというのだ」『雷撃隊指揮官機応答しろ、バーレス少佐、聴こえていないのか』
ダビット大尉『ドーストマン中佐、次席指揮官のダビット大尉であります、バーレス少佐は先程撃墜されました』

ドーストマン中佐『なんだと、わかった、ダビット大尉何機生き残っている？指揮下にある機数でもかまわん、報告しろ』

ダビット大尉『指揮下にいるのは94機であります』

ドーストマン中佐『なに、200機近い数がか、急降下爆撃隊指揮官機応答しろゼーレス少佐、次席指揮官のパート大尉、どちらでもいい応答しろ』

ゼーレス少佐『ドーストマン中佐こちらゼーレスだ残存機は52機だ』

ドーストマン中佐「何ということだ150機近いはずなのに」

『ジャップの戦闘機が引いていきます』

ドーストマン中佐『各飛行隊ごと残存機数を報告しろ』

15分もすればある程度の損害がわかってきた

ドーストマン中佐（600機が180機程度まで減らされたか、だが敵艦隊も近い、ここは）『全機攻撃隊指揮官のドーストマンだ全機このまま敵艦隊に突撃敵艦隊を撃滅する各機、突撃』

ブーン、ブーン

リバティリア攻撃隊はそのまま第2艦隊に向け突撃を敢行した、対する第2艦隊旗艦伊吹の電探でこれを捉えると直掩隊48機を急行させ対空戦闘の用意を始めた

ドーストマン中佐『敵機か、戦闘機隊全機俺について来い1機でもいい攻撃隊を敵艦隊に向かわせろ』

『『Sir yes sir』』

ブーン

市島大尉『敵さんやる気だぞ3個中隊で敵戦をやる1個中隊は敵の攻撃隊に掛かれ、行くぞ』

ブーン

ドカーン

四季島パイロット1「落ちろ」
ダダダダダダ
リバティリアパイロット5「やらせるか」

第2艦隊旗艦重巡洋艦伊吹艦橋

木村「抜けてきたか、主砲弾種3式2号弾装填」

砲術長「了解、主砲1から5番弾種3式2号弾装填よろし」

木村「他の艦はどうか」

通信士「他の艦も装填よしと」

木村「統制射撃、撃て」

砲術長「撃て」

ドンドンドンドンドン

ヒューーウ、ドカーン

ゼーレス少佐「またあれか、雷撃隊が」『彼らの犠牲を無駄にするな

全機突撃』

伊吹艦橋

観測員「雷撃機の大半を撃墜」

艦橋要員「敵急降下近づく」

艦長「高角砲、機銃撃ちまくれ」

ドンドンドンドン

ダンドンドンダン

ダダダダダダ、ダダダダダダ

観測員「敵機直上急降下」

ヒューーウ、ドカーン

艦長「被害報告」

副長「左舷第2高角砲大破」

木村「敵もやるものだな」

参謀長「はい、ですがすでに大勢は決したかと」

木村「だろうな、後は小沢さんと山口さんが決めてくれるだろう」

参謀長「では本艦隊はこのまま」

木村「だが皇国最大の水雷戦隊を対空戦闘だけは惜しいね、仕掛け

るか、参謀長敵前衛の位置は」

参謀長「艦隊から120海里程度かと」

木村「第1、第4艦隊共同して叩きたいね、夜戦で」

参謀長「そうですね」

木村「艦隊前進、目標敵前衛艦隊」

「了解」

第2艦隊後方第1艦隊旗艦大和艦橋

伊藤「敵艦隊との艦隊決戦か」

参謀長「確かにこの大和で砲撃戦はしたいですが」

伊藤「やろう、艦隊前進、小沢、南雲、山口提督にもこの事を伝えろ」

通信士「はい」

第1艦隊左翼第4艦隊旗艦伊勢艦橋

南雲「全く、伊藤さんと木村さんは無茶を言うな、とはいえ艦隊戦したいものだ」

参謀長「砲術屋の夢ですな」

南雲「そうだな、艦隊前進」

14時25分第2艦隊を前衛とし第1第4艦隊が前進、それに合わせて第1第2機動艦隊も前進しつつ攻撃隊空母20隻から1440機を発艦させた、対するスプルーアンス機動艦隊は後方から来ている護衛空母艦隊から戦闘機隊を補充しつつ前進してくるであろう敵砲戦艦隊と艦隊決戦の後後退する為に本隊からアイオワ級戦艦4隻、重巡洋艦5隻軽巡洋艦2隻駆逐艦12隻をデューポス麾下の前衛艦隊に回した

16時7分スプルーアンス機動艦隊本隊に攻撃隊が来襲、機動艦隊は戦闘機F6F360機を迎撃に差し向けた

モース少佐『全機に告ぐもうすぐ敵が見えはずだ何としても突破させるな、いいな』

『了解』

リバティリアパイロット6『前方200下方に敵集団発見』

モース少佐『よし、全機突撃1機たりと通すな』

樽沢中佐『敵の歓迎委員会のおもてなしだ、戦闘機隊返礼の花束を
投げつけてやれ』

太田大尉『行くぞ中隊ついて来い』

『『了解』』

ダダダダダダダ

「落ちろリバ公」

「死ねジャップ」

『助けてくれsatanに追われてる』

『今行く待ってろ』

『だめだ火が、火があ』

ドカーン

モース少佐「だめか、」

『少佐、ジャップの攻撃隊が防衛網を』

モース少佐「くそ」『行かせるな、1機でもいい叩き落とせ』

ブーン

ダダダダダダ

永島少尉「くそ、機体に火が、くそリバ公め、脱出するぞ、いいな

機銃手、機銃手？、くそ、なんで死んじゃってんだよ」

ドカーン

永島少尉「くそ、機銃手お前の分まで生き残ってやるからな」

永島一鉄少尉彼はこの宣言通り生き残り救助の潜水艦に拾われ終戦後数年間軍に在籍少佐で退役その後中津の誘いを受け新設された国土交通省航空局技術試験隊パイロットとして働いた後政治家に転任内閣総理大臣を4期16年と長期政権を築いた、彼の政治は腐敗汚職の少なく、市民に寄り添った政治でありスキャンダルが16年間で2件とゴシップ記者や野党を悩ませる存在となった

スプルーアンス機動艦隊本隊臨時旗艦空母イントレピッド艦橋

「敵機多数防空網を抜けてきた」

スプルーアンス「来たか、前衛艦隊の位置は？」

参謀長「後は1、2時間で決戦に入れるかと」

スプルーアンス「そうか、全砲門開け本艦隊を犠牲にしてもよい前衛艦隊を守れ」

「了解」

ドンドンドンドン、ドンドンドンドン

ダダダダダダ

ダダダダダダ

ドカーン

四季島パイロット2「行くぞ、くらえ」

ヒューウ、ドカン

四季島パイロット3「そろそろ1発」

ヒューウ、ドカン

攻撃隊は次々と爆弾や魚雷を多数の艦に叩きつけていた

イントレピッド艦橋

ここには旗艦と艦隊の被害報告が届いていた

「艦後方火災発生」

「格納庫で火災発生」

「艦前部と後部に2本被雷」

「艦左舷底部浸水」

副長「エジエクターにて排水しておりますが、被雷の衝撃で半数が使い物にならず、残念ながら」

スプルーアンス「そうか、将旗を移すか、参謀長旗艦になる艦をリストアップしてくれ」

参謀長「はい」

通信士1「空母タイコンデロガ航行不能」

通信士2「空母ランドルフ沈みます」

通信士3「空母ホーネットII火災発生」

観測員1「空母インディペンデンス沈んでいきます」

観測員2「駆逐艦3隻沈みます」

参謀「被害ですが先の報告以外にもインディペンデンス級空母3隻が撃沈乃至放棄に」

スプルーアンス「空母6隻喪失か、手酷くやられたな、デューポス

の前衛艦隊は無事にたどり着いただろうか」

参謀長「敵攻撃隊は引き付けたのでたどり着けたかと」

スプルーアンス「そうか、艦隊反転パールハーバーに」

「了解」

18時29分スプルーアンス機動艦隊はパールハーバー方面に撤退を開始同時刻第2艦隊がデューポス艦隊を補足戦艦9隻を主力とする艦隊を補足第1、第4艦隊と合流し艦隊決戦の構えを取った

28話

1943年2月マーシャル沖ノースカロライナ艦橋

デューポス「敵艦隊はまだ見えないのか」

参謀「はい未だに」

デューポス「敵は必ず夜戦を仕掛けてくる周辺警戒を厳重にしろ」
参謀「はい」

デューポス率いる前衛艦隊は離脱する本隊を援護するために殿として敵艦隊を捜索していた

対する四季島皇国前衛の第2艦隊もデューポス艦隊を探していた1度は双方相手を索敵機が発見したものの両艦隊が出会ったのは日も過ぎかけた2月22日23時40分の事であった、発見はタッチの差で四季島艦隊のほうの方が早かった

第2艦隊旗艦伊吹艦橋

木村「遂に見つけたか、全艦に打電夜戦用意土手っ腹にでかいの喰らわせるぞ、第1、第4艦隊の位置は？」

参謀長「本艦隊の後方にピタリと着いています」

木村「よろしい夜戦の時間だ」

第1艦隊旗艦大和

伊藤「面舵40右舷砲戦用意」

操舵手「おーもかーじ40」

砲術長「右舷砲戦用意」

伊藤「第4艦隊に打電我先行す我が戦艦隊後方に続け」

通信士「了解」

観測士「敵艦隊ノースカロライナ級戦艦2アイオワ級戦艦4サウスダコタ級戦艦3重巡洋艦8軽巡洋艦5駆逐艦25」

伊藤「米戦艦隊との決戦かこの航空全盛期に機会に恵まれんと思つていたのだがな」

参謀長「それは」

伊藤「大砲屋の最後の花道かもしれんな」

参謀長「そうですな」

砲術長「装填よし照準よし」

参謀長「閣下撃てます」

伊藤「撃ち方始め」

ドーンドーンドーン

大和以下6隻から46cm 41cm砲弾が撃ち出された

ヒューーウ

ドカーーン

観測員「命中弾3」

伊藤「初弾命中か」

参謀長「聯合艦隊砲術の誉れですな」

伊藤「うむ」

ノースカロライナ艦橋

デューポス「被害報告」

艦長「艦後部に被弾」

参謀長「ワシントン、アイオワ被弾」

デューポス「初弾命中だとCrazyな、撃ち返せ当たらんでも構わん、大砲屋の意地を見せてやれ、それと水雷戦隊に通達、俺の名でだ『被害を省みず突撃せよ』いいな」

通信士「りよ了解」

ドーンドーンドーン

ヒューーウ

ドカーーンドカーーンドカーーン

観測員「全弾至近弾」

砲術長「諸元そのまま次弾装填急げ」

ヒューーウ

ドカーーン

観測員「ワシントンが」

参謀長「ワシントンが、沈みます」

デューポス「全砲門を敵後方のフソウクラスに集中させろあれだけでも血祭りに上げるのだ」

砲術長「了解」

ドカーンドカーンドカーン

ヒューーウ

ドカーンドカーンドカーン

第4艦隊旗艦扶桑

南雲「敵はこつちに照準を変えたか被害は？」

参謀長「ありません、ただ伊勢に至近弾との事」

南雲「そうか、撃ち返せ」

ドカーンドカーンドカーン

ヒューーウ

ドカーンドカーンドカーン

南雲「水雷戦隊は？」

参謀長「突撃を開始しています」

南雲（頼んだぞ木村）

第2艦隊旗艦伊吹艦橋

木村「突撃だ土手っ腹にでかいの1発決めたれ」

参謀長「はい」

ノースカロライナ艦橋

デューポス「敵の水雷戦隊か、こちらも水雷戦隊で」

ドカーン

デューポス「なんだ、何が起きた」

観測員「ウイスコンシンが」

艦長「なんとということだ」

参謀長「ウイスコンシン撃沈されました」

デューポス「くそやり返せヤマトを血祭りに上げる」

ウイスコンシンを沈められた事でデューポスの頭から水雷戦隊の

事は忘れ去られた、ヤマトを血祭りに上げるこの事以外デューポスの頭にはなかったのである

伊吹艦橋

木村「位置についたか、全艦魚雷投射」

参謀長「了解」

第2艦隊及び第1、第4艦隊の水雷戦隊から合計696本の酸素魚雷が放たれた

最初に気づいたのは艦首に信濃の46cm砲弾を食らい退避していたアイオワの夜目の効き視力の優れた観測員であった

アイオワ艦橋

観測員「左舷に雷跡らしきもの多数接近」

艦長「取舵15」

操舵手「アイサー、取舵15」

ドカーン

艦長「ダメージレポート」

副長「艦首に2、3本の魚雷が命中、被害不明なれど甚大の模様」
艦長「くそ、いかん他の艦にもこの事を伝えろ」

この時のアイオワの被害は応急修理された艦首が完全に破断し毎分100トンの海水が艦内に流入していた艦長はこのことを知るとアイオワの放棄を決定退艦することを命じ付近の艦に救助を依頼したが付近の艦もそれぞれではなかった、一番近い重巡ウイチタは土手っ腹に6本食らい爆沈ニューオリンズ、アストリアも大破航行不能軽巡コロンビア轟沈モントピア、デンバー撃沈駆逐艦15隻が沈み水雷戦隊は機能不全とかしていた、それどころかアイオワ級戦艦ニュージャーシーが浸水による傾斜で砲戦不能、ミズーリが舵が破壊され転舵不能サウスダコタ級戦艦3隻もアラバマを除き撃沈された、だがリバティリアも負けずに撃ち返したその勢いは山城を大破させ伊勢を戦列から離れさせた、それどころか第2艦隊旗艦伊吹の主砲2基を破

壊し司令官の木村中将を負傷させた、双方わかつているのだもはや砲戦艦が大海の覇者になれない事を、だが大砲屋の水雷屋の意地を見せる最後の機会だと、特にリバティリアには後が無いここで負ければ砲戦をする余力は残っていないのだ、残る戦艦は大西洋艦隊に廻され、太平洋艦隊には後退したサウスダコタ級戦艦3隻にカリフォルニア、メリーランド、ウエストバージニアに中途半端なアラスカ級2隻ともではないが艦隊決戦は出来ないその事を知っているからこそデューポスは砲撃を止めない

海戦が終わったのは日が登ってきた23日午前6時頃であった、デューポスが白旗を掲げた時生きていた艦は

戦艦ノースカロライナ、ミズーリ、アラバマ

重巡クインシー、ヴィンセンス、ボストン

軽巡バーミングハム

駆逐艦5隻であった

対する四季島艦隊も

戦艦山城大破、伊勢大破、長門中破、信濃中破、武蔵小破

重巡伊吹大破、高雄大破、愛宕大破、妙高大破など大破4隻中小破

12隻

軽巡神通大破艦首切断、阿賀野大破、能代中破

駆逐艦12隻大破28隻中小破

と双方大損害であった

23日10時第1艦隊旗艦大和艦橋

伊藤「それで木村くんの容態は？」

軍医長「安定しております」

伊藤「ならよいが。参謀長、敵の機動艦隊は？」

参謀長「索敵機や潜水艦からの報告でハワイ方面に撤退している」と

伊藤「追撃命令は？」

参謀長「GF本部はマーシャル諸島に後退するようにと」

伊藤「ウエークは放棄か」

参謀長「はい、まあ補給面で問題が多かったですからな」

伊藤「それもそうだな」

四季島艦隊がマーシャルに戻る一方、リバティリア艦隊はお通夜状態であった

空母バンカー・ヒル艦橋

スプルーアンス「そうかデューポスは破れたか」

ムーア「はい」

その瞬間ドカーローン

艦長「何事だ」

艦橋要員「雷撃です」

スプルーアンス「ダメージレポート」

参謀長「バータン、ランドルフ、ヨークタウンⅡが沈みます」

観測員「駆逐艦5隻撃沈されました」

スプルーアンス「なんだと、敵の潜水艦は何隻いるのだ」

この時スプルーアンス機動艦隊は伊号潜12隻により方位されていた、そして

レーダー員「レーダー上で高速飛翔体接近」

艦長「迎撃」

レーダー員「駄目です」

ヒューローウ、ドカーローン

スプルーアンス「グハア」

「「うあああ」」

撃ち込まれたのは散弾式弾道弾であった

結果としてスプルーアンス機動艦隊は空母バンカー・ヒル、レキシントンⅡ、ワस्पⅡラングレー、ベロー・ウツド、モンテレー以外の空母を失った、帰還後スプルーアンスは公聴会に呼び出されたが、その疲れ切った姿を見た議員達はスプルーアンスを責めることができなかつた、なにせスプルーアンスは一人で立つことすらできないほど衰弱していたのだ、結局スプルーアンスはそのまま海軍病院に入院治療中に終戦を迎えた

この件を聞いたルーズベルトは太平洋艦隊首脳部を罵ると同時に

西海岸での陸戦を決定歩兵48個師団を西海岸に貼り付けると同時に戦車主体の機甲師団による包囲殲滅を行うように命じられた時ルーズベルトの元にロスアラモスが攻撃により破壊されたと連絡が来たルーズベルトは報告を聞くと1休みすると告げ2度と起きては来なかった。

3月1日フランクリン・デラノ・ルーズベルト第32代リバティリア大統領死去、後任は副大統領のハリー・S・トルーマンが臨時で大統領職を代行することとなった。

トルーマンは迷った、このまま四季島と戦うか、それとも和睦するか、和睦するとしたら条件はどうするかトルーマンの脳裏には四季島にわたす領土の案が出来上がっていた

1. 太平洋の諸島全域とアラスカ全土、その代わりドイツとの和睦の仲介を依頼する

2. ハワイ諸島を除いた太平洋の諸島全域とアラスカ全土、それに西海岸への四季島企業の優遇その代わりドイツとの和睦の仲介を依頼する

3. ハワイ諸島、ミッドウエーを除いた太平洋の諸島全域とアラスカ全土だがその後相当額でリバティリア政府が東側半分を購入するが購入額は全土の金額として残りは賠償金として四季島皇国に支払い、それに西海岸への四季島企業の優遇その代わりドイツとの和睦の仲介を依頼する

トルーマンとしては最善は3案であったこれならアラスカの半分は帰ってくるどころかハワイ防衛の要たるミッドウエーも保持できる賠償金は多いが金はどうにかなる、唯一の問題はドイツが何を要求するかであった。

そんなトルーマンの元に四季島からの全権大使を載せた潜水艦が秘密裏に接触してきたとの事であった、それはブリテンが落ちたら講話しようとのことであった、内容はリバティリアが持つ太平洋諸島アラスカ全土の割譲、なおその地の権益については半数は四季島政府が正当額の3倍で購入残りはそのまま、ハワイにリバティリア海軍の小艦隊の駐留地の有料許可、満洲特区へのリバティリア財界の参加許可

といったものであったその代わり西海岸3州に四季島軍の部隊の展開と駐屯地の有料供与四季島企業の優遇が条件とされすべて飲むならパナマ運河利権の1部をドイツに譲与する条件でリバティリアと枢軸諸国への和睦を仲介するとのことであった、また条件内に38度線以南の朝鮮半島をリバティリアに譲渡すると書かれていたのだった、内容には軍は陸軍5000名海軍軽空母1隻巡洋艦1隻駆逐艦5隻に潜水艦禁止航空機50機までの配備を認めるとされていた

トルーマンは悩むこの条件は敗戦間際の国に出すとしたら緩すぎるものであった、戦争犯罪を裁く裁判を行わない、内政干渉しない、それどころか領土を獲れる、トルーマンは決意すると同時に四季島政府に対して秘密裏に外交特使を派遣した内容はブリテンが落ちたと同時に先の条件で講話したいとのことだった

第29話

1943年4月2日リバティリア合衆国ワシントンD・C・ホワイトハウス大統領執務室

この日ここにはハリー・S・トルーマンが戦況を聞くために陸海軍の首脳を呼び出していた

トルーマン「ではブリテン本土は維持できないか」

キング「はい、新造艦の大半を太平洋に送ったため大西洋どころかドーバー海峡の制海権を維持できません、それどころか四季島の機動艦隊が地中海に進出しつつあるのでこのままではスカパ・フローすら安全圏では無くなりつつあります」

マーシャル「対岸にナチの地上軍が多数展開しています、指揮官はロンメルです、ブリテン本土の艦隊と航空隊を黙らせた後一挙に上陸してブリテン本土を制圧するつもりかと」

トルーマン「対処法はあるのか？」

キング「現状では対処法は、それこそ太平洋に残存する艦隊を全て大西洋に送り込むくらいしか」

トルーマン「四季島の聯合艦隊はどうするのだまさか西海岸を四季島の好きにさせる気か」

キング「大統領閣下、せめてアラスカ級2隻とサラトガを大西洋艦隊に廻す許可をでなければ制空制海権を維持できません、すでに大西洋艦隊で動ける戦艦はニューメキシコとミシシッピのみ空母はレンジャーとボーグ級3隻だけブリテン艦隊もキングジョージV世級2隻とレナウンと装甲空母3隻、ガレア艦隊もクルーベ級1隻のみで空母は無しこれでは支えきれません」

トルーマン「制空権は地上基地の飛行隊でどうにかならんか」

アーノルド「無理です、敵は我々より多く質も同等かそれ以上です」

トルーマン「陸軍はどうだ上陸してきた場合対処は可能か？」

マーシャル「厳しいかと現在ブリテン本土には多数の戦車が展開していますがナチのアニマルタンクに対処できるのはM10位で残り
は正面では一方的に叩かれます」

トルーマン「勝ち目はないから」

そう言うとトルーマンは辺りを見渡し、室外に誰もいないか確認させる。ここだけの話を始めた

トルーマン「マーシャル沖海戦の後、四季島から外交官が来た」

キング「なんですと」

マーシャル「それで内容は」

トルーマン「我が国との講話、そしてナチとの講話の仲介だ」

アーノルド「講話の条件は？」

トルーマン「我が国が持つ太平洋諸島アラスカ全土の割譲、なおその地の権益については半数は四季島政府が正当額の3倍で購入残りはそのまま、ハワイに海軍の小艦隊の駐留地の有料許可、満洲特区への我が国の財界の参加許可といったものであった。その代わり西海岸3州に四季島軍の部隊の展開と駐屯地の有料供与、四季島企業の優遇することが条件だ。これを飲むならパナマ運河利権の一部をドイツに譲与する条件で我が国と枢軸諸国への和睦を仲介するとの事だ、また条件内に38度線以南の朝鮮半島をリバティリアに譲渡すると書かれていた、内容には軍は陸軍5000名、海軍軽空母1隻、巡洋艦1隻、駆逐艦5隻に潜水艦禁止、航空機50機までの配備を認めるとのことだ、奮戦し一太刀を浴びせれば条件は変わるだろう」

マーシャル「それは」

トルーマン「それにだ、ブリテン本土攻略までハワイや西海岸を攻撃しないとも言ってきている、太平洋はどうにかなるが事が露見すればどうなるかわからん、海軍には最低限四季島海軍と戦える程度の艦隊を残して大西洋に廻ってくれ、それまでは外交で西海岸を守る」

キング「了解しました。ウェストヴァージニアとアラスカ級2隻、サラトガとエンタープライズとボーグ級3隻を大西洋に回します」

マーシャル「陸軍も西海岸に部隊を増やします、ブリテンには現状の部隊でどうかしてもらいます」

アーノルド「航空団も戦線を維持させます」

トルーマン「頼む」

1943年6月13日角田中将率いる第3機動艦隊がジブラルタルに展開この艦隊には四季島いや中津が持てる技術のすべてを注ぎ込んだ噴進式艦上戦闘機疾風が搭載されていた

疾風は武装25mm機関砲6門を機首に集中配備それに翼下にガンポッドや空対地無誘導ロケットや精度は低い誘導式空対空ミサイルを搭載できた

全長： 15.2 m

全高： 4.95 m

翼幅： 11.81 m

見た目はF100スーパーセイバー一応音速を超えられる

このモンスター戦闘機を見たルフトヴァツフェ関係者は一応配備を進めていたme262シュヴァルメやme163コメットを鼻で笑う性能であったシュヴァルメが900km出せないのに疾風は1200kmを出して余裕で3000kmほど飛ぶのだ、この報告を聞いたヒトラーはゲーリングを呼び出しすぐに疾風を超える戦闘機を作るように命じつつ外務省を通じて疾風の購入に走ったが四季島からはその試験機で廉価版に当たる炎龍の輸出を提案されていた炎龍は速度こそ950km程であったが航続距離2500kmとシュヴァルメよりも長く飛べた、ヒトラーは炎龍48機を即決で購入ゲーリングもこの機体に精鋭を乗せたこの部隊はガーランド少将を司令官に48機の炎龍を扱う最精鋭部隊とし第44戦闘団の名称を与えられた

炎龍がフィラルドの四季島軍基地から空輸され機体が第44戦闘団に引き渡されたのは6月15日第44戦闘団が戦闘可能になったのは翌月の1日であったこの短期間で転化訓練が終わったのはパイロットが精鋭なのは無論だが全員シュヴァルメの操縦経験を持っていたことと炎龍がシュヴァルメに似た機体出会ったことに由来する

そして7月5日第3機動艦隊はドイツ、イタロス、ヴィシーガレア軍との共同で七夕作戦を発動ブリテン艦隊を釣り出すためにポーツマス軍港空襲を匂わせる動きを取った、これに引っかけたのはポーツマス軍港を目指していたフレーザー中将率いるブリテン本国艦隊

であったフレージャーは第3機動艦隊の出撃を確認するとブリテン各地の飛行隊と連携を取るためブリテン島の西側に展開これにより第3機動艦隊を攻撃した後攻撃隊がブリテン島に帰還させつつ艦隊が敵の攻撃圏外に脱出するつもりであった

艦隊は旗艦アンソン、同型艦のデューク・オブ・ヨーク装甲空母イラストリアス級3隻に重巡洋艦ノーフォーク、ロンドン級重巡洋艦2隻に軽巡洋艦ベルファスト、ダイトー級軽巡洋艦3隻駆逐艦15隻で編成されたブリテン艦隊の最後の主力とも言える艦隊であった、対する第3機動艦隊は大鳳型6隻に急ぎ建造された改大鳳型白鶴型の白鳳、黒鳳近江型4隻伊吹型4隻阿賀野型2隻秋月型12隻松型16隻艦載機480機

先に敵を見つけたのはブリテン側であったブリテン各地から偵察機を放ち発見したのであった、位置を聞いたブリテン艦隊は攻撃隊の射程に敵を収めるために200マイルまで接近させると決定ビスケー湾沖に展開している角田艦隊に向け前進を開始した、同時にブリテン各地の飛行場からB25、B26といった双発中型爆撃機に魚雷を装備した部隊が護衛機とともに一番槍目指し出撃していった。偶然にもこれを探知したのは船団襲撃からビスケー湾に帰還途中のUボートU827であった

通報を受けたルフトヴァッフエは角田艦隊援護の為にフォッケウルフfw190戦闘機36機とこの日の為に集められた第44戦闘団の炎龍48機を出撃イタロス空軍も四季島から導入したGCM・0・0（零戦21型のライセンス生産機）やGCM・0・1（零戦22型）合わせて57機をヴィシーガレアは完成した戦艦リシュリユーに軽巡洋艦プリモゲ駆逐艦ゲパール四季島から購入した空母ノルマンディー重巡洋艦ラ・フォンテーヌ駆逐艦ラ・ロシユル、ド・リュールスの2隻とフリゲート艦5隻戦闘機48機を角田艦隊の前衛として配備ヴィシーガレアとしては四季島に恩を売るつもりであったが角田は同盟国の艦隊を沈めるわけには行かないと防空のためにガレアに展開していた第10戦闘機戦闘団に直掩機を依頼していた

ブリテン島沖上空

マクレンスキー「まさか大西洋で四季島の機動艦隊とやり合うことになるのは」『全機周辺警戒を怠るな』

ブリテンパイロット1『3時上方に敵機突っ込んでくる』

マクレンスキー『戦闘機隊全機ブレイク、ブレイク』

ブーン

ダダダダダダ

ドカーーン

マクレンスキー「何機か喰われたか」

爆撃機クルー『敵機はフォックウルフだ、くそナチめ』

ダダダダダダ

爆撃機クルー『4番がやられたぞ』

爆撃機隊指揮官『各機編隊を密にして弾幕を張れ』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

爆撃機クルー2『8番機2機そっちに行ったぞ』

爆撃機クルー3『くそ落ちろ』

ダダダダダダ

這々の体で迎撃網を潜り抜けた攻撃隊に角田艦隊からの迎撃機が襲いかかる

爆撃機隊指揮官「あ、あれは」『全機密集しろ敵の新手だ』

それは白鳳、黒鳳から発艦した疾風48機が襲いかかった、護衛のP51やF6F、モスキートも果敢に反撃するが疾風は彼らにとって未知の戦闘機であった

『くそ速い、速すぎる』

『彼られた、助けて、ぐわあ』

ドカーーン

攻撃隊は角田艦隊どころかその前衛に当たるヴィシーガレア艦隊を見る事なく壊滅していった

戦艦アンソン艦橋

フレージャー「なに、壊滅、間違いないのですね」

参謀長「はい、地上基地からの攻撃隊190機あまりが壊滅と」

フレージャー「そうですか、とはいえ艦隊を下がらせる事はできません

ん、全艦前進、角田艦隊を討ちます」

「「Yes, sir」」

こうしてフレーザー艦隊は前進を継続これが角田の罠にかかる行為とも知らずに

第30話

1943年7月6日11時25分ブリテン島西方230マイル沖
フレージャー艦隊旗艦アンソン艦橋
フレージャー「敵艦隊の位置は？」

参謀「はい、本艦隊南東約180マイルです」

フレージャー「攻撃隊を出してください、直掩の戦闘機もです、全機出して構いません」

参謀「了解」

12時丁度戦闘機54機爆撃機30機攻撃機36機が出撃同時に艦隊は母港に戻るべく東進を開始

対する第3機動艦隊は大鳳型6隻から144機が出撃編成は戦闘機72機爆撃機36機雷撃機36機、機体は戦闘機が零戦53型爆撃機雷撃機が流星であった両機種とも発動機をターボプロップ天星3200馬力を搭載していた速力は零戦745km流星682kmに達していた

そして双方の攻撃隊は途中ですれ違った高速で近づき遠のいていく四季島軍攻撃隊を見たブリテン海軍パイロット達はこの攻撃隊を見て恐れおののいた

ブリテンパイロット1「なんだあの速度は」

ブリテンパイロット2「冗談じゃねえ」

ブリテンパイロット3「まづいぞこりゃ」

13時丁度装甲空母白鳳艦橋

角田「そうか、高橋中佐の攻撃隊がブリテン攻撃隊とすれ違ったか」
参謀長「はい、ブリテン海軍は未だに複葉機を使っているようです」

角田「そうか、対潜警戒を厳にしろ、攻撃隊は囿かもしれない」

角田の勘は当たっていたフレージャーは機動艦隊同士の戦いで勝てないのは承知の上で艦載機隊どころか自艦隊を失う覚悟で潜水艦による機動艦隊襲撃をさせる予定であった、そしてその一撃はヴィシー

フランス艦隊を襲った

角田「なに、空母ノルマンディーが被雷中破しただと」

通信参謀「はい、他にフリゲート艦1隻が大破重巡洋艦ラ・フォンテーヌが小破しました」

角田「手酷くやられたな、艦隊をどう動く?」

通信参謀「このまま前衛を続けると」

角田の脳裏に出撃前必ずブリテン艦隊を叩きのめすと熱弁を振るっていたガレア海軍将官の顔が蘇った

角田（メルセルケビル海戦の仇を打たせてやりたいな、だとすると）

参謀長「閣下?」

角田「よし、参謀長第5巡航戦隊と第12重巡洋戦隊と水雷戦隊をヴィシーガレア艦隊と合流させてブリテン追撃に当たらせろ、ガレア艦隊にも追撃を依頼してくれ」

参謀長「了解しました」

13時25分戦艦陸中を旗艦に戦艦4重巡洋艦4軽巡洋艦1駆逐艦16隻がガレア艦隊と合流そのまま戦艦リシユール軽巡洋艦プリモゲ駆逐艦ゲパールと合流したガレア艦隊を率いるボアソン中将は第5巡航戦隊兼追撃艦隊指揮官の中村一鉄少将と電話越しに10分ほど話作戦を確認すると座乗するリシユールを陸中の後ろに付けプリモゲを最後尾にゲパールを最前衛に配置し指揮権を中村少将に預けたこの事を批判する者もいたがブリテン艦隊撃滅するためと納得させていた

13時40分大西洋ブリテン艦隊上空

高橋中佐「直掩無しか舐められたものだ、全機掛かれ」

アンソン艦橋

フレーザー「来たか、全砲撃ちはじめ」

ドンドンドン

ポンポンポンポン

四季島パイロット1「温い対空砲火だな喰らえ」

カシヤ、ヒューウ、ドカーン

四季島パイロット2「そろもう1発」

ドカーン

ポンポンポンポンポンポンポンポンポン

アンソン艦橋

フレーザー「被害は」

参謀長「イラストリアス大破、ヴィクトリアスも中破フォーミダブルにて火災発生で火災の箇所が悪くこのままだと艦橋が丸焼けになります、通信設備も破壊されたようで現在手旗信号で意思疎通を凶っています」

フレーザー「3隻とも戦力外ですか、これで残された空母は修理中のインドミタブルと船団護衛についているフューリアスとアーガス、それにリバテiriaから借りたボーグ級4隻、機動艦隊は組めなさそうですね」

参謀長「はい、他に軽巡洋艦2隻撃沈駆逐艦6隻が撃沈されております」

通信士「緊急電、敵砲戦艦隊こちらに向かってきています」

参謀長「なんだと」

フレーザー「位置は？」

通信士「艦隊南方170マイル速力30ノット」

参謀長「本艦隊の速度は損傷艦のことを考えるとどうやっても12ノットが限界です、本土の防空網に入る辺りで捕捉されます」

その時フレーザーは覚悟を決めた

フレーザー「全艦に通達本艦とデューク・オブ・ヨークそれに無傷な艦は此れより敵艦隊を迎撃するため南下します、損傷艦は急ぎ本土に帰還するように」

参謀長「閣下！」

フレーザー「すいません、皆の命私に賭けてください、たとえ負け

戦であろうとブリテン本国艦隊は最善を尽くしたと言えるだけの戦をしましよう」

参謀長「こうなると残してきたレナウンとハウ、キング・ジョージ5世や他の戦艦達が可愛そうですね」

砲術参謀「確かにやつと掴んだ海軍大国との艦隊決戦に参加できないのだから」

フレーザー「歴史に残る海戦にしましよう。戦に参加できなかった彼女らの為にも」

「はっ」

14時13分ブリテン攻撃隊は角田機動艦隊に攻撃を敢行するも

ダダダダダダダダダダダダダダ

ドカーーン

ヒューーン

ダダダダダダダダダダダダダダ

ドカーーン

ブリテンパイロット1『追われてる、た、助けてくれ』

ブリテンパイロット2『誰か助けてくれ』

攻撃隊は疾風に捕捉されそのまま撃滅されていった艦隊に辿り着くことすらできなかつた

この報告を聞いたフレーザーは一言「そうですか」そう呟いたという

18時をすぎると両艦隊とも夜戦の準備を下命そして18時30分分双方は32000mの距離で砲戦を始めた

戦艦リシユール艦橋

通信士「閣下陸中より入電、「海戦ハリシユール一撃を持ツテ始メラレタシメルセルケビールの敵討チハ今ゾ」です」

ボアソン「中村少将に返しきれん借りを作ってしまったな」

参謀長「後で閣下秘蔵のワインを送贈りましょう」

ボアソン「そうだな、砲撃用意、初弾で当てろよ、わがヴィシーガレア海軍砲術の誉れを同盟国に見せてやれ」

砲術長「アイサー、諸元よし、目標敵戦艦アンソン、照準よし」

艦長「閣下」

ボアソン「全砲斉発、撃て」

その命令と共に8発の38cm砲弾がアンソンに飛びかかった
ヒューウ、ドカーン

観測員「敵艦に2発命中、初弾命中です」

通信士「陸中より入電「先の砲撃見事マサニヴィシーガレア海軍ノ
誉レナリ」です」

観測員「陸中以下戦艦隊砲撃」

ヒューウ、ドカーン ドカーン ドカーン ドカーン

観測員「敵艦発砲」

ドカーン ドカーン

艦長「怯むな撃ち返せメルセルケビールの敵討ちだ」

メルセルケビールの敵討ち、それはヴィシーガレア海軍のスローガン
になっていたガレア降伏当時中立を保っていたヴィシーガレア艦隊に奇襲攻撃を仕掛け騙し討とも取れる戦を仕掛けヴィシーガレア
を枢軸国として対連合戦参加に舵を切らせたこの海戦の敵討ちを
ヴィシーガレア海軍はずっと望んでいたのだ

陸中艦橋

観測員「河内被弾」

中村「ふむ、腐つても鯛、ブリテン艦隊もなかなかやるものだな」

参謀長「そうですね、とはいえそろそろ限界でしょう、デューク・
オブ・ヨークの火災は相当のようです」

中村「ヴィシーガレア艦隊に打電「我ブリテン艦隊ニ降伏ヲ勧告ス」
とな」

参謀長「閣下」

中村「付け加えろ「我等野蛮人ニアラズ」と、ヴィシーガレア艦隊
の提督はそれでわかってくれるはずだ」

通信参謀「了解」

リシユリユー艦橋

通信士「四季島艦隊から電文「我ブリテン艦隊ニ降伏ヲ勧告ス」で

す」

参謀長「なんだと、メルセルケビールの敵は打ち終わっていないのに」

ボアソン「他にはなにか言ってきていないか？」

通信士「はい「我等野蛮人ニアラズ」と」

ボアソン「そうか、陸中に返信「我等文明人ナリブリテン艦隊二降伏ヲ勧告ス」とな、中村少将はなかなか頭の回転が速いらしい」

参謀長「どういうことで？」

ボアソン「降伏を勧告することで同盟国を騙し討ちした野蛮なブリテンとは違うとアピールするのだよ」

参謀長「皮肉が効いてますな、元同盟国の四季島と騙し討で叩いた我々からこんな紳士的な提案をされるとは」

アンソン艦橋

艦橋要員「デューク・オブ・ヨーク被害甚大」

副長「2番主砲射撃不能」

機関長「機関出力低下、戦闘に支障あり」

通信士「四季島艦隊から電文「降伏ヲ勧告ス」との事」

フレーザー「そうですか」

参謀長「閣下」

フレーザー「四季島艦隊に返信「我貴艦隊ノ降伏勧告ヲ承諾スル」以上だ」

参謀長「閣下」

フレーザー「すみませんね皆さん、皆さんの命を預けてもらったのに」

参謀長「小官はこの判断を正しいと思っております」

翌7日角田機動艦隊が七夕作戦の締めとしてポーツマス軍港を空襲240機の流星が1機当り2トン爆弾若しくは魚雷を軍港とその周辺施設、在港艦艇を手当たりしだいに叩いたこの攻撃で重巡洋艦サセックスが大破底着軽巡洋艦クレオパトラ、シリアスの2隻が撃沈駆逐艦2隻撃沈4隻大破フリゲート艦3隻掛かれ撃沈され港湾機能の

大半と砲臺のほぼ全てを破壊された、また迎撃に上がったスピットファイアやハリケーン合わせ51機を失いレーダー施設も破壊された

この報告を受けたチャーチルは動かせる機動艦隊の消滅と再建にかかる時間を考えそのまま卒倒した

ベルリン総統官邸

ヒトラー「これで上陸の邪魔になるのはリバティリア大西洋艦隊だけだ、レーダー元帥敵の数は」

レーダー「はい戦艦ニューメキシコ、ミシシッピ、ウエストヴァージニア、アラスカ級2隻空母エンタープライズ、サラトガ、レンジャー、ボーグ級6隻重巡洋艦5隻軽巡洋艦3隻駆逐艦30隻その他戦闘艦艇80とのことです、それとブリテン艦隊ですが未だにキング・ジョージV世、ハウ、レナウン、空母インドミタブル、フューリアス、アーガス、ボーグ級4隻重巡洋艦2隻軽巡洋艦5隻駆逐艦27隻その他戦闘艦艇34もいます大西洋全体で合わせて220隻それに所在不明の潜水艦も多数おります、それに魚雷艇も多数おりますので上陸時に妨害に出てくるかと」

ヒトラー「そうか、あと一戦は交えねばならぬか」

レーダー「はい」

ヒトラー「レーダー元帥、四季島艦隊に我がドイツ艦隊を合流させれば勝てるかね」

レーダー「やり方によります我が海軍は戦艦、装甲艦7隻空母4隻重巡洋艦8隻軽巡洋艦10隻駆逐艦37隻それにUボート多数を動員可能です、それにイタロス、ヴィシーガレア艦隊も動員可能ですこれを勘案に入れば勝てるかと」

ヒトラー「そうか、立案を頼むできる限り早くブリテン島に我がハーケンクロイツを掲げるのだ」

レーダー「ハイルヒトラー」

1943年8月10日突如ブリテン空軍やりバティリア陸軍航空隊の重爆をレーダー捉えた

第31話

1943年8月3日ブリテン島ロンドン首相官邸

チャーチル「ではブレスト及びラ・ロシユルそれにカーン、パ・ド・カレ―爆撃に反対されると」

スパーツ「はい首相この作戦に参加する戦闘機部隊だけでは枢軸の防空網を突破できません、再考を」

チャーチル「仕方ない、ならブレストとラ・ロシユル、カーンのみなら、それもラ・ロシユルには小規模爆撃と限定すれば可能かね」

スパーツ「それならば貴国の空軍と協力すれば可能でしょう」

チャーチル「では頼む」

翌4日連合軍欧州方面軍司令部は敵上陸作戦遅延のために物資集積地とされているカーン、四季島以外の三国連合艦隊が集結しているブレスト軍港空襲陽動として角田機動艦隊が展開するラ・ロシユル軍港空襲が決定

そして10日午前2時攻撃隊全機発進開始予定では前日午後19時出撃予定であったが同時刻に豪雨と濃霧により出撃が7時間後ろ倒しとなっていた、本来なら中止が妥当であるがルフトヴァッフエの空襲や角田機動艦隊によるポーツマス空襲以降の機動艦隊による一撃離脱戦法による軍港襲撃による各軍港の稼働率低下や警備艇や監視艇の喪失によって哨戒網に穴を開けられかけたことにより枢軸軍の上陸察知効率の低下を早急に対処するべく空襲実施を急いでいた

午前2時プリマス沖上空

ブリテン爆撃隊指揮官「ふう」(この作戦成功するのか、いや成功したとして生きて帰れるのか)

機長「指揮官、緊張してますか?」

指揮官「まあな、陽動とはいえこれほどの爆撃隊を指揮するとな」

機長「確かに空軍に入つて25年、前大戦にも参加した私としても陽動と本隊合わせてこれだけの大部隊が参加する作戦は初めてです

よ」

指揮官「そうか君は前大戦にも参加していたのだったな」

機長「はい、と言つても出撃は終戦前に1回だけそれも負傷した偵察員の代わりに後部座席で震えてただけですがね」

指揮官「だがすごい経験さ」

爆撃機クルー「指揮官、機長、もうすぐ対岸の海岸線が見えます」

指揮官「そうか」『全機敵の迎撃機が来るはずだ警戒を厳重にしろ』

『『了解』』

その頃ルフトヴァツフェ司令部ではこの部隊を確認すると迎撃機隊を出撃させた

ルフトヴァツフェ司令部

ゲーリング「ヴィシーガレアの夜戦隊は発進したのだな」

空軍士官「はい夜間戦闘機38機が発進したと」

ゲーリング「敵の数は」

空軍士官「約120との事」

ゲーリング「そうか、敵の狙いはブレストで間違いないな」

空軍士官「はい、それで間違いないかと」

通信士「閣下」

ゲーリング「どうした」

通信士「四季島欧州派遣軍司令部から敵の狙いはブレストのみでなくカーン及びラ・ロシュルの可能性ありとの事」

ゲーリング「カーンにラ・ロシュルだと」

参謀「確かにカーンの物資集積所を破壊されるとブリテン島上陸作戦に支障があるな」

空軍士官「ラ・ロシュルにはカクタ機動艦隊の根拠地とUボート基地があるな破壊されるとブリテン艦隊撃滅や通商破壊作戦に影響がある」

ゲーリング「うむ、カクタ艦隊にラ・ロシュル防空を要請しろ」

空軍士官「了解」

参謀「カーン防空はどうしますか」

ゲーリング「本土防空団から夜間戦闘型のシュヴァルメとコメートそれにメッサーを出して対処させろ、ブリテンとリバテイリアの爆撃隊を叩き落とせ」

参謀「了解」

ゲーリングの命令を受けた本土防空団はbf110夜間戦闘機72機シュヴァルメ夜間戦闘型144機コメート夜間戦闘型36機を出撃させた、そしてラ・ロシユル防空を要請された角田率いる第3機動艦隊は疾風48機零戦53型72機を出撃させ残りの機を敵第2波に備え準出撃待機とした

そして待ち構えていることも知らず連合軍爆撃隊はプリマス飛行場を発進しそのまま西から回り込む形で途中でブレスト爆撃隊とラ・ロシユル爆撃隊に別れたそしてプリマスからの出撃から1時間後にロンドン近郊飛行場からカーン爆撃隊が発進低高度を飛行することでレーダー監視網を潜り抜けようとしていた

ラ・ロシユル沖上空

管制官「こちら空中指揮管制機大鷲、第3装甲航空戦隊戦闘機隊聞こえるか」

白鳳指揮官機「こちら戦闘機隊指揮官白鳳1、大鷲聞こえている」

管制官「敵は高度2500から3000速度450数約80北北西より接近距離450、500上方迎撃せよ」

指揮官機「こちら白鳳1了解、白鳳隊黒鳳隊全機我に続け」

管制官「第4から第6装甲航空戦隊戦闘機隊聞こえるか」

蒼鳳指揮官機「こちら戦闘機隊指揮官蒼鳳1聞こえている」

管制官「白鳳隊に続き両翼に展開編隊の崩れた爆撃隊を包囲殲滅せよ」

蒼鳳指揮官「了解、全機つづけ」

爆撃隊指揮官「そろそろラ・ロシユルか」

クルー「指揮官上方から敵機来襲」

爆撃隊指揮官「なに」『く、護衛機全機迎撃、爆撃隊全機コンバットボックスをくみ迎撃』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

白鳳指揮官機『全機噴進弾発射』

パスパスパスパスパスパス

ヒューウー、ドカーーン

ブリテンパイロット1「くそ何機か喰われたか」

ブリテンパイロット2「喰らえ」

ダダダダダダダダダダダダダダダ

四季島パイロット1「はん、当たるかよそんなへなちよこ弾が喰らいな」

ダダダダダダダダダダダダダダダ

ドカーーン

四季島パイロット1「1丁上がり」

爆撃隊指揮官「ばかな、我が爆撃隊のコンバットボックスがあつさり」と崩されるなど」

クルー2『3時方向から敵機』

ダダダダダダダ

クルー3『4番機2機そっちに行ったぞ』

クルー4『エンジン被弾落ちる落ちる』

ドカーーン

機長「指揮官、指揮官気を確かに」

爆撃隊指揮官「す、すまん」

機長「指揮官作戦は失敗です、撤退を」

爆撃隊指揮官「だが」

機長「このままでは全滅です、今爆撃隊を全て失えば後の上陸阻止に支障が出ますぞ」

爆撃隊指揮官「仕方ない」『作戦中止、作戦中止全機なんとしても生きてプリマスまで帰るぞ』

『『了解』』

通信士1「8番機撃墜されました」

クルー1「戦闘機隊半数を切る」

爆撃隊指揮官「本隊はどうなっている」

通信士1「不明です」

爆撃隊指揮官「そうか」

クルー1「指揮官左右に新たな敵編隊来襲」

爆撃隊指揮官「これまでか、すまんな諸君、死ぬ覚悟をしよう」

機長「指揮官もとより出来ております」

クルー1「あんたの部下として死ねて満足さ」

爆撃隊指揮官「通信士本隊に伝えろ「我敵ノ迎撃ヲ受け壊滅セリ、本隊ノ作戦成功ヲ祈ル」とな」

通信士1「了解」

爆撃隊指揮官「我がブリテンに栄光と祝福あれ」

ダダダダダダダダダダダダ

ドカーン

そう言い切ったとき指揮官機は疾風の25mm弾を多数喰らいそのまま爆散した、ラ・ロシユル爆撃隊は陽動としての働きを果たせなかった、本来なら角田機動艦隊居なければ四季島欧州方面軍司令部に中津配下で航空爆撃に精通した高嶋中将が居なければ作戦は成功しただろう、だが現実はその甘くないが、この時四季島軍から通報を受けたゲーリングも詰めが甘かったと言えたゲーリングは敵の狙いはカーン爆撃としラ・ロシユルには迎撃機を送らず四季島軍に一任しブレストめ陽動の囮で小規模だと思いつ込んでいた、敵の狙いがカーン、ブレスト爆撃でラ・ロシユルのみが陽動とは思いつかなかったのだ、ドイツ本土防空隊はカーンを守ることに成功したかブレストはヴィシーガレア、ドイツガレア方面防空隊合わせ72機のみで防空する羽目となっていたその結果はブレスト軍港の大被害となった

ブレスト空襲部隊はカーンより少なくラ・ロシユルより多い戦爆合わせ227機が参加していた指揮官の Rond 大佐は予想より少ない迎撃機の数に疑いを持ちながらも追い散らしブレスト空襲を敢行した、無論高高度からの水平爆撃で対艦攻撃は本来不可能であったが、停泊中の艦には有効であった

ブレスト上空

ロンド『全機爆撃開始』

『『了解』』

ヒューリーリーウ

ドカドカドカドカーン

ロンド「成功か、お他の部隊はどうなってる」

通信士2「カーン爆撃隊は敵の迎撃を受けたようですが爆撃を敢行、その、ラ・ロシユルは迎撃され壊滅したようです」

ロンド「そうか」

通信士2「それとラ・ロシユル爆撃隊から電文です」

ロンド「読め」

通信士2「はい「我敵ノ迎撃ヲ受け壊滅セリ、本隊ノ作戦成功ヲ祈ル」との事です」

ロンド「そうか」

クルー5「敵機後方から来ます」

機長「叩き落とせ」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

クルー5「敵機撃墜」

ロンド「爆弾倉は空になったかな」

機長「はい」

ロンド「そうか、敵の新手が来る前に逃げるぞ、全機進路をプリマスへ」

機長「了解」

爆撃隊は被撃墜27機帰還後放棄41機撃墜7機艦艇多数に被害を与え帰還した

被害報告はヒトラーやゲーリング、レーダー、カイテルといったドイツ首脳部や四季島皇国欧州方面軍司令部にもたらされた

ドイツ領オルレアン四季島皇国欧州方面軍司令部

大山「で被害は」

参謀長「ドイツ海軍戦艦ティルピッツ中破空母マツケンゼン小破巡

洋艦ザクセン小破ヴィシー海軍空母フランドル中破戦艦リヨン小破巡洋艦ラ・ガリソニエール小破駆逐艦4隻大破2隻小破哨戒艇9隻中破港湾施設の4割が破壊されたとの事です」

大山「なかなか手痛い被害だな」

須賀「海軍としては同盟艦隊が居らずとも角田提督の第3機動艦隊と鮫島提督の第8艦隊で敵リバティリア、ブリテン両艦隊は対処可能です、それにフィラルド駐留艦隊の3個潜水戦隊と本国から来ている伊号潜水艦1個潜水戦隊を使えばスキのない索敵網を張れましょう」

大山「たしかにそうだろうな、だが同盟国のメンツもあるのだよ」

須賀「そうでありました、とはいえこの被害はブリテン上陸作戦の延期があり得るのでしょうか」

大山「可能性はある」

パタン

伝令「伝令、ドイツ軍総司令部からです」

大山「これはなんと!」

参謀長「いかなさいましたか司令」

大山を驚かした内容は上陸作戦を延期ではなく繰り上げ8月15日日の日付変更とともに行うとの事であった、四季島皇国軍もその1翼としてブリテン島南東部プリマス制圧を要請する、電文にはそう書かれていた。また海軍戦力は全力でスカパ・フローに展開するブリテン本国艦隊残党とリバティリア大西洋艦隊を引き止め依頼がされていた

大山「ラ・ロシユルに停泊中の角田機動艦隊を直ちに出击させる、目標はスカパ・フロー泊地の連合軍艦隊第8艦隊も急ぎ急行、本国から来た援護の艦隊は上陸支援だ急げ、作戦決行は8月15日午前零時丁度」

援護艦隊それはマーシャル沖海戦で鹵獲したノースカロライナ、アラバマ、ミズーリを中心に戦艦3軽空母2重巡洋艦1軽巡洋艦2駆逐艦8海防艦8で編成された鹵獲艦を中心とした艦隊であった、艦隊の中で四季島製艦は軽空母と軽巡洋艦それに海防艦のみで残りはマーシャル沖やそれ以前の海戦で鹵獲したりリバティリア海軍の艦艇で

あつた

参謀長「なんですと、繰り上げ、そんな馬鹿な」

須賀「おい、ラ・ロシユル泊地に暗号電急げ」

海軍士官「は、はい」

大山「柴田中将の海兵上陸団の乗船用意急げ」

参謀長「はい、直ちに」

ラ・ロシユル泊地第3機動艦隊旗艦空母白鳳艦橋

伝令「伝令、欧州方面軍司令部からです」

角田「なに、これは」

幕僚「閣下いかなさいました」

角田「半舷上陸中の連中を呼び戻せ、艦隊出港、目標はスカパ・フローに居る敵艦隊主力、作戦が早まった」

幕僚「た、直ちに」

サンIIマロ海兵上陸戦闘団本部

柴田「これは参謀急ぎ乗船用意、上陸が早まったぞ日付は8月15日午前零時丁度ブリテンの連中の土手っ腹に蹴りを御見舞するぞ」

参謀「はい」

上陸作戦の遅延を狙った連合空軍の爆撃は結果としてヒトラーの逆鱗に触れ逆に早まる事となった

第32話

1943年8月11日

この日ブリテン帝国宰相ウィンストン・チャーチルは前日の爆撃隊壊滅の報告を受けるより前に機上の人となりリバティリア合衆国大統領ハリリー・S・トルーマンとの会談を行っていた

チャーチル「とにかくブリテン島への増援を陸だけじゃなく艦隊もだ速ければ奴らは来月にも上陸してくる」

トルーマン「無茶を言わんでくれそんな余剰な艦隊など我が合衆国には存在しない」

チャーチル「太平洋や東海岸にいないかね」

トルーマン「太平洋艦隊は四季島の空母が大量に展開しているこれを無視することはできない」

チャーチル「ならば東海岸で完成したばかりの空母はどうだあれなら太平洋艦隊の戦力は減少しないだろう」

トルーマン「無茶を言うなあれを引き抜けば太平洋艦隊に新造空母が行くのは早くて来年末だそれまで敵の上陸がないとも限らん、せめてカサブランカ級とその改造艦で我慢してくれ」

改カサブランカ級それは空母損失の多さに供給が追いつかなくなり機動艦隊の維持ができなくなることを恐れた前大統領ルーズヴェルトが当時量産を開始していたカサブランカ級の設計図を利用し最大速力25ノットと旧式戦艦部隊より早く機動艦隊としてぎりぎり運用できる空母建造を命じていたのであった

チャーチル「ならばそれと艦載機を回してくれそれに戦艦もダメリーランドやカリフォルニアは速度的に太平洋艦隊では使いにくいだろう、大西洋に回してくれ聞いた話だとアイオワ級戦艦が2隻戦列入り間近なのだろ、なら問題ないはずだ」

トルーマン「可能かねキング長官」

キング「可能です」

チャーチル「ならば陸軍はどの程度回してくれるのかね」

トルーマン「だせて歩兵12個師団それ以上は無理だねアラスカ、

西海岸両方を守らんといかんのでな」

チャーチル「まあいいか、では今日はこれで」

会談を終えるとチャーチルはそのままカナダに向かいカナダ軍の派兵を依頼するとすぐさまブリテン島に帰還した

キング「大統領、よかったですか、太平洋から艦隊と陸軍を引き抜いて」

トルーマン「……………キング長官ブリテン島に艦隊の護衛を受けた陸軍部隊が着くの何日かかるかね？」

キング「大体艦隊だけで15日程度かと陸軍部隊の準備を考えれば到着は来月末から再来月の頭かと」

トルーマン「その頃にはロンドンには愚か王室や政府機能疎開予定地のインヴァネスも危うかろう」

キング「それはどういう」

トルーマン「四季島の外交官が枢軸は来月予定の上陸作戦を繰り上げて今月中に上陸すると言ってきた、昨日の爆撃はヒトラーの逆鱗に触れたらしい」

キング「それは、あの御仁に教えなくてよかったです」

トルーマン「教えたところで何故知っていると追求されるだけだ、それにブリテン島防衛と連合国の勝利が我々の国益に繋がるわけではない、戦争で儲かるのは勝てる戦だけだ、負け戦では国の権益を失う、それどころかこの戦争で合衆国はアラスカや太平洋地域を失うのだ、我々があの御仁に上陸作戦のことを教えてみる、四季島は我々を糾弾するだろうそうなればマーシャル沖以降の協力信頼体制が破綻しかねん、それは西海岸どころか東海岸までもが敵の上陸を受ける事になる。そうなれば、合衆国は2度と復活出来んだろう」

キング「はい」

トルーマン「叶う事なら、ブリテン島の早期陥落を祈りたいものだ」

トルーマンの願いはある意味で叶う事となる1943年8月15

日史実ならば何の出来事もない普通の1日であったがこの歴史では
違いこの日の日の出前にブリテン島沖で巨砲が唸った

8月15日深夜午前3時15分ブリテン島ドッドマン岬隣接海岸
線トーチカ

ブリテン大尉「ふう伍長異常はあるかね」

ブリテン伍長「ありません、平和なものです」

ブリテン大尉「そうか、まあ茶でも飲もう、実は良い茶葉を裏で手
に入れてね」

ブリテン伍長「それは素晴らしい軍曹も飲みますか？」

ブリテン大尉「軍曹？どうした」

ブリテン軍曹「あ、あ、アレを」

軍曹が指さした先を双眼鏡で覗いた瞬間彼らは恐怖に陥ったそこ
には四季島皇国海軍遣欧艦隊として欧州にいる鈴島中将率いる上陸
支援艦隊と柴田中将率いる第1海兵上陸戦闘団や第7軍所属の歩兵
2個師団合わせ50000人近くが上陸しようとしていたのだった

ブリテン大尉「警報と司令部に通報」

ブリテン伍長『こちらドッドマン岬監視所敵の大軍が襲来援軍を』

司令部『大軍だとどのくらいだ』

ブリテン伍長『暗くてわからんが200隻はいる戦艦や空母も最低
10は居るぞ』

暗闇の中四季島艦隊の数は実数より多く数えられ恐怖がブリテン
島南部防衛司令部を襲いブリテン島南部に展開する多数の部隊が
ドッドマン岬防衛に向かっていった。だがその数時間後にハンバー
サイドの海岸線にドイツ、イタロス、ヴィシー・ガレア連合艦隊に護
衛された上陸軍4波合わせ270000人が上陸守備隊を撃滅して
いった、また南部や北海上空では連合枢軸両国のジェット戦闘機隊が
世界初のジェット機同士の空戦を開始南部では連合のミーティアを
赤子の手をひねるが如く装甲軽空母に改装された千歳、千代田の疾風
に殲滅されていった。ミーティア隊は音速が飛ぶことのできる疾風

に圧倒され空対空噴進誘導弾により全滅させられた

枢軸軍上陸の報告は朝5時には第一報がチャーチルの下に届き8時にはある程度の規模が判明していた、

ロンドン首相官邸

チャーチル「約300000か」

陸軍将官「はい」

チャーチル「王室をインヴァネスに疎開させてくれ、それとイングランド南部が落ちたら王室と残存艦隊を纏めてカナダに亡命するよ
うに、全海陸空軍に通達全力で抵抗せよ、奴らをこれ以上進ませるな」
「「はっ」」

チャーチルはそう厳命するとレイキャビクに展開するリバティリア大西洋艦隊や陸軍に來援を要請敵を食い止めようとしていたがチャーチルの要望は叶わなかった駐アイルランドリバティリア軍も枢軸軍との全面对決に入っていた

ドカーン

ダダダダダダダダダダダダ

ヒューーウ

ドカドカドカドカーン

ジョージ『マーク何機目だ?』

マーク『9機目だジョージそっちは?』

ジョージ『勝ったなさっきので11機だ帰ったら奢れよ』

マーク『帰るまでには3機落とせば俺の勝ちだ』

ジョージ『やってみろよ』

マーク『500上方に敵編隊40はいる』

ジョージ『行くぞタリホー』

12時丁度第3機動艦隊旗艦空母白鳳艦橋

士官「長官入られます」

艦長「敬礼」

角田「そのままでもいい状況は?」

参謀長「はい、上陸した柴田中将指揮下の第1海兵上陸戦闘団はドッドマン岬を制圧そこを起点に第7軍及び第2第3海兵上陸戦闘団の揚陸を待ち西のトルーロー東のセントオーステンに向け進撃準備中ですがセントオーステンに頑強な防衛線を貼つたらしく支援艦隊に艦対地噴進弾による支援を要請してるようです」

角田「艦対地噴進弾、例の3隻に積み込んだあれか」

参謀長「はい、鹵獲したりバティリア重巡ボストンと軽巡吉野、十勝この3隻に搭載されています」

角田「垂直式誘導噴進弾発射機構有効射程100kmか、もはや数年前とは射程距離に天と地ほどの差があるな、他国の何十年先を行っているのやら」

参謀長「これも中津商会技術局の開発だとか」

参謀「流石中津商会だな、航空隊の新型も中津商会の機体だし軍や民間どちらでも最高の物を求めるなら中津と言うだけありますな」

副長「標語は下着の布から機動艦隊まで、だそうですよ。それにこの艦隊成立予算や艦艇の建造には中津社長からの資金援助と資材人材の提供があつたらしいですよ」

角田「1企業に軍政を握っているのはなんとも言えんな」

艦長「ですが海保も航路防衛総隊も中津社長からの資金援助で作られていますからな、それに中津社長な警備会社には除隊者や戦傷者が多数雇われていますからな軍も大きく出れませんよ、それに陛下のご意向があつたらしくて宮様らと何度も会合を行っているらしいですよ」

角田「そらはそうだがな」

参謀「まあいいじゃないやありませんか以前のようによ上演習じゃなく実際に艦隊を動かしての演習や練習用の機体が壊れるまで好きなだけ航空機を動かして落としてもいいなんて言われるのは中津社長の愛国奉納のおかげじゃないですか」

参謀長「確かに去年だけでも3000機の練習機と5000機の1級戦機が奉納されたからな」

角田「まあな、あの企業がなければまともに練習すらできなかったからな」

通信士「長官、スカパ・フローからブリテン艦隊出撃アイルランド方面に脱出を図っています」

角田「さて無駄話はこのままでだ進路を北に向ける第8艦隊と共にブリテン艦隊を撃滅するぞ」

「了解」

同時刻ブリテン島南部沖戦艦薩摩（旧戦艦ミズーリ）艦橋

鈴島「3隻とも準備出来ているな？」

参謀長「はい」

鈴島「撃ち方はじめ」

参謀長「了解」

ババババババ

この時重巡飯豊（旧重巡ボストン）軽巡吉野、十勝の3隻から艦対地誘導噴進弾が多数発射された

この3隻は兵装の一部を取り外しVLS（垂直発射管）を搭載した世界初の艦艇群となっていた飯豊は2番砲と後部3番砲の後ろの両用砲を取り外し旧2番砲跡に3X8の24基の発射管を後部に1X4の4基の発射管を装備していた阿賀野型の2隻吉野、十勝の2隻は水上機関連の施設を取り外し8X4の発射管を装備していたこの3隻で1射で発の誘導噴進弾を投射できた

発射された誘導噴進弾は一路セントオーステン周辺に展開するリバティリア第13歩兵師団ブリテン第9歩兵師団ブリテン第3機甲師団に20射1840発が降り注いだ1発辺り500kg爆弾に相当する物が大量に降り注いだため3個師団の残存戦力は歩兵7500名戦車79両にまで減少したそこに第28歩兵師団及び第7戦車師団が襲いかかる

ドカーン

ブリテン戦車兵1『3号車がやられた』

ブリテン戦車中隊長『中隊全車後退空軍の支援をま』

パス

ドカーン

ブリテン戦車兵2 『中隊長車被弾爆発全車後退』

第7戦車師団の戦車は全て新型の3式中戦車であった中戦車と言うが重量54トン前面装甲120mmとドイツVI号戦車ティーゲルIより分厚い装甲と65口径100mm砲を搭載する世界最強の戦車と言えた

特に第1連隊第3中隊の長浜中尉指揮する3式はチャーチル歩兵戦車5両クロムウェル巡航戦車2両シャーマン中戦車7両を単騎で撃破するなど連合軍の士気を下げ枢軸軍の士気を多いに高めたこの功績により彼はヒトラーから騎士鉄十字勲章を授与されるなどの褒章を得ていた

8月25日ブリテン首都ロンドン陥落守備についていたブリテン第2歩兵師団及び近衛師団さらにホームガード70000人余りは最後まで頑強に抵抗を続けたが重包囲下に置かれ武器弾薬食料医薬品の欠乏に陥りついに司令官モントゴメリーは降伏を決意これによりブリテン島南部は枢軸の手に落ちた。

第33話

1943年8月21日スカパ・フロー泊地

七夕作戦により本国艦隊司令部と多数の艦艇を喪ったブリテン海軍はフレーザー大将の前任たるジョン・クローニン・トーヴィー大将を就任させたトーヴィー大将は将旗を戦艦ハウに置くと艦隊の再建を行った当時のブリテン本国艦隊の編成は戦艦ハウ、キング・ジョージV世、ネルソン、ロドニー、巡洋戦艦レナウン、正規イラストラリアス、ヴィクトリアス、フォーミダブル、インドミタブル護衛空母フューリアス、アーガス、ボーグ級4隻改カサブランカ級3隻重巡洋艦2隻軽巡洋艦5隻駆逐艦27隻潜水艦21隻フリゲート艦21隻コルベット38隻魚雷艇多数が書類上存在していたが戦艦ロドニーは四季島軍欧州方面軍所属の陸軍航空隊第15爆撃航空戦隊とその護衛部隊のブリテン本土空襲作戦により2、3番砲の旋回機能を喪っているため戦力にはなり得なかったそれ以外にも七夕作戦にて正規空母インドミタブル以外の正規空母は大損害を受け戦力になりえずその他同作戦において帰還した駆逐艦3隻も戦力にはならなかった、トーヴィー大将はリバティリアから回された改カサブランカ級航空母艦（艦載機21機速力25ノット）3隻の扱いにも困っていたこの3隻はまとめて使って四季島軍の雲龍型に匹敵するかそれをやや上回る艦載機搭載性能を持つが既存の護衛空母と一緒に使えず快速自慢の戦艦隊とも行動できないため3隻にネルソンを加えた艦隊で運用する他なかったとはいえブリテン本国艦隊に取ってどうにか使える空母なのは確かであった（残りの護衛空母は低速過ぎて使いにくい）

トーヴィー「戦艦巡洋戦艦3隻に正規空母1隻重巡洋艦1隻軽巡洋艦3隻駆逐艦18隻か栄えあるロイヤル・ネイビーも落ちたものだな。政府の無能共がなぜ四季島を裏切ったのだ裏切らねば東南アジアは守りきれたそれどころか精強な四季島艦隊の来援すらあり得たのに」

参謀長「閣下失礼します」

トーヴィー「どうした？」

参謀長「出撃命令です」

トローヴィー「出撃？出撃だと！」ドン

参謀長「はい」

トローヴィー「この状況で何処に出撃しろというのだ」

参謀長「北海に進出しハンバーサイドの枢軸軍補給線を絶て、と」

トローヴィー「無茶な、敵は我が艦隊の倍はいるのだぞ四季島の機動艦隊も北上してきている、リバティリア艦隊はどうしたあちらも来援するのだろうか」

参謀長「その、誠に言い難いことですがリバティリア艦隊は太平洋艦隊からの来援艦隊を待ち反撃に移ると」

トローヴィー「嘘だな、最初から出る気など奴等にはない。太平洋艦隊を1隻でも引き抜いてみよすぐに西海岸に四季島の大艦隊が押し寄せる。」

参謀長「ではこれは」

トローヴィー「言い訳、いや方便か。」

トローヴィー大將は目を瞑り幾分か、唸ると参謀長にこう告げた

トローヴィー「出撃する。しかし25歳未満のものまたそれ以上でも親の生きており兄弟の居ないものまだ子の幼いものは海戦時指揮に、影響があるためにドックや栈橋に係留中の艦に移動とする出撃は8月31日午前0時丁度目標ハンバーサイド沖の敵輸送船団及びハンバーサイドの補給物資集積所。よいな」

参謀長「了解」

トローヴィー大將は死を覚悟し出撃を命令した

8月31日戦艦巡洋戦艦3隻正規空母1隻重巡洋艦1隻軽巡洋艦3隻駆逐艦18隻艦載機48機（戦闘機25雷撃機13）で編成された本国艦隊本隊が出撃同時刻改カサブランカ級空母3隻フリゲート艦5隻艦載機63機（戦闘機36爆撃機18雷撃機9）の支援隊が出撃。出撃を確認したドイツ海軍司令部は角田中将率いる第3機動艦隊に迎撃を要請した。要請書を見た角田は進路を南に向けたが距離的な問題からハンバーサイド攻撃の完全な阻止は不可能とドイツ海軍司令部に通達した。

9月3日ブリテン本国艦隊主力部隊その後方15 kmに支援隊が展開両部隊は戦闘機、雷撃機に対地ロケット弾を搭載し111機全力出撃上空援護に主力にはミーティア25機スピットファイア17機支援隊にはハリケーン18機が展開した。

当時ハンバーサイド防空にはヴィシー・ガレア空軍のMB・155c1戦闘機36機とD・520戦闘機62機が当たっていたが連日の連合空軍の空襲とそれの阻止行動により即座に動ける機体は27機にまで減少していた。その事もあり来襲した100機を超えるブリテン機との交戦で全機撃墜されるも21機を対空砲と共同で撃墜したしかしハンバーサイドに揚陸された物資1500トン戦車17両車両23両兵員57名砲19門輸送船1隻が失われた。帰還の途に着きつつ攻撃成功に喜ぶ攻撃隊にキング・ジョージV世から空襲を受けているとの通信が入ったことで自体は一変した

同時刻ブリテン本国艦隊上空にはハンバーサイド焼かれたことに怒り感じた第3機動艦隊の空襲を受けていた

キング・ジョージV世艦橋

レーダー手「敵機左舷後方より接近数」

トローヴィー「対空戦闘用意、上空の直掩隊と攻撃隊にも伝えよ」

「対空戦闘用意」

「戦闘用意急げ」

この時襲来した攻撃機は疾風24機零戦53型72機流星72機であった、ブリテン空軍はその悪魔の集団を正面から迎え撃ったが

ブリテンパイロット1「は、速い、追いつけない」

ブリテンパイロット2『お、追われてる誰か助けてくれ』

ブリテンパイロット3「こ、これが太平洋でリバティリア機動艦隊を叩き潰した実力なのか」

確かにミーティアやハリケーン、スピットファイアは優秀な戦闘機と言えるだがそれに襲いかかった疾風はそれらを凌駕する悪魔のよきな機体なのだ

キング・ジョージV世艦橋

艦長「閣下、敵攻撃隊戦闘機隊を突破しました」

トローヴィー「突破されたか、対空砲撃ち方始め、なんとしても生き残るぞ」

トローヴィーの檄に答えるように各艦の対空砲が火を吹いた

高橋「甘い、こんな温い対空砲火で落とされるかよ」

四季島パイロット1「喰らえ」

ドカーン

四季島パイロット2「もう1発だ」

ドカーン

重巡洋艦ロンドン艦橋

艦長「ダメーヅリポート」

副長「左舷前部と後部に2発命中後部高角砲大破」

観測員「敵雷撃機近づく」

艦長「回避取舵10急げ」

操舵手「取舵10いそげー」

ドカーン

艦長「1発腹に喰らったか」

伝声管越しに機関室から報告が入る

機関帳「機関室浸水」

艦長「なんと」

観測員「敵機更に近づく」

シユローウ ドカドカドカドカーン

艦長「ダメーヅリポート」

副長「艦長お怪我を」

艦長「私の事はいいとにかく被害を確認しろ」

ダメコン班長「左舷全域に多数のロケット弾命中左舷機関砲群壊滅

2番高角砲を除き左舷高角砲は射撃不能ダメコン要員も多数が死傷

艦要員の死傷者集計不能です」

艦長「総員退艦だ急げこの艦を放棄する」

副長「り、了解」

「総員退艦、総員退艦」

キング・ジョージV世艦橋

トローヴィー「ロンドンが退艦だと」

参謀「はい」

トローヴィー「そうか、生き残っている艦は何隻いる？」

参謀長「本艦含め12隻です」

トローヴィー「そうか」

観測員「敵機引き上げます」

トローヴィー「投げ出された者の救助を急げ、それと支援隊の被害は？」

参謀長「確認できているのは空母1フリゲート艦2隻が生存と」

トローヴィー「これで終わりか、栄えあるロイヤル・ネイビーも、全艦要救助者の収容次第反転最大船速でスカパ・フローに退避せよ」

参謀長「閣下、帰還中の攻撃隊は？」

トローヴィー「インドミタブルは着艦可能か？」

参謀長「はい」

トローヴィー「戦闘機隊は空母に着艦爆撃機、攻撃機は付近の空軍基地に帰還せよ」

参謀長「了解」

トローヴィーの命令に従い戦闘機54機がインドミタブルと護衛空母に帰還したが戦闘機4機は各空軍基地に帰還する攻撃隊護衛の為に帰還しなかった。それを批判する参謀たちをトローヴィーは諫めた

そして日付は変わり9月4日午前2時遣欧艦隊に所属する潜水艦呂12潜が北進するブリテン艦隊を捕捉新型の3式誘導酸素魚雷4本を射出内3本が誘導された

ドカーローン

キング・ジョージV世艦橋

トーヴィー「何事だ」

艦長「状況確認急げ」

艦橋要員「あ、チャージャーが」

観測員「チャージャーが殺られたのか」

参謀「雷撃か！」

トーヴィー「対潜警戒を厳にしろ」

参謀長「は、はい」

バコンバコンバコンバコン

ドカーンドカーンドカーンドカーン

各艦が対潜爆雷を海底にばら撒く中呂12潜は退避雷撃を受けた護衛空母チャージャーはその後すぐ海中に没した、その結果戦闘機9機を喪った。

日が昇り10時角田率い第3機動艦隊はブリテン艦隊をロスト、この報告を受けた角田は仕方無いとしながらも報復としてブリテン島各地を襲撃多数の航空機、車両を破壊兵員を殺傷した。

第34話

1943年9月10日インヴァネスにてウインストンチャーチルは戦況の報告を受けていたがその報告は悲惨であった。すでにブリテン島南部の制空権は奪われ中部もマンチェスター一帯は既に枢軸空軍の支配下に置かれ空襲は激化特に8月30日には空母アーガスとボーグ級2隻等の艦艇を撃沈させられた。地上においても8月29日に敵中に孤立したバーミンガムが陥落ロンドンより進撃してきた四季島遣欧派遣軍の第28歩兵師団によりオックスフォードが陥落そのまま北上し9月1日にバーミンガムにてドイツ中心の枢軸上陸軍と合流した。この時点でブリテン島防衛を不可能と見たチャーチルは王室をカナダに疎開させるべく残存艦隊を掻き集めたがブリテン島沖海戦により多数の艦隊を失い稼働可能艦艇は戦艦巡洋戦艦3隻正規空母1隻重巡洋艦1隻軽巡洋艦3隻駆逐艦16隻フリゲート艦9隻コルベット12隻その他30隻合計75隻開戦時400隻以上の大艦隊を誇ったロイヤルネイビーの現状であった

チャーチルはリバティリア大西洋艦隊の来援をトルーマンに依頼したがトルーマンの回答は大西洋艦隊にその余力は無い。その一言であった、しかし食い下がるチャーチルに根負けしたトルーマン大西洋艦隊司令部にブリテン島救援を命令司令官のトーマス・カッシン・キンケイドはマーク・ミッチャー中将に改カサブランカ級9隻戦艦ウエストヴァージニア、ミシシッピ航空巡洋艦マイアミ軽巡洋艦サンデイエゴ、サンファン、ナツシユビル、ホノルル、フレッチャー級駆逐艦12隻バツクレイ級護衛駆逐艦17隻で編成した第21任務部隊を与えブリテン島救援と王室脱出支援に向かわせた

艦隊は9月15日にレイキャビクより出港同時にキンケイドは陽動としては空母エンタープライズ、サラトガ、改カサブランカ級6隻大型巡洋艦アラスカ、グアム重巡洋艦ボルチモア軽巡洋艦コロンビア、デンヴァー、オークランド、リマ、フレッチャー級駆逐艦19隻編成された第22任務部隊をアルフレッド・ユージン・モントゴメリー中将に預け陽動作戦を行わせカサブランカ級2隻重巡洋艦ウイ

チタ、グリーンブス級駆逐艦14隻空荷の輸送船16隻をあたかもブリテン島への救援だと思わせる行動を取らせさらなる陽動とした、またいくつかの潜水戦隊も送り込み伏兵とした

この行動に迷った枢軸各国海軍は輸送船団には協議の結果Uボート部隊をエンタープライズを中核とした部隊にはドイツ中核の3国連合艦隊をそして第3機動艦隊はミッチャー率いる第21任務部隊を攻撃する事となった、この判断に異議を唱える者も居たが表向きはブリテン艦隊との連戦で疲労した四季島艦隊に休養として楽な任務につけるとされていた事もあり反論者も下がらざるを得なかった。しかし真の狙いは四季島艦隊に比べ活躍の目立たぬ自国艦隊を活躍させるためであった

第21任務部隊編成

旗艦戦艦ウエストヴァージニア

戦艦ミシシッピ

改カサブランカ級9隻

航空巡洋艦マイアミ

軽巡洋艦サンディエゴ、サンフラン、ナッシュビル、ホノルル

フレッチャー級駆逐艦12隻

バックレイ級護衛駆逐艦17隻

艦上機189機

水上機23機

第22任務部隊編成

旗艦空母エンタープライズ

空母サラトガ

改カサブランカ級4隻

大型巡洋艦アラスカ、グアム

重巡洋艦ボルチモア

軽巡洋艦コロンビア、デンヴァー、オークランド、リマ、

フレッチャー級駆逐艦19隻

艦上機266機

水上機28機

輸送隊

旗艦重巡洋艦ウイチタ

カサブランカ級空母2隻

グリーブス級14隻

輸送船16隻

艦載機56機

水上機4機

潜水戦隊

旗艦潜水艦アーチャーフィッシュ

ガトー級潜水艦19隻

3 国連合艦隊編成

ドイツ艦隊

旗艦戦艦ビスマルク

戦艦テイルピッツ

巡洋戦艦シャルンホルスト、グナウゼナウ

空母グラーフ・ツェッペリン、ペーターシュユトラッサー、ライン

重巡洋艦ザクセン、プリンツ・オイゲン

軽巡洋艦ケーニヒスベルク、エムデン

駆逐艦15隻

Uボート29隻

艦載機152機

水上機17機

イタロス艦隊

旗艦戦艦フランチェスコ・カラッチョロ

戦艦クリストーフオロ・コロンボ、ヴィットリオ・ヴェネト、ロー

マ

空母アキラ、モンテ・カッシーノ

重巡洋艦サヴォイア、ザラ、ポーラ

軽巡洋艦ルイージ・デイ・サヴォイア・ドウカ・デツリ・アブルツ

ツイ

駆逐艦15隻

艦載機100機

水上機23機

ヴィシーガレア艦隊

旗艦戦艦リシユリユ

戦艦ジャン・パール、リオン、リール

空母ノルマンディー、フランドル

重巡洋艦アルジェリー、コルベール

軽巡洋艦マルセイエーズ、ジャン・ド・ヴィエンヌ

駆逐艦15隻

艦載機104機

水上機24機

3国艦隊合計75隻Uボート29隻

3国連合艦隊は中央にドイツ艦隊左翼にイタロス艦隊右翼にヴィシーガレア艦隊を配置しそれぞれが陣形を組んでいた。この3個艦隊に連携するといった考え方は無い各々友軍艦隊は味方でありそして競争相手であった

最初に動いたのは角田提督率いる第3機動艦隊であったミツチャー率いる第21任務部隊を確認すると本国からの秘匿命令書に従い音通を開始、音通を感知したミツチャーもそれを大西洋艦隊司令部に通達。司令官のキンケイドはミツチャーに西進を指示指示を受けたミツチャーが西進を開始すると角田も西進を開始、同時に3国連合艦隊に追撃して西進する事を通達した、通達を受けた3国連合艦隊と枢軸海軍司令部は角田艦隊に追撃を了承するとともにブリテン艦隊の1部が出撃した可能性がある事を報告した

角田はその報告を受けると艦隊速度を落とし23ノットで航行するように伝え偵察機を増やすように指示を出した、そうこの海戦は出来レースだったのだその事を知っているのは艦隊を率いる角田と本国でこの作戦を立てた中津そして伏見宮、聯合艦隊司令長官の山本五十六、リバティリア大統領のトルーマン、大西洋艦隊司令官キンケイド、そしてミツチャーだけであった、どうにかしてリバティリアとの講話を纏めたい中津は枢軸の海軍力を削ぎ講話の機運を高める活動

の一環としてこの作戦を立案していた。そのため角田とミツチャーは双方が逃げ追いを繰り返した

その頃イタロス艦隊はアーチャーフィッシュの雷撃により空母モンテ・カツシーノが大破戦艦ローマが戦列を離脱駆逐艦2隻が撃沈されていた

同じ頃ドイツ艦隊は第22任務部隊の総力を上げた猛空襲を受けていた

旗艦戦艦ビスマルク艦橋

マイゼン「被害報告」

艦長「グラーフ・ツエツペリン被弾エレベーター損傷」

副長「シャルンホルストからも被害報告が、3番砲塔使用不能と」

マイゼン「他の被害は」

幕僚「重巡洋艦プリンツ・オイゲン被弾火災発生消火中との事他にも軽巡洋艦エムデン駆逐艦3隻が損傷」

マイゼン「航空隊の被害はどうなってる」

航空参謀「迎撃のメツサーシユミット27機フォッケウルフ12機が撃墜されました」

マイゼン「何ということだ、これでは攻撃隊に護衛機が付けられず、出せる攻撃隊の総数は？」

航空参謀「戦闘機12機雷撃機27機爆撃機30機です」

マイゼン「手ひどくやられたな」

航空参謀「特にグラーフ・ツエツペリンの被害が痛いですエレベーター上とその周りの雷撃機5機と爆撃機2機が破壊されています」

マイゼン「それもそうだがフォッケウルフの被害もやはり護衛戦闘機を防空戦に出さぬべきだな艦隊全体で36機しかおらんのだから」

ドイツ機動艦隊の弱点それはメツサーシユミットbf109を搭載していることであつたメツサーシユミットは上昇力ではフォッケウルフを凌いでいたそのためメツサーシユミットは艦隊防空、フォッケウルフは増槽を取り付け攻撃隊護衛に専任させた結果艦隊防空は貧弱になり攻撃隊護衛も貧弱になるといふ事が発生した、以前より戦

闘機はフォックェウルフに統一する動きがあつたが政治の関係上メツサーシユミツトを手放せない状態が起きていた、本来ならMe262がより性能が高く航続距離も長い四季島製の炎龍を導入しその分262や163の調達数を減らし将来的には疾風を超える機体を配備する事を決定しているためメツサーシユミツト社としては少しでも儲けるために海軍売り込みを強めていた。その為海軍は航続距離の短いこの機体を使わねばならず現場苦勞していた

マイゼン「航空戦はだめだ空母及び損傷艦は離脱しかるのち全艦前進砲戦でケリをつける」

参謀長「了解」

航海参謀「針路を再検討します」

マイゼン「急げよ」

イタロス艦隊旗艦フランチェスコ・カラツチョロ艦橋

カンピオーニ「ドイツ艦隊が空襲されたか」

参謀長「はい」

カンピオーニ「どうしたもんかな」

通信士「閣下、偵察機がブリテン艦隊を捕捉」

参謀長「規模は」

通信士「フリゲート艦3コルベット5輸送船27ブリテン島方面からリバティリア方面に航行中」

カンピオーニ「よし勝てる相手から倒す。その艦隊に攻撃機隊を出せ1隻残らず片付けろ、それと艦隊も船団攻撃に移る、リバティリア機動艦隊とサシでやり合えるものか」

参謀長「よ、よろしいのですか？」

カンピオーニ「だいたいリバティリア機動艦隊はカクタ機動艦隊に任せればよかったんだ、それをメンツの為に無駄な血を流せるかよ、俺たちイタロス海軍は無駄な血は流さないのが流儀だ、敵船団を見つけても降伏勧告を先にしろよ、弾だつてただじゃないからな」

見つかったブリテン船団は多数の難民を乗せた船団であった船団を指揮するウォーカー大佐は参謀らと話し合ったがここでは喧嘩となつた

船団参謀「とにかく船団を守らねば」

艦隊参謀「ならば船団を先に行かせ護衛艦隊で対処すべきだろう」

船団参謀「避難船団を丸裸で出せと？ナチのUボートに食われるぞ」

ウォーカー「降伏もやむなしか」

艦隊参謀「それは」

船団参謀「閣下ナチに避難民を差し出す気ですか」

ウォーカー「敵がナチやカエル食いなら全力で交戦するが四季島やイタロスなら無為なことはせんだろう、敵機の識別は何だった？」

観測員「イタロスです」

ウォーカー「イタロスなら無為なことはせんだろう戦闘旗降ろせ白旗掲げ」

フランチェスコ・カラツチヨロ艦橋

カンピオーニ「敵が白旗を掲げているだと」

通信参謀「はい」

カンピオーニ「そうか、降伏を受け入れると伝えろ、それと船団の中身と乗員の名簿を出させろ」

通信参謀「了解」

届けられた名簿に一通り目を通したカンピオーニは迷った

カンピオーニ「難民の避難船団かそれも女子供がこんなに沢山、これ食料とか足りてないぞどうする。解放してもリバテイアにはたどり着けんぞ着けたとしても大量の餓死者が出るそれはイタロス海軍軍人としては許せん、しかし拿捕してもなこれをどこに収容するか問題だしな、最悪バチカンに投げるか？」

参謀長「閣下避難民の代表がお会いしたいと」

カンピオーニ「なんでだ？」

参謀長「今後どうなるのかを聞きたいとの事です」

カンピオーニ「参謀長どうするべきかね？この10000名余りの
女子供達を」

参謀長「本国に相談してはいかがかと」

カンピオーニ「うーん、本国に相談か、司令部にすればいいのか？」

参謀長「だと思いますが」

カンピオーニ「まあなんとかするか、最悪イタロス国旗掲げて南リ
バティリア諸国に送りつけようそっからは知らん」

参謀長「で避難民の代表とお会いになりますか？」

カンピオーニ「俺は今から本国に相談してくるから参謀長相手を頼
む」

第35話

1943年9月16日ブリテン島沖大西洋

ヴィシー・ガレア艦隊旗艦戦艦リシユリユール艦橋

通信士「敵艦隊発見の報無し」

参謀長「提督イタロス艦隊がブリテン島からの脱出船団を拿捕したと」

エミール・アンドレ・アンリ・デュプラ「そうか、ふむ、未だ敵機動艦隊は発見できていないのだな」

参謀長「はい」

デュプラ「ふむ、索敵機を増やせ雷撃機も最低限を残して索敵に回せ」

参謀長「よろしいのですか？」

デュプラ「ナチのように先制攻撃をされるくらいなら万全の索敵をするべきだ」

14時過ぎ残っていた水上機8機と雷撃機16機が第2索敵隊として発進索敵にあたるがリバテリリア機動艦隊は捕捉できなかった

そして16時過ぎ展開していたUボートU51が機動艦隊発見の報を発信一番近いのはヴィシー・ガレア艦隊であった

航空参謀「閣下、攻撃隊を出しましょう今ならまだ間に合います」

デュプラ「うむ、だがな」

参謀長「提督、今出せば帰還は完全に日が暮れております我が艦隊の練度では着艦事故を起こしかねないかと」

デュプラ「ぬう、だが」

通信士「て、敵機来襲」

参謀長「なんだと、」

デュプラ「対空戦闘用意戦闘機隊発艦急げ」

すぐさま即応部隊モラーヌD・790戦闘機24機が展開してすぐマックス少佐率いるリバテリリア攻撃隊87機が襲来

ガレアパイロット1『行かせるなよ各機掛かれ』

ガレアパイロット2「喰らえ」
ダダダダダダダ

マックス「そんなへなちよこ弾改良されたヘルキャットに効くかよ」

F6F5Tha (Type heavy armor)

重装甲型ヘルキャットと呼ばれるこの機体は四季島の13・2mm機銃の射撃に300mで耐えられるように装甲を厚く設計されていた。これに対して7・5mm機銃装備のモラーヌで撃墜するのは至難の業であった

リバテイリアパイロット1「喰らえ」

カチ、ヒューーウドカーン

ガレアパイロット3『ふ、フランドルが』

ガレアパイロット2『くそ奴ら生かして返さんぞ』

リシユリユー艦橋

航空参謀「いかん」

デュプラ「どうした？航空参謀」

航空参謀「パイロット達が熱くなっています空で冷静さを欠けては勝てなくなります」

デュプラ「まずいな、残りのモラーヌはまだ上がらないのか」

通信士「フランドルより入電『我発艦不能』と」

航空参謀「ノルマンディーの12機しか上げれないのか」

デュプラ「それでもよい急げ」

観測員「左舷より敵雷撃機」

デュプラ「何!？」

艦長「対空迎撃、取舵30急げ」

ドンドンドン

ダダダダダダダダダダダダダ

ベン「生温い射撃だな四季島艦隊を見習えよ、各機狙いはあの無傷の空母だ」

『『了解』』』

ベン「コースそのまま投下」

バス

ベン「これでどうだ」

ドカーン

ベン「全ては当たらなかったか」

機銃手「水柱3本確認」

ベン「よろしい『全機ずらかるぞ』」

リシユリユー艦橋

副長「空母ノルマンディー左舷に3本被雷」

幕僚「空母フランドル火災発生」

観測員「戦艦リール艦後部に火災発生」

通信士「重巡洋艦コルベルより通信『我被雷ニヨリ機関浸水出セル速力21ノットナリ』と」

艦長「閣下本艦の損害は高角砲2基と機銃の1部破壊され主測器機も損傷しております」

デュプラ「そうか、参謀長沈んだ艦は？」

参謀長「今のところはありますがノルマンディーは厳しいかと」

デュプラ「してやられたな日暮れ時に攻撃とは、無念だが艦隊は後退する」

砲術参謀「ですが」

デュプラ「このリシユリユーは半身不随に等しいそれにジャン・パールとリールも損傷している、だから反対だったのだカクタ機動艦隊を西進させるのを」

通信士「閣下ドイツ艦隊から被害はどうかと」

デュプラ「戦艦3隻空母2隻損傷後退すると伝えろ」

参謀長「閣下それは」

デュプラ「戦前より国力を落としたのだ大型艦の喪失は避けねばならん。もし失えば再建は容易ではないからな」

参謀長「了解」

19時過ぎヴィシー・ガレア艦隊は後退を開始2個艦隊に損害を与

えた第22任務部隊はレイキャビックに後退を開始これは3国連合艦隊の損害を重く見た四季島遣欧艦隊司令部が第8艦隊に北上を命令これにより第8艦隊はもしもの残敵掃討の為に北欧より出撃していた秩父型大型重巡洋艦秩父を中核とした北欧諸国連合艦隊(秩父型3阿賀野型2平瀬型4(阿賀野型廉価版)朝風型12(夕雲型廉価版)その他各国駆逐艦9)と合流、北上を開始したことに関係していた

第8艦隊旗艦越中艦橋

三川「敵はレイキャビックに下がったか」

参謀長「はい、いかがなさいますか」

三川「こちらも下がるぞ流石に我が艦隊と北欧連合艦隊だけでレイキャビック攻撃は無謀だ秩父に打電反転後退する」

翌17日リバティリア大西洋艦隊司令部はコバルト作戦の中止を宣言レイキャビック近郊の艦隊はレイキャビックに引きこもり遠隔地の艦隊は付近の大規模拠点に集結し持久戦の構えを見せた

頼りにならぬリバティリア艦隊に怒りを覚えたチャーチルは王室脱出を決意陸軍がリバプール、マンチェスター、ハルの線で守りを固めている中潜水艦タンティヴィ以下7隻に分乗し9月21日に出港囷として戦艦ハウ空母インドミタブル軽巡洋艦フィジー駆逐艦6隻快速客船3隻で編成された囷艦隊が出港一路レイキャビックを目指した、そしてその艦隊の後方にリバティリアよりレンドリースされたクレムソン級駆逐艦14隻とリアンダー級軽巡洋艦2隻MACシップ、レドニアス号が展開していた

これに対してドイツ、イタロス、ヴィシー・ガレアの3国は先の北海海戦損害により手を出せなかった。それにより3国は四季島遣欧艦隊司令部に艦隊攻撃を要請。

要請を受けた遣欧艦隊司令部は本国から増援として派遣された山口中将指揮する第2機動艦隊を攻撃に向かわせた

このとき第2機動艦隊の翔鶴型空母4隻は噴式戦闘機搭載のため改修工事を受けた改翔鶴型空母になっていたその結果排水量は3

0000トンから32000トンに増加武装も8連多目的噴進弾投射基4基を装備していた

山口艦隊出撃の報告は潜水艦アーチャーフィッシュにより連合各国に報告されたブリテン側は持てる航空洋上戦力大半を投入し、艦隊を援護した

第一波として山口機動艦隊を襲ったのは掻き集められた71隻の魚雷艇であった

戦艦近江艦橋

艦長「主砲弾種3式弾敵魚雷艇共を焼き払え」

砲術長「装填よし、照準よし」

艦長「撃て」

ドンドンドン

ドカーンドカーンドカーンドカーン

新型砲弾3式弾史実3式弾を零式弾として開発した中津はそれを対地対小型艇対策に転用したものの高度30m程で起爆し半径200mに火と鉄片をバラマキ船舶や人員を殺傷することができた

戦艦重巡洋艦から撃ち出される3式弾により魚雷艇隊は壊滅

次なる手として送り込まれたのは空軍のボーフォート72機と護衛のスピットファイアMK.vb24機モスキート24機であった

これを探知した山口艦隊は迎撃のために48機の疾風と48機の零戦53型を送り込み対処した

山口機動艦隊から200kmの地点

ダダダダダダ

ブリテンパイロット1「くそ、速い」

中宮「堕ちろ」

ダダダダダダ

ブリテンパイロット2「だ、脱出する」

ドカーン

確かにスピットファイアはレシプロ戦闘機としては傑作の部類に入るしかしターボプロップ機となった零戦やジェット機の疾風と戦

うにはあらゆるものが不足していた

攻撃隊の大半が撃墜される中3機のボーフォートが防空網を突破
第2機動艦隊に迫っていた

戦艦近江艦橋

坂井「例の新兵器試してみるかね艦長」

艦長「ご要望とあらば」

坂井「ではやろう、艦長敵機に対空誘導噴進弾照準僚艦にもつたえ
い」

戦隊長坂井の号令にボーフォートに赤外線誘導が可能な3隻が照
準を合わせていた

艦長「砲術長よく狙えよ」

砲術長「了解、赤外線誘導用意よし」

砲術員「1番ハッチ開きます」

艦長「距離速度測定完了、閣下」

坂井「うむ、撃て」

その号令とともに3隻の近江型より3発の艦対空赤外線誘導噴進
弾が射出された

ブリテンパイロット3「なんだコレはつ、ついてくる機銃撃ちまく
れ」

機銃員「あ、当たれ当たれ」

ダダダダダダダ

機銃員の頑張りかパイロットの祈りが届いたのか噴進弾は2機を
撃ち落としたが1機は生き延び雷撃体制に入ろうとしていた

坂井「1機落とせなかったか対空迎撃左舷8連多目的噴進弾投射基
対空散弾装填」

艦長「高角砲照準合わせ」

砲術長「装填よし、照準合わせよろし」

坂井「撃て」

ドンドン

その瞬間近江型や他の艦艇から大量の高角砲弾噴進弾機関砲機銃
弾がたった1機のボーフォートに叩きつけられた

ブリテン島航空軍司令部には攻撃隊壊滅の報告が入っていた敵艦隊になんら被害を与えることもできず攻撃隊はスピットファイア3機を残し壊滅これは防衛線の維持に綻びを生む結果となった

障害を排除した第2機動艦隊は待ち受けるジョン・カニガン大佐率いる水雷戦隊を捕捉山口はすぐさま攻撃隊を発艦させた零戦48機流星96機が水雷戦隊目掛けて突撃

これを確認したカニガン戦隊はレドニアス号からグラディエーター4機が発艦、パイロット達は艦隊が出港する前に遺書を基地に置いてきていた最新鋭機のスピットファイアやミーティアですら対処できない四季島機動艦隊相手に型落ちのグラディエーターで対処出来ないのは彼らも知っていた、彼らはそれ承知で死地に飛び込んだのだ

アンドレイ・ハリソン『いいか、体当たりだ攻撃機に体当たりしても止めるぞ』

『『了解』』』

飯島「見えた、敵機か」『全機敵の歓迎委員会だ投げ返す花束は持つてるな?』

『持っていますよ』

『忘れてないです』

『敵の委員会はグラディエーターに見えますな』

『型落ち機で勝てるんけねえだろうに』

飯島『油断はするな阿蘇と生駒の零戦隊は攻撃隊を守れ1機も食わせるなよ』

『『了解』』』

空戦は一瞬であった士気は同等練度に劣り機体性能は比べ物にならないほど劣るブリテン飛行隊は瞬時に3機を喪失残った1機は機体を横滑りさせ続け攻撃隊に迫った

『くそ、なんだこのグラディエーターあ、当たらん』

『落ち着けよく狙え、敵は機体を横滑りさせている』

ハリソン「ええい、く、くう、か、身体が持たんか、見えた敵攻撃機」

『敵機戦闘機隊を突破』

『敵は左翼から来てる後部銃座よく狙え』

『撃て撃て』

ダダダダダダダダ

ダダダダダダダダ

ダダダダダダダダ

ハリソン「軍に仕えて30年俺より若いやつが何人さきにいきや
がった、これが最後のご奉公だな、く喰らえ」

ダダダダダダダダダダ

ドカーン

『敵機体当たり』

『誰がやられた』

『葛城の5番機、2小隊長機不時着します』

『艦隊に通報救助急がせろ』

『葛城の7番機も発動機に異常あり、爆弾を投棄帰還する』

アンドレイ・ハリソン中佐の体当たりは流星1機撃墜1機損傷零戦
4機を不時着機と帰還機の援護に割かせることに成功した、そしてハ
リソン自身も付近を航行していた潜水艦呂21潜に流星の搭乗員
共々救助その後捕虜として捕まった

思わぬ反撃を受けた攻撃隊はそのまま攻撃を敢行すべての敵艦を
撃沈その後生存者は救助のために来援した北欧連合艦隊に救助され
た

水雷戦隊を失ったブリテン艦隊はそのままレイキャビックに航行
を続行したが突如ハウが被雷その後フィジーも被雷大破したそして
レイキャビック方面監視の任務についていた第8艦隊が来襲勝てぬ
ことを悟った司令官は自らの口に拳銃を突っ込み自殺司令官を看
取った参謀長が降伏を宣言した

ブリテン王室が乗っているとされる客船に第8艦隊警備隊が踏み
込むも王室関係者は王室顧問しか居らず第8艦隊や枢軸各国は騙さ
れることとなった

そして26日ブリテン王室関係者を載せた潜水艦が角田提督率いる第3機動艦隊の襲撃を受けた各潜水艦はなんとかタンティヴィを逃がそうとしたがブリテン国王ジョージVI世は無駄な流血をせぬためと降伏を命じた

9月26日10時27分ブリテン国王ジョージVI世は装甲空母白鳳にて角田提督と面会そのまま遣欧艦隊司令部の置かれているオルレアンにその身を移された、10月5日オルレアンより世界全土にジョージVI世の平和宣言が行われた内容は抵抗を続ける連合軍兵士達に投降を促し連合各国に講話会議に出席するように促すものだった

第36話

1943年11月1日ヴィシー・ガレア領オルレアンこの日枢軸、
連合双方の代表者が集まり講和会議が執り行われていた

出席者

四季島皇国

外務官永江公武

ドイツ第三帝国

外相リッツベントロップ

イタロス王国

外相デイーノ・グランデイ

ブリテン王国

外相アンソン・イーデン

リバティリア合衆国

国務長官コーデル・ハル

各国の要求はこうなっていた

四季島皇国

満州国を国際社会が認めること

リバティリアが保有する太平洋、アラスカ領土全土割譲

インド独立

その他植民地の独立

ブリテン連邦からオーストリゼア、ニュージージーランドの脱退

ドイツ第三帝国

ブリテン島を除く占領地の全土併合もしくは枢軸側の自治政府の

承認

賠償金の支払い

イタロス王国

アフリカの全割譲

ギリシヤの併合

賠償金の支払い

リバティリア合衆国

ハワイを除く太平洋領域の四季島への割譲

アラスカの四季島への売却

鹵獲兵器特に艦艇の返還（費用は全額リバティリア合衆国が負担）

ブリテン王国

ブリテン島全土及び自治領植民地の返還

亡命政府の帰還

鹵獲兵器の返還（費用は相手国が負担）

まず会議は満州国の承認すると同時に優れた四季島皇国軍を褒める事から始まった

そして事前に協議を済ませている永江とハルはすぐさまアラスカの金額と鹵獲船舶のリストの作成に取り掛かったが残りの三国については揉めに揉めたブリテン政府はオーストリゼア、ニュージーランドの連邦脱退とインド独立やアフリカの割譲各占領地の自治政府の設立を意地でも認めず、イタロスはアフリカは全土を要求し続けた、そしてドイツは亡命政府の帰還を認めなかった、ここで四季島政府がベルギウムとネーデルラント両国については帰還を認めてはどうかと提案した、

ドイツ側はこの四季島政府の意見に驚きつつ今日は閉会すべきと意見を出し閉会した、その夜ドイツ側は四季島の代表団にどういった意図があつたのかと尋ねると

永江「知つての通りベルギウムとネーデルラントは我が国の鎖国前からの友邦国、いくら今次大戦で敵だったとはいえある程度配慮は必要なのだ、それにこの帰還を認めるなら我が国が貴国に貸し付けている資金の利払いや期限の切れた貸付金の返済を一時延期してもよいと上は考えている」

リッベントロップ「そ、それは」

リッベントロップが驚くのも当たり前であつた当時借金としてナチスドイツが四季島政府より借り受けているのは円建ての貿易未払金約7000億円現代換算で約700兆また借入金約500億円現代約50兆円軍艦輸送船などの建造費総額約150億円現代換算約15兆円その他雑費約20億円現代換算約2兆円等合わせていた約

750兆円に及んでいたさらにこれに利子が入る、利子は年利4%つまり年300億円の利子を支払っているのださらに復興費用の捻出に悩むナチスドイツ政府はさらなる借入を予定しているた、それは推定5000億円相当現代換算500兆円となりすでに支払期限を過ぎているものは500億にも登り未払いの利子は200億を超えていた、この金額は当時の税収550億ライヒスマルクを超えていた、そして問題なのは借入金のお半が円建てであったことだ、現在1円辺り1.5ライヒスマルクがレートとなり、それどころか日に日に円の価値は上昇していた

ドイツ財務省はこれの返済に頭を悩ましていた現在未払いで今期払いの借金は円建てで725億円ライヒスマルク換算1087億5000万とドイツの税収2年分に及んだ、さらに未払い総額7527億円ライヒスマルク換算1兆1290億5000万ライヒスマルク、ドイツ税収20年分に相当していた、四季島からは戦時延期は可能と云うが問題はすでに講和会議が開かれ、終戦まであと一息になっていることであつた。外交上踏み倒すことは不可能、ならば他国から取り立てるべしそれが賠償金を要求している理由でもあつた。その元金、利払いの一時延期、もはや選択肢は一つであつた

11月2日ドイツ代表団はベルギウム、ネーデルラント両国亡命政府の期間許可と両国全土からの撤兵を宣言その代わり10年間税収の3%をドイツに支払うように伝えた、驚くりバティリア、ブリテンの代表団に四季島の代表団がベルギウム、ネーデルラント両国の復興には四季島中央銀行による低金利の5年建て借金を予定していると発言した

これに喜んだのは議場に呼ばれていたベルギウム、ネーデルラント代表であつた、講和会議が開かれると聞いたときには国土は戻ってこないと思つていた彼らは前日の最後に復帰かと期待しつつ、復興にかかる費用に頭を抱え、復帰が決まったときも税収の3%をドイツに払わなければならぬと頭を悩ませそして四季島政府の発表により復興の原資が手に入ったと喜んだのだつた、

この日決まったことは両国の復帰程度であつたが、ルクセンブルク

について明日話し合いたいとドイツ側が提案していた、ルクセンブルク統治に意味を見いだせないドイツとしては直接統治をやめ税収の一部を徴収する間接統治に切り替える気であった

翌3日ルクセンブルク亡命政府の帰還とルクセンブルクの解放を宣言

同日四季島代表がバルト三国についてドイツ側に解放してどうかと提案、ドイツ側は税収の一部を徴収する事を条件にだし、結論を翌日に持ち越した

このように会場は四季島政府の提案をドイツ政府が一部変え了承する場所と成り果てていた、無論、自由ガレアの帰還と統治をブリテン王国は訴えたが、四季島政府はガレアはヴィシー政権という正当な政府が存在しており、自由ガレア政府を名乗る者達には正当な統治理由を持たぬことは明らかである、よって上記の要求を受け入れることはできない。

ただ認められた提案もあった、それはフィリピンにおいて統治機構に現地在住リバティリア人を登用する事とリバティリア軍を軍事顧問として派遣することであった、無論陸軍のみかつ人員の制限や監視要員の派遣など条件は着けられたが許可は降りたのである

会議が進む中ある問題が発生していた、それは軍縮についてであった、ドイツ政府は連合主要国に軍縮を要求していた

ドイツ要求

ブリテン

陸軍

兵員12万人まで制限士官は1800名予備役は5万人まで士官は500名まで

また機甲師団は2個師団まで兵員は2個師団で16000名まで戦車は1師団あたり70両まで

戦車は重量30トンまで50口径76.2mm以上の砲搭載禁止

装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については15.2cm以上の砲の装備禁止また76.2mm以上の砲は300門までとする

海軍

兵員12万人まで士官1万名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量14万トンまで個艦は3万トンまで

航空母艦総排水量7万トンまで個艦は2万トンまでなお、単艦のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量19万トンまで個艦は1万トンまでなお20.3cm砲搭載の重巡洋艦は全体の20%とする

軽巡洋艦は15.5cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量12万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

潜水艦総排水量5000トンまで個艦8000トンまで

非武装艦艇は総排水量25万トンまで個艦8000トンまで

王立補助艦艇隊の解体

空軍

兵員7万人まで士官は1500名まで

保有する航空機は時速650km以上を出してはならない

保有機数は600機まで爆撃機は全体の5%まで搭載可能な爆弾は1トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は搭載してはならない

リバテイリア

陸軍

兵員18万人まで士官は2500人まで予備役は7万人まで士官は10000人まで

また機甲師団は2個師団まで兵員は2個師団で16000名まで戦車は1師団あたり70両まで

戦車は重量30トンまで50口径76.2mm以上の砲搭載禁止

装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については15.2cm以上の砲の装備禁止また76.2mm以上

の砲は450門までとする

州兵は州総人口の0.5%までとする

海軍

兵員14万人まで士官1万4000名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量20万トンまで個艦は3万トンまで

航空母艦総排水量11万トンまで個艦は2万トンまでなお、単艦のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量24万トンまで個艦は1万トンまでなお20.3cm砲搭載の重巡洋艦は全体の20%とする

軽巡洋艦は15.5cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量18万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

潜水艦総排水量10000トンまで個艦8000トンまで

非武装艦艇は総排水量28万トンまで個艦8000トンまで

沿岸警備隊

兵員1万2000まで士官は1500名まで

船舶については総排水量9万トン個艦15000トンまでとするが15000トンクラスは全体の10%とする

飛行機材は30機まで速度時速350km以下航続距離800kmまでとする

空軍

兵員10万人まで士官は4500名まで

保有する航空機は時速650km以上を出してはならない

保有機数は900機まで爆撃機は全体の5%まで搭載可能な爆弾は1トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は搭載してはならない

この軍縮要求を提示された際両国代表は即刻文句を口にしていた、そしてイタロス、四季島代表の今日は閉会し翌日以降に持ち込む、そ

して両国共に軍縮案を提出することとなった

そして11月9日両国は軍縮案を提出

ブリテン

陸軍

兵員22万人まで制限士官は2万8000名予備役は12万人まで士官は5800名まで

また機甲師団は6個師団まで兵員は6個師団で48000名まで戦車は1師団あたり150両まで

戦車は重量40トンまで50口径90mm以上の砲搭載禁止

装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については20・3cm以上の砲の装備禁止また12・5mm以上の砲は800門までとする

海軍

兵員60万人まで士官8万2000名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量35万トンまで個艦3万トンまで2隻までは5万トンまで

航空母艦総排水量24万トンまで個艦は2万トンまでなお、2隻のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量30万トンまで個艦は1万トンまでなお20・3cm砲搭載の重巡洋艦は全体の30%とする

軽巡洋艦は15・5cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量18万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

フリゲート、コルベット等は10万トンまで個艦10000トンまで潜水艦総排水量5000トンまで個艦8000トンまで

非武装艦艇は総排水量25万トンまで個艦8000トンまで

王立補助艦艇隊の縮小

空軍

兵員12万人まで士官は1万3000名まで

保有する航空機は時速750km以上を出してはならない

保有機数は900機まで爆撃機は全体の15%まで搭載可能な爆弾は3トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は500kg以上搭載してはならない
リバテイリア

陸軍

兵員30万人まで士官は1万2000人まで予備役は7万人まで
士官は5000人まで

また機甲師団は5個師団まで兵員は5個師団で4万名まで戦車は1師団あたり70両まで

戦車は重量35トンまで50口径76.2mm以上の砲搭載禁止

装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については15.2cm以上の砲の装備禁止また76.2mm以上の砲は1000門までとする

州兵は州総人口の0.5%までとする

海軍

兵員25万人まで士官2万8000名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量27万トンまで個艦は3万トンまで

航空母艦総排水量13万トンまで個艦は2万トンまでなお、単艦のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量30万トンまで個艦は1万トンまでなお20.3cm砲搭載の重巡洋艦は全体の20%とする

軽巡洋艦は15.5cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量21万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

その他戦闘艦艇は11万トンまで個艦1000トンまで
潜水艦総排水量10000トンまで個艦8000トンまで

非武装艦艇は総排水量30万トンまで個艦8000トンまで

沿岸州に州海軍の許可総排水量4500トンまで個艦8000トンまで

沿岸警備隊

兵員1万2000まで士官は1800名まで

船舶については総排水量9万トン個艦1500トンまでとするが1500トンクラスは全体の10%とする武装に76.2mm以上の砲の搭載禁止

飛行機材は30機まで速度時速350km以下航続距離1000kmまでとする

空軍

兵員12万人まで士官は3500名まで

保有する航空機は時速650km以上を出してはならない

保有機数は1200機まで爆撃機は全体の10%まで搭載可能な爆弾は1トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は搭載してはならない

各州軍に航空機20機まで速度580kmまで武装は30口径まで爆装禁止ロケット弾禁止

軍縮をする気が無いブリテンとするはするけどそこまで縛りたくないリバテエリアにドイツ代表が激怒した

これに対して四季島代表が助け舟を出していた

ブリテン

陸軍

兵員14万人まで制限士官は2万名予備役は5万人まで士官は5000名まで

また機甲師団は3個師団まで兵員は3個師団で24000名まで戦車は1師団あたり70両まで

戦車は重量35トンまで50口径76.2mm以上の砲搭載禁止

装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については15・2 cm以上の砲の装備禁止また76・2 mm以上の砲は600門までとする

海軍

兵員16万人まで士官1万8000名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量17万トンまで個艦は3万トンまで

航空母艦総排水量9万トンまで個艦は2万トンまでなお、単艦のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量22万トンまで個艦は1万トンまでなお20・3 cm砲搭載の重巡洋艦は全体の20%とする

軽巡洋艦は15・5 cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量15万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

フリゲート、コルベット等は9万トンまで個艦1000トンまで

潜水艦総排水量5000トンまで個艦800トンまで

非武装艦艇は総排水量25万トンまで個艦8000トンまで

王立補助艦艇隊の縮小

空軍

兵員8万人まで士官は2500名まで

保有する航空機は時速650 km以上を出してはならない

保有機数は800機まで爆撃機は全体の5%まで搭載可能な爆弾は1トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は搭載してはならない

リバティリア

陸軍

兵員28万人まで士官は1万8000人まで予備役は7万人まで士官は1000人まで

また機甲師団は5個師団まで兵員は5個師団で4万名まで戦車は1師団あたり70両まで

戦車は重量35トンまで50口径76・2mm以上の砲搭載禁止
装甲車自重20トンまで武装は50口径以上の装備禁止

砲については15・2cm以上の砲の装備禁止また76・2mm以上の砲は700門までとする

州兵は州総人口の0・5%までとする

海軍

兵員22万人まで士官2万6000名まで

軍艦の所持規制

戦艦総排水量27万トンまで個艦は3万トンまで

航空母艦総排水量13万トンまで個艦は2万トンまでなお、単艦のみ3万トンを許す

巡洋艦総排水量29万トンまで個艦は1万トンまでなお20・3cm砲搭載の重巡洋艦は全体の20%とする

軽巡洋艦は15・5cm以上の砲を搭載禁止

魚雷は6本まで

駆逐艦総排水量21万トン個艦排水量1800トンまで

武装ロンドン軍縮条約と同様

雷装は6本まで

その他戦闘艦艇は11万トンまで個艦1000トンまで

潜水艦総排水量10000トンまで個艦8000トンまで

非武装艦艇は総排水量30万トンまで個艦8000トンまで

沿岸州に州海軍の許可総排水量4500トンまで個艦8000トンまで

沿岸警備隊

兵員1万2000まで士官は1000名まで

船舶については総排水量9万トン個艦1500トンまでとするが1500トンクラスは全体の10%とする武装に76・2mm以上の砲の搭載禁止

飛行機材は30機まで速度時速350km以下航続距離1000kmまでとする

空軍

兵員12万人まで士官は3000名まで

保有する航空機は時速650km以上を出してはならない

保有機数は1200機まで爆撃機は全体の5%まで搭載可能な爆弾は1トンまで戦闘機は全体の60%まで武装は50口径以下ロケット等の機銃以外の武装は搭載してはならない

各州軍に航空機20機まで速度580kmまで武装は30口径まで爆装禁止ロケット弾禁止

重武装警察の設置

37mm砲までの火砲の装備

機関銃は50口径発射速度毎分450発まで

人員は全警察官の0.5%とする

地続き国境警備隊の設置

人員1kmあたり15人まで

1kmあたり0.1門の37口径50mm砲の配備許可

そして12月8日揉めに揉めた講和条約オルレアン条約締結最終的にブリテンは四季島の軍縮案を飲んだ、また植民地については南アフリカはそのまま、インドは独立準備委員会を設置することで合意となった